note:
this book was originally in right to left, if using a pdf reader make sure to set it like that for the best experience

the colour pages and front/back covers are not part of this PDF, but you can see my scans here https://imgur.com/a/gXrHUBE

uh i need an extra page here because if i don't it'll be messed up

uh look at this image



EVERGRACE
クレストを負いし者

Contents

EVERGRACE

クレストを負いし者

高瀬美恵



Illustration●Ken Sugawara
Design●Nami Takano

第一章

炎は一瞬、宝石のような緑色に染まって輝きを増し、すぐにまた元のオレンジ色に落ち着いた。

フェルクが投げ入れた酒のせいだ。ヨグルの実から作った酒は、鮮やかな緑色の炎を発して燃える。フェルクはそれを面白がって、さっきから何杯もたき火に浴びせかけているのだ。

「もったいないじゃねえか」

酔っぱらった誰かが声をかけたが、フェルクは聞き入れなかった。自分が下戸なものだから、この時間を持て余しているらしい。

荒野の夜を、たき火の明かりが照らしている。虫すら鳴かぬ荒れ果てた大地に、ストルタ軍の夜営地だけがぽっかりと明るく賑やかだった。

たき火の数は、点々と、二十ばかりもあるだろうか。その周囲にいくつもの天幕が張られているが、中で休んでいる兵士はほとんどいなかった。皆、最後の戦いを前にした昂ぶりを抑えきれず、火の周りに集まっている。

酒も料理も豊富にある。火を囲む男たちは、赤らんだ顔ででたらめな歌を高吟したり、思い思いに寝そべったり、好き勝手に振る舞っていた。

中には、些細なことが原因で取っ組みあっている連中までいる。暇を持て余しきっているという意味では、皆、フェルクと同じだった。

「――少し、注意したほうがいいのかな」

リヤナが、喧嘩のとばっちりで飛んできた杯を避けながら、苦笑まじりに言った。

ユテラルドは、聞こえなかったのか、返事もせずに静かに炎を見つめている。周囲の騒がしさから、そこだけぽっかり浮いているようだった。

リヤナはその厳しい横顔にちらっと目をやって、軽いため息をついた。

酒をたき火に注いで遊んでいたフェルクが、振り返って舌を出す。

「やめとけ。小うるさいこと言ったって、誰も聞きゃしねえよ」

「とはいってもね……」

リヤナは目を細め、上半身を少し伸び上がらせて、南方の斜面をうかがった。

荒れ野はゆるやかな傾斜を描きながら、大海のように茫漠と広がっている。目を凝らすとはるか彼方に、漁り火を思わせる弱々しい明かりが灯っているのが見える。

むろん、船の明かりではない。荒れた大地に張りつくようにして、ひとかたまりの集落が存在しているのである。

かつてはストルタと勢力を二分したモレアの村落である。今や、飢饉と戦争とで疲弊し、壊滅のふちに立たされた村だ。

二つの村の対立の歴史は古く、根が深い。その原因は、二つの森の背後に大きく広がっているビリヤナの森にあった。

ビリヤナは、万物の母とも呼ばれる聖なる森である。周囲の大地の荒廃とは対照的に、青々

と葉を茂らせている。その豊かさは、二つの村の人々に相反する感情を呼び覚ました。すなわち、モレアの人々がますます森への信仰を深めたのに対し、ストルタの人々は、かえって森に対する反発と憎悪を強めたのである。

森が大地の力を吸い上げてしまうために、土地が荒れるのだ——そう考えたストルタの民は、森を切り拓いて農地にしようと主張した。モレアは強く反対し、ついには双方の血を流すほどの争いに発展していった。

ストルタ、モレアを含む四つの村は、統一国家の建設を目指してフォントレールという連合を作ったが、モレアはこの中で次第に孤立していき、ついに脱退に至った。戦いはますます激化し、モレアは敗戦を重ねて追い詰められていった。

リヤナたちの部隊は、モレア軍掃討のためにこの斜面に陣を張っているのである。村に立てこもっている敵勢は、わずかだった。彼らさえ討ち取れば、長い戦いが終わる。

ここまで追い詰めて攻めあぐねているのは、敵を率いている指導者に、これまで何度も煮え湯を飲まされてきているからだ。

連中はこれまで、火、水、石、風などを利用し、そのときの局面に応じて意表をついた攻撃を仕掛けてきた。もちろん、そのくらいのことでこちらが致命的な損害を被ることはないのだが、それだけに軍の士気が削がれること甚だしい。まるで、うるさい虫にチクチクと刺されるような苛立ちが軍に広がって、せっかくの勢いを塞き止められてしまうのである。

今回も、無理攻めをすれば、どんな罠が仕掛けられているかわからない。夜、しかも敵陣を戦場とすれば、どうしてもこちらが不利である。

もはや無駄な犠牲を出す必要はなかった。ここは慎重を期して、夜明けを待とうと構えているわけだ。

勝利を目前にして、気のゆるみが生じるのは、仕方のないことだった。皆、戦いに疲れている。

リヤナは不安を覚えないでもなかったが、今さら、戦況は変わりようがないのだと気を取り直した。

歴史は今、大きな転換期を迎えている。四つの村が並び立っていた時代から、巨大な統一国家の時代へと。モレア軍の残党がいかに粘ったところで、この大きな歴史のうねりはもはや変えようがない。

「とっとと諦めりゃいいのにな、奴ら。どうせ負け戦なんだからさ。往生際の悪い連中だぜ」

フェルクがそう言って、リヤナの隣に座り直した。

彼はリヤナより三つばかり年上で、確か今年二十二になるはずだ。ちょっと上向いた鼻や、大きな口のあたりに、未だ少年らしさを留めている。これでもストルタの指導者の一人息子で、あり、統一国家フォントレールが成立した暁には、その重鎮の一人となってゆくはずなのだ

が、今のところはとてもそんな風には見えない。悪ガキがそのまま育ってしまったような、自由奔放な若者である。

リヤナは微笑んだ。

「いよいよ、終わるんだね」

「ああ」

フェルクは杯を手に取って、リヤナに向けて気どって掲げた。

リヤナがつきあって乾杯してやると、フェルクは飲めないはずの酒をちょっとだけ舌の先で舐めて、大げさに顔をしかめた。

「夜明けとともに突入だな」

「みんながそれまでに酔いつぶれたりしてなきゃいいけど」

「そこまでバカじゃないさ。みんな、明け方の戦いに備えて、英気を養ってるところだ」

フェルクは軽く請けあった。

リヤナは騒いでいる男たちをくるっと見回し、首をすくめた。

「……そう思うことにするよ」

「暗いな、おまえ。あいつの性格が伝染ったんじゃねえの？」

フェルクはユテラルドのほうを指差した。

リヤナはあわててその手首をつかんで下げさせた。ユテラルドは聞こえていないのか、ある

いは馬鹿馬鹿しくて取りあう気にもならないのか、反応しない。

リヤナはユテラルドに声をかけた。

「そろそろ休むかい？　疲れただろ」

ユテラルドはちらっと目を上げたが、やはり返事はなかった。友の瞳にかすかに苛立ちの色が浮かんでいるのを見て取り、リヤナは口をつぐんだ。

気が昂ぶっているのだろう。無理もない。誰よりもこの日を——モレア滅亡の日を待ち望んでいたのはユテラルドなのだ。こんな馬鹿騒ぎはさっさと切り上げ、すぐにでも戦に突入したいに違いない。

しかし、彼の強引さは、時として味方との摩擦を引き起こす。ユテラルドは優れた剣の使い手には違いないが、彼一人でこの戦を勝ち抜くことは不可能だ。

フェルクはユテラルドを見て、いかにも気分が悪そうに鼻を鳴らし、顔を背けた。

間の悪いことに——背けた視線の先にまた一人、陽気なフェルクと馬の合わない男が座っていた。

フェルクはにじり寄って、今度はそちらに絡み始めた。

「よう、アルフトアイン。物騒なもの持ち出してるな？」

黒髪の剣士は顔を上げようともせず、唇の端で笑った。

膝の上に、大振りの剣をのせている。幅広の両刃が、炎を映して鈍い光を放っていた。

リヤナは一度、興味をそそられて握らせてもらったことがあるが、その重さによろめいた。リヤナとて四剣主の一人と謳われるほどの使い手であり、力に自信がないほうではないのだが。戦場で軽々とこれを振り回すアルフトアインの膂力は、まず並大抵ではない。

アルフトアインは先ほどから、黙々とこの武器の手入れを続けているのである。剣の錆を落とし、丁寧に研ぎあげている。周囲に溶けこまないのはいつものことだが、それにしても、周りがこれだけ浮かれ騒いでいるのに素知らぬ顔を続けていられるのは大したものだ。

ユテラルドのように、戦への渇望を隠さず苛ついているのとはまた違う。まるで自分の家でくつろいでてもいるかのように泰然自若として、愛用の剣を慈しんでいるのである。

「ひょっとして、まだそいつを振り回し足りないのか？　物騒な奴だ」

からかうように言ったフェルクに、アルフトアインは珍しくまともに応じた。

「戦は終わっていない。武器を磨くのは当たり前のことだろう」

周りの連中への嫌味とも取れるが、幸い、アルフトアインの低い声を耳に留める者はいなかった。

ただ、フェルクは鼻白んだようだった。

「熱心だなあ。その段平、振り回す機会があればいいけどさ」

「おまえはもう、勝った気でいるようだが」

アルフトアインは剣を炎にかざすように持ち、刃の具合を確かめた。

「俺はまったくそんな気になれないのでな」

「まさか、今から奇跡の大逆転が起きて、戦況がひっくり返るとでもいうのかい？」

「それはない。どう転んでも、モレアの滅亡は避けられん。だが」

アルフトアインは切れ長の目をフェルクに向けた。年齢不詳の精悍な顔に、皮肉な笑みが浮かんでいた。

「戦いの勝敗と、人の運命とはまた別だ。自軍が勝利をおさめたところで、自分が命を落としたら意味がない」

フェルクは唖然としたようだった。自分が命を落としたら――この陽気な若者は、戦場を駆け回る時も、そんな可能性を一瞬たりとも考えたことがなかったに違いない。

アルフトアインは再び剣に目を戻して続けた。

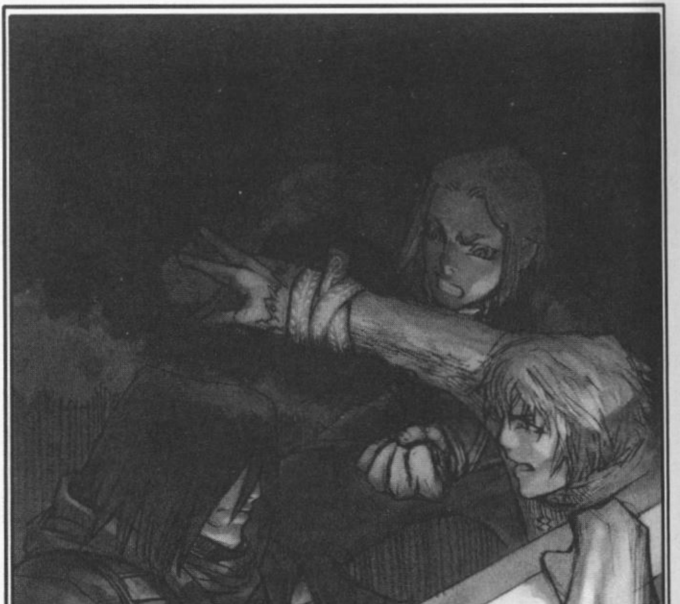
「モレアは強いぞ。奴らは、戦わねばならない理由をつねに胸に刻んでいる。しかも今や追い詰められて死に物狂いだ。いかに無勢といえ、侮れる相手ではない」

フェルクの顔が、みるみる赤く染まった。

「オレたちが――」

声を震わせて、怒鳴りつける。

「遊び半分で戦ってるとでも言うのか！　戦う理由だ？　おまえなんかに言われたかねえ、オレたちは片時だって忘れたことはねえよ。所詮、よそ者のおまえにはわからねえんだよ、オレ



たちがどんな思いで……！」

「フェルク」

リヤナが止めに入った。

これ以上ことを荒立てると、他の連中にまで苛立ちが伝染する。最後の戦を前にして、動揺は避けたかった。

フェルクも察したのだろう。まだ言い足りないのか肩を震わせていたが、なんとか言葉を飲み込んで、ぷいっとそっぽを向いた。

アルフトアインはまた、何事もなかったかのように剣の手入れに戻っている。リヤナはそっとアルフトアインの横顔をうかがった。

この黒髪の剣士は、軍の中で明らかに浮いている。それは、彼が金で雇われた傭兵だからだ。

他の者は皆、ストルタやセクルエの出身で、それぞれに理想を胸に抱いて戦っている。フェルクが叫んだ通りだ。モレアを滅ぼし、ビリヤナの森を焼き、ゆくゆくは統一国家を打ち立てて、より明るい未来を作る。そのための戦いである。

アルフトアインは違う。戦が終わり、金を受け取れば、新しい国の建設を見ることもなく、またどこかへ流れて行くのだろう。

リヤナはアルフトアインの生き方には馴染めなかったが、彼の戦士としての能力には一目置いていた。だから、彼が発した警告めいた言葉は気にかかった。

まだ戦は終わっていない。最終的な勝利だけが目的ではない。自軍の損害を最小限に留め、兵の命を無駄にしないこと。リヤナは気を引き締めた。

ユテラルドが立ち上がった。

何も言わず、天幕のほうへ向かって行く。リヤナも立って、後を追った。

「休むの？」

「ああ」

「じゃ、僕も」

「リヤナ」

ユテラルドは右手を持ち上げ、その甲を左の手でそっと撫でた。

彼の右手には布が巻かれ、肌を隠している。その下にある秘密を知っている者は、軍の中にはリヤナ以外にいない。

うつむき加減で右手を撫でながら、ユテラルドはかすれた声でつぶやいた。

「……オレは、死んでもいいよ」

「え？」

「モレアの滅亡をこの目で見届けられるなら。オレは、いつ死んでもいい」

リヤナは足を止めた。ユテラルドはそのまま歩き続け、四剣主の寝所と決められている天幕へ入って行った。

リヤナは呆然として、その後ろ姿を見送った。

無口な幼なじみが抱えた闇の深さを、あらためて思い知らされた。

結局、ユテラルドと同じ天幕で眠るのは気がひけて、リヤナはそのままフェルクたちの元へ戻った。

兵士たちの陽気な宴会は、放っておけばいつまでも終わりそうにない。リヤナは頃合いを見計らって、皆に声をかけることにした。

「そろそろお開きにしよう。明朝、日の出とともに戦を仕掛ける。いよいよ最後の戦いだ。みんな、今夜はゆっくり休んでくれ。酔いを残すんじゃないぞ」

「このくらいじゃ、飲んだうちに入らない」

酒豪を自負する男たちのあいだから笑い声があがった。まだ飲み足りないぞ、と酔いに任せて叫ぶ声もあったが、リヤナに逆らおうとする者はいなかった。

リヤナは一団の中では最年少と言っていいほど若いが、兵たちから尊敬されている。ユテラルド、フェルク、アルフトアインと並ぶ四剣主の一人であり、ストルタ軍の快進撃に大きく貢献してきたからだ。しかも四人のうちで一番温厚で、考え深い。彼の周りには自然と人が集まった。

見張りを数人残し、たき火も二つだけを残して消すことになった。男たちが三々五々、それ

ぞれの天幕へ引き上げかけた時だった。
「リヤナ」
フェルクが声をあげた。
「あれ、なんだ」
フェルクは伸び上がって、モレア村の方角を指差した。
リヤナは目をこらした。
村の灯は数カ所を残して消えている。そこからぽつんと一つ、松明のような明かりが離れてこちらに向かってくる。
リヤナは緊張した。これまでの経験から考えて、これは連中の作戦である。なんだかわからないが、やはり何かを仕掛けてきたのだ。
「全員、起こしてくれ」
リヤナは言いながら、向かってくる明かりの正体を突き止めようと、前へ進み出た。フェルクが素早く天幕の方向へ走る。
いつの間にやら、アルフトアインの長身がリヤナのかたわらにあった。
「あれは……？」
リヤナは、アルフトアインの助言を求めて彼を見上げた。
無愛想な傭兵は、大剣を握って頭を振った。

「牛かな。何か動物の角に松明をくくりつけて走らせているようだ」
「なんのつもりで？　牛の群れに僕らを踏みつぶさせようっていうのか？」
だが、それならすでに地響きが伝わってきてよいはずだ。月明かりで見える限り、走ってくる獣は一頭だけのようだった。
リヤナは呆れた。
「血迷ったのか。あんな動物、一頭ぐらいけしかけたところで、なんの役にも……」
突然、アルフトアインが身を翻したのでリヤナは驚いた。
「どうしたの？」
「逃げる」
「え？」
リヤナは瞬いた。
「アルフトアイン？」
傭兵は振り返った。深刻な表情ではない。むしろ、笑いをこらえたような顔をしていた。
「おまえもさっさと逃げたほうがいい。その綺麗な顔が台無しになるぞ」
「……何？」
「牛が、大群を連れてくる。ビリヤナの森の、クロ蜂の群れだ」
「な……」

リヤナは目を見開き、あせってもう一度、牛のほうへ向き直った。

闇にまぎれて、よく見えない。だが、言われてみれば、確かに怒ったような虫の羽音が空気を震わせて伝わってくるようだった。

リヤナは一瞬、頭の中が真っ白になって立ちすくんでしまった。こんな事態は、彼の知る限りの戦いの教則にはなかった。

ビリヤナの森のクロ蜂は、小指の長さほどの大きさの獰猛な昆虫である。群れをなして行動し、怒らせると鋭い針で襲いかかってくる。毒は持っておらず、刺されてもよほどのことがない限り大事はないのだが、刺された箇所は赤く腫れ上がり、しばらく痛がゆい痕が残る。

牛の後に続いて、黒い幕のような蜂の群れが続いてくるのが確認できた瞬間、リヤナは自分でも情けないような悲鳴をあげていた。

「逃げろ！」

たちまち、ストルタ軍は恐慌に陥った。

目を血走らせた雄牛が、蜂の群れに追われて飛びこんでくる——。

急遽調達した薬は、まったく量が足りず、全員には行き渡りそうになかった。

特に被害のひどい者から順に手当てをしていく。逃げ遅れて、全身数十カ所を刺された者もいる。放っておくと全身をかきむしって苦しがるので、手足を縛りつけておかねばならない。

本人にとっても地獄だろうが、見ている周囲の者も苦しくなる。

リヤナは腕を二カ所刺されただけですんだが、それでも、ぷつぷつと残った痕が痛んで、苛々した。

この小さな傷痕は、まさにモレア軍の存在そのものだ。深刻な傷ではない。だが、心を苛立たせる。

リヤナたちの部隊は、結局、蜂の群れに追われて拠点を退却し、ちりぢりになって逃げ惑ったのである。四剣主を擁し、数々の戦功を挙げてきた輝かしい部隊にしては、あまりに情けなく滑稽な顛末だった。

夜はすっかり明けていた。なんとか蜂の群れを撃退し、天幕を張り直したが、兵士たちはまったく戦意を喪失していた。

武器を取って相手と戦い、それで負けたのなら、まだいい。たとえ甚大な被害を出しても――いや、犠牲者が多ければなおさら、敵を憎む気持ちが士気の昂揚につながる。

だが、こんな負け方は気持ちを挫くだけだ。兵士たちはみな呆然とし、互いに目を背けて、黙りこむばかりだった。つい数刻前までの馬鹿騒ぎが嘘のようだ。悪態をつくことすらできずにいる。

追い詰めたはずのモレア残党は、混乱の隙をついて逃げ出していた。彼らはモレア村をいよいよ放棄し、流浪の兵団となったのだ。拠点がないだけに、叩くのが一層難しくなった。

一度は捕まえたと思った蜂を——いまいましい譬えだが——ひねりつぶす寸前に逃してしまったようなものだ。部屋の中を飛び回るうるさい羽音を気にしながら、いつまでも眠れない夜を過ごさなければならない。

　これというのも、すべて——。

「あのアマ」

　口汚く罵ったのは、フェルクだった。

　口をきく気力もなくうなだれている兵士たちの中にあって、一人だけ元気なのは見上げたものだ。左目の上を刺されて、まぶたが開かないくらい腫れ上がらせているのが痛々しい。

「ぶっ殺してやる。卑怯な真似ばかりしやがって！　正々堂々と勝負しやがれってんだ」

　腰かけ替わりに置いた樹を蹴飛ばし、かえって足を痛めて顔をしかめている。周囲では誰も、笑う気力もなかった。

　あのアマ、とフェルクが呼ぶのは、モレア残党を率いている指導者レステアのことだ。

　年齢は、リヤナやユテラルドとほとんど変わらないのだという。リヤナは遠目に見たことがあるきりだが、燃え立つような赤毛をなびかせた少女だった。襟の詰まった男のような服を着て、自分よりはるかに体格のいい男たちを率いていた。

　もちろん職業軍人ではない。詳しい経歴は知らないが、ストルタとモレアの戦いが勃発するまでは、ごく普通の生活を送っていた「お嬢さん」にすぎないはずだ。

そんな少女一人に、名だたる四剣主がきりきり舞いさせられているのである。フェルクが怒り狂うのも当然だった。

フェルクはくるっと振り返って、アルフトアインを睨みつけた。傭兵がかすかに漏らした笑いを、鋭く聞き咎めたものらしい。

「何がおかしい！」

「別に」

「笑いやがっただろう！」

「卑怯だの正々堂々だの、可愛らしいことを喚いているからさ」

「何をぉぉ!?」

いきり立って飛びかかろうとしたフェルクを、あわててリヤナが押さえつけた。

アルフトアインは、また笑った。

「言ったはずだ。モレアは強い。レステアは戦のやり方を心得ている。正々堂々と突っ込んでくれば、ひとたまりもないさ。あれだけの手勢で戦うには、せいぜい、卑怯な方法で攪乱するしかない」

無論、フェルクにだってわかっているはずなのである。そのくらいのことは。その証拠に、言い返しもせずにぎりぎりと歯を食いしばっている。

リヤナは言った。

「だけど……彼女たちはなぜ、無益な戦いを長引かせるようなことをするんだろう。互いに疲弊するばかりで、意味がないのに。もう、どうしたってモレアに勝ち目はないって、わかってるはずなのに……」

「モレアには戦う理由がある」

アルフトアインの説明は簡潔だった。

リヤナはフェルクを押さえていた手を離し、顔を上げてモレア村の方角を眺めた。

すでにそこは無人である。念のため、偵察の兵を出してみたが、猫の子一匹残っていないという報告だった。

ビリヤナの森の護り手であったモレア村は、ついに壊滅したのだ。ただ、鼠のように逃げ回る一党を残して。

喜ばしいことなのに、リヤナの心は晴れなかった。

ビリヤナの森は、モレアの村のすぐ背後に黒々と広がっている。遠目にも、その勢いがよくわかる。天に挑むほどに枝を広げ、葉を茂らせた、生命力あふれる眺めである。

森と対比すると、地面に張りつくように固まっているモレアの家々はいかにもちっぽけだった。森は、翼を広げて飛び上がろうとする猛禽に似て、今にもモレア村を飲みこもうとしているようにも見える。周囲の土地の荒れ果てた様子に比べると、ビリヤナの森の豊かさは、いっそ憎々しいほどである。

それこそが、モレアとストルタの「戦う理由」だった。

アルフトアインに言われるまでもない。リヤナにだって、よくわかっている。理性では、こんな無益な戦いはさっさと終わらせたほうが互いのためだと思う。だが、レステアたちが武器を捨てない理由は、リヤナたちが戦い続ける理由の裏返し。どちらにとっても、痛いほどに切実なのだ。

森を滅ぼすためにリヤナたちは戦い、守るためにモレア軍は戦う。ビリヤナの森がある限り、モレア軍はどこまで追い詰められようとも降参しない。――できないのだ。

逆の立場なら、リヤナだって同じ選択をするだろう。たとえ自分が最後の一人になろうとも、決して投降など考えないはずだ。

この土地に生きる人間は、皆、ビリヤナの森にその運命を定められる。傭兵のように、風の向き次第で生き方を変えることは許されない。

リヤナは森から目を背けた。苦々しい気持ちだった。土地ばかりでなく、心の中まであの森に浸食されてはたまらない。

「レステアたちには、なぜわからないんだろう」

胸の中で何度も繰り返してきた疑問が、つい口をついて出た。

「あの森がすべての不幸の源だと、なぜわからないんだろう。森のせいで大地が荒れていることは、一目瞭然じゃないか。レステアほど賢い人間が、なぜ現実を見ようとせず、古い信仰を

守ろうとするんだろう。彼女たちが考えを改めさえすれば、和解の道だって……」
リヤナは口をつぐんだ。
そっと、ユテラルドのほうをうかがう。その表情を見た瞬間、自分が勢いにまかせて失言を犯してしまったことを悟った。
ユテラルドの顔は険しかった。赤い瞳が、今にも燃え上がりそうな怒りをこめてリヤナを睨んでいる。
視線が絡みあった。リヤナが口を開くより早く、ユテラルドが言った。
「和解？　寝ぼけるな。ありえない」
短く区切った言葉が、矢のように吐き出される。
「モレア村の人間は、最後の一人まで殺す。たとえ降服を申し入れてきたとしても、だ」
斬りつけるように激しい語調だった。ユテラルドは一息に言い終えると腹立たしげに息をつき、その場を離れた。
リヤナは唇を噛んでうなだれた。皆の前で、ユテラルドから、ほとんど罵倒に近い厳しい言葉を浴びせられたことが辛かった。心がひりひり痛んだ。
気まずい沈黙が残った。フェルクがやっと、気を取り直したように笑い声をたてた。白々しい声だった。
「なんだ、あいつ。いつもはむっつり黙りこんでるくせに、やけに勇ましいじゃねえか。蜂に

追い散らされたのが、よっぽど頭にきたか?」

相槌を打つ者はなく、フェルクの笑い声は宙に浮いた。下手に茶化すことが憚られるぐらい、ユテラルドの語気は激しかった。

リヤナは迷った。ユテラルドの後を追おうかとも思ったが、かけるべき言葉が見つからなかった。

幼い頃から共に剣を学び、兄弟同然に過ごしてきたというのに、時々、ユテラルドが遠く感じられることがある。

彼の心に張りめぐらされた壁はあまりに強固だった。彼がいったん心を閉ざしてしまえば、リヤナにも他の誰にも、その内側に入っていくことはできない。

レステアが率いる残党を討てば――モレアを滅ぼせば、ユテラルドは救われるのだろうか。

彼の心の闇は本当に晴れるのだろうか。

リヤナには、わからなかった。

第二章

ほどけかけた布を、風が軽くなびかせた。
ユテラルドは気づいて立ち止まった。右手の甲に巻きつけた布は、血に汚れ、ほころび始めている。彼はそれをいったんほどいて、丁寧に巻き直した。
手の甲のあざは、前に確かめた時より濃さを増したようだ。ユテラルドは少し笑った。自嘲的な笑いだった。
子供の頃——彼がまだ何も知らぬ無垢であった頃は、このあざももっと目立たなかったはずだ。ユテラルドが人を一人殺すたびに、少しずつ色が鮮やかになってくる。まるで、流された血をあざが吸い取っているかのようだ。
呪いの烙印。そう呼ぶ者もいる。
なぜ、大人たちがこのあざを見て眉をひそめたのか。なぜ、母が悲しげにこの手の甲を撫でてくれたのか。幼い頃のユテラルドは、不思議に思っていた。

呪われたあざにまつわる記憶で、一番古いのは、自分の手のことではない。
それは、父の背中にあった。確か、ユテラルドがまだ四つか五つぐらいの時だったと思う。ある蒸し暑い日だった。突然、大雨が降った。その日は朝からずっと晴れていたのに、昼すぎから急に雲行きがあやしくなって、雷鳴を伴う豪雨になったのだ。たまたま外出していた父は、びしょ濡れになって家に戻って来た。

ユテラルドは父のために乾いた布を持って駆け寄った。父は暖炉の前で服を脱ぎながら、「参ったよ」と苦笑した。

ユテラルドは父の背後に回って濡れた身体を拭こうとし、ふと手を止めた。服を脱いだ父の背に、鮮やかな紋様が浮き出ていた。

ユテラルドはきょとんとしてそれに見入った。父は振り返り、息子を見た。

「どうした。早く母さんから、着替えをもらってきてくれ……」

言いかけて、息子が見入っているのに気づいたのだろう。父のいかつい顔に、苦笑が広がった。

「これが、不思議か」

自分の背中に腕を回して、おどけた仕草でトンと叩いた。

それは、ただのあざではなかった。目のような、星のような、はっきりした形を持っていた。まるで、見えない手が父の背に絵具をのせていったかのように。きれいだ、とその時ユテラルドは思ったのだ。

「父さん、それは何？」

父は髪を拭きながら答えた。

「クレストというんだ」

「クレスト？」

耳慣れない言葉だった。ユテラルドは小さくその言葉を繰り返してみた。
その時母が、乾いた服を持ってきた。
彼女が素早く夫に囁いた言葉は、ユテラルドにはよくわからなかった。後から思えば、おそらく、まだユテラルドに聞かせるには早いと釘を刺したのだろう。
父は袖を通しながら続けた。
「もう少し大きくなったら話そうな。おまえの、その手のあざのことも」
ユテラルドは自分の右手を見た。
その甲には、生まれた時から、かすかなあざがあった。色の薄い、形のはっきりしないあざだ。
父の背に浮き上がった模様の美しさに比べると、自分の手についたあざはいかにも弱々しく、頼りなかった。ユテラルドはがっかりした。
「クレストって何、父さん」
ユテラルドは尋ねたが、父はもう答えてはくれなかった。父の膝に手を置き、揺さぶっていると、母がたしなめた。
「まだユテラルドには難しいお話なの。もう少し大きくなってから、教えていただきなさいな」
ユテラルドは不満だったが、母の表情はなんだか悲しげで、それ以上聞いてはいけない気が

した。

ユテラルドが生まれたのは、ストルタと呼ばれる村である。

当時、エディンベリー大陸には四つの村があった。そのうちの一つがストルタだった。

村の暮らしは貧しかった。土壌は痩せ、作物はろくに育たなかった。天候も不順で、大雨が降ったかと思うと、何カ月ものあいだ日照りが続いたりした。せっかく育った作物が、雹まじりの雷雨のせいで全滅してしまうようなこともあった。

貧困はしばしば争いの種になった。四つの村は、境界線や水の権利などをめぐって、絶えず小競り合いを繰り返していた。ほんのわずかの利権のために、血が流されるほどの争いに発展することも少なくなかった。人々は疑心暗鬼となり、陰湿な陰口を叩きあった。

戦いはますます土地を枯れさせ、人の心を荒ませる。悪循環だった。あの頃、村はいつも灰色の空気に染まっていたように思える。

ユテラルドの父はストルタ村の中で指導的な地位にあったので、暮らしは幾分ましなほうだった。ユテラルドはしばしば、母に手を引かれ、貧しい家々を回ったものだ。飢えや病気のせいで動けなくなった老人に、食物や薬を配って歩いたりした。

暗い、荒れた家の中に横たわる老人たちの姿は、幼いユテラルドにはまるで幽鬼のように無気味に思えた。ストルタ村の暮らしは、つねに死と隣り合わせだった。

優しかった母は、自分の父母を慈しむように、彼らをいたわった。老人たちは痩せ細った腕で食物を受け取り、弱々しく礼を言いながら、語ったものだ。
——森が、また勢いを増しているようだな。
——わしらが飢えれば飢えるほど、あんなにたくさん葉をつけて。
——憎らしい。本当に、憎らしい。
母はおだやかに老人たちをなだめ、その口にパンのかけらを運んでやるのだった。
ある時、老人たちの嘆きをたっぷり聞いて帰る道で、ユテラルドは母に尋ねた。
「おじいさんたちが言ってる『森』って、ビリヤナの森のこと？」
母はユテラルドの手を引き、幼い足に合わせてゆっくり歩きながら答えた。
「そうよ」
「どうしておじいさんたちは、森が嫌いなの？」
「そうねえ……」
母は返事に困ったようだった。
ビリヤナの森は、ストルタ村のすぐ近くに広がる密林である。聖なる森とも魔の森とも呼ばれ、人々にとって禁忌の地とされていた。もちろんユテラルドも、決して近づいてはならないと教えられてきた。
「ビリヤナの森は、いつも青々と茂っているでしょう。他の土地では、なかなか作物が育たな

いっていうのに」
「うん」
「だからね、みんな、やりきれない気持ちになるの。あの森が土地の栄養を吸い取ってしまうから、私たちはこんなに貧しいんじゃないかって、そう考えてしまうのよ」
母の説明は、ユテラルドにもよくわかった。確かに、周りの荒れ野と比べて、森の勢いは異常だった。木々の豊かさはいっそ禍々しく、ユテラルドの目にはひどく恐ろしいもののように映っていた。
「昔は、ビリヤナの森はあんなに大きくなかったのだそうよ」
母は、遠方に見える森に目をやりながら、そう語ってくれた。
「今から百年も昔のこと。その頃、このあたりは、リューベーン帝国という国の領土だったの」
「リューベーン?」
「そう。とても豊かで、進んだ国だったと言われているわ。ビリヤナの森はまだ小さかったの。森の中に、トレドという名前の小さな村があってね、その村の人たちが森を守っていたの。トレド村の人々は、他の村とは全然行き来をせずに、ただ森を守ることだけを考えて暮らしていたのだそうよ」
「へぇ……」

「長いあいだ、平和な時代が続いていたの。ところが、ある時、リューベーン帝国の悪い人が、困ったことを思いついてしまったのね」
「何？」
「ビリヤナの森の力を、利用しようとしたの。そのために、大勢の兵士がトレドの村を襲って、森を護る巫女を傷つけてしまったの。巫女の大事な家族に、刃を向けたの」
「ひどい」
「ええ、ひどいわね。その瞬間、天罰が下ったの。巫女の力によって、リューベーンは消えてしまったの」
「消えた？」
「そう言われているわ。たった一晩のあいだに、栄えていた国が丸ごとなくなってしまったの」
ユテラルドは息を呑んだ。
「なくなったって？　どこへ行ってしまったの？」
「わからないのよ。それは、今でも謎のままなの」
「だって、おうちがたくさんあったのでしょう？　そこに住んでた人たちも、みんな消えてしまったの？」
「そう。消えてしまったのよ」
ユテラルドは怖くなり、母の手にぎゅっとすがりついた。

母はユテラルドをしっかり抱き寄せてくれた。

「リューベーン帝国が消えた後、その領土は森になってしまったの。今では、そんな帝国が存在した跡すら残っていないわ」

「森が、その国の人たちを飲み込んでしまったの？」

「そうね……そうかもしれないわね」

ユテラルドは森を見た。恐れと怒りをこめて、睨みつけた。

老人たちが顔をしかめてビリヤナの森を罵った理由が、はっきりわかった。森は貪欲な化け物だった。かつてリューベーン帝国を飲みこんだのと同じように、今また、ストルタ村の人々を飲みこもうとしているに違いないとユテラルドは思った。

ユテラルドの家には、時々、数人の男たちが集まった。

彼らは奥の部屋にこもって、何時間も議論していた。ユテラルドの寝室はその隣にあったから、彼はよく壁に耳を当てて父たちの話を聞いた。

もちろん、交わされている会話はユテラルドには難しすぎて、半分以上は理解できなかった。それでも、話題にされているのがビリヤナの森の問題であることはわかった。

中心になっているのは父であり、その意見に熱心に耳を傾けているのは、いずれもストルタの有力者たちだった。

「あれほどビリヤナの森が生い茂っているということは、つまり、その下の大地が肥沃だということだ。周辺の土地とは比べ物にならないくらいに」
父は力強い言葉でそう語った。賛同する声があがった。
「だから、あの森を切り拓き、畑地にすれば、豊かな収穫が期待できるわけだ。ストルタも、もちろん他の村も、今のような窮乏に悩まされることはなくなる。貧困がなくなれば、争いもなくなる。四つの村が、共に繁栄してゆけるんだ」
「だが――」
反対する声もあった。
「ビリヤナの森は世界を浄化する力をもつと言われている。あれを切り拓くなんて、そんなことが許されるだろうか。取り返しのつかないことになりはしまいか。リューベーン帝国だって、ビリヤナの森を侵略しようとした報いで滅びたのだと言われているではないか……」
たちまち、非難する声や賛同する声が沸き起こり、場が乱れた。皆を静めたのは、やはりユテラルドの父だった。
「帝国が一夜で消滅したなんて、あくまでも迷信にすぎない。森の怒りを買って国が滅びたなんて、そんなことが信じられるわけがない」
「しかし、現に、文献によれば……」
「私はそんな伝説など信じない。リューベーン帝国が滅亡したのは、森とは関係がない。天変

地異などが原因だったに違いない。そんな馬鹿馬鹿しい迷信にとらわれて、現在の窮乏から脱出する努力を怠るなんて、愚の骨頂だ」

父の言葉は、多くの賛同を得た。反対派には、それ以上返す言葉がないようだった。

隣室で盗み聞きしながら、ユテラルドは思わず手を叩きそうになった。

本当に、父の言う通りに森を切り拓くことができたなら。あのいまいましい森の木を切り倒して、そこに豊かな畑を作ることができたなら。

飢えに苦しむ老人たちの姿を見なくてすむ。人々の嘆きの声を聞かなくてすむ。村を覆っている重苦しい灰色の空気が晴れ、みんなが幸せになれる。考えただけで、胸が躍った。

話し合いはしばしば深更に及び、白熱した。回を重ねるにつれて、反対側の意見は少なくなってゆくようだった。父の主張が、皆に認められ始めたのだ。

話の中に、「モレア」という単語がよく出てきた。それは、ストルタの隣にある村の名前であった。

どうやら、モレア村の人々は、ストルタ側の意見に真っ向から反対しているらしい。彼らは、ビリヤナの森を聖なる土地とみなしている。切り拓くなんてもっての外であるとして、ストルタ村の人々、特にその中心であるユテラルドの父を目の敵にしているらしかった。

ある夜のことだ。その日は、近所に住む少女シャルアミが、父親と一緒に訪れていた。

シャルアミはユテラルドより年上で、よく面倒を見てくれる姉のような存在だった。彼女の

父も、ユテラルドの父親と同じように、ストルタの未来を憂えており、たびたび会議に加わっていた。

シャルアミはユテラルドと一緒に遊んでいるよう言われて、ユテラルドの部屋に引っこんだ。二人は、遊ぶよりもまず、並んでドアに耳をくっつけ、父親たちの話し合いを聞いた。

「難しいお話ね。ユテラルド、わかる？」

シャルアミは片目を細めて、小声で尋ねた。ユテラルドは「わかるよ」と胸を張った。

「そう、偉いね。どう思う？　お父さんたちの言ってること」

「もちろん、正しいと思う」

ユテラルドは、たびたびの盗み聞きで覚えた通り、父親たちの主張を繰り返してみせた。

「だってビリヤナの森のせいで、僕らの村はキュウ……キュウ……」

「窮乏」

「窮乏しているんだもん。あの森を切り拓けば、きっといい畑を作ることができるんだ」

「モレア村の人たちは反対してるんですってね」

「馬鹿なんだ」

ユテラルドは決めつけ、シャルアミは「そんなこと言っちゃいけないわ」とたしなめた。

「だって、シャルアミだってそう思わない？　お父さんたちの言ってることのほうが正しいって」

「そうね。わたしももちろんお父さんたちに賛成だけど……でも、モレアの人たちの考えも、ちょっとわかる気がするな」
　シャルアミは考え深げな表情でそう言った。
　ユテラルドは不満だった。
「どうして！　だって、森のせいで僕らの村はキュウ……キュウ……」
「窮乏。うん、それはもちろんわかるけど、だけど、森には不思議な力があると言われてるでしょう。ユテラルド、消滅帝国リューベーンの話を知っている？」
「知ってるよ、母さんに聞いた。だけど、そんなの、本の中の出来事だもの。本当のことじゃないもの」
「そうかしら。わたしはね、やっぱりビリヤナには大事な秘密があると思うのよ。あの森の木を切ったりしたら、よくないことが起こるかもしれない……」
「だったらシャルアミは、お父さんたちに反対なの？」
「……ううん」
　シャルアミは優しい顔で、首を横に振った。
「お父さんたちは立派だわ。毎晩のように話し合って、村の将来を真剣に考えているんだものね。お父さんたちが決めることなら、間違いはないって思うわ。ただ……ちょっと不安になっただけなの」

「大丈夫さ。シャルアミは怖がりだ」
　ユテラルドが言うと、シャルアミはユテラルドの生意気さに呆れたように笑ってみせた。
　やがて、会議が終わった。シャルアミの父が娘に「帰るぞ」と呼びかけた。ユテラルドは「またね」とシャルアミに手を振った。シャルアミも振り返してくれた。
　戸口のところで、シャルアミの父が、気がかりそうにユテラルドの父に言った。
「モレアの連中には気をつけたほうがいいぞ。最近、どうも過激な一派がいるらしいんだ」
「過激？」
「ああ。武力を行使してでも、森を守ろうとする連中さ。君は奴らにとって最大の敵だ」
「そうだろうな」
　ユテラルドの父は大げさな声を出した。
「なんといっても私は、聖なる森を滅ぼそうとする悪者だ」
「笑いごとじゃない。身辺には十分に気をつけてくれ」
「わかってる」
　そう言いながらも、父は微笑んでいた。忠告をあまり深刻には考えていないようだった。
　シャルアミは父親たちの会話を聞いて不安になったらしい。二人を見上げて、何か言いかけた。ユテラルドの父は、軽くうなずきながら言った。
「気にすることはないよ、シャルアミ。君のお父さんは心配性でね」

「そうかね」
と、シャルアミの父親が苦笑する。ユテラルドの父は笑った。
「モレア村の連中だって、そこまで馬鹿ではないさ。実際、ビリヤナの森に一番近いところにあるのは、我々ストルタとモレアだ。そして、四つの村の中で特に貧困に喘いでいるのも、ストルタとモレアなんだ。森の被害を一番深刻に受けている二つの村が、協力しあえないはずはないよ」
「しかし……」
「私は、彼らを説得する自信がある。結局勝つのは、力ではなく言葉だ。もちろん、君の忠告には感謝する。用心するから、心配しないでくれ」
シャルアミと父親は帰って行った。
母が、心配そうに父に寄り添った。
父は「大丈夫」と快闊に笑ってみせるばかりだった。

ユテラルドの手のあざは、なかなか父のように濃くならなかった。
どうかすると、消えてしまいそうになる。もっときれいに浮き出ないものかと、ユテラルドはこすってみたり、お湯につけてみたりした。
母は、ユテラルドがあざを気にしていることに気づくと、自分の両手でそれを包みこんで撫

てくれた。
「ユテラルド、あまり人前であざのことを口にしては駄目よ」
「どうして？」
尋ねると、母は返答に詰まった。
「それはね……中には、このあざを嫌う人もいるから」
「どうして？」
「頭の固い人はね、古い迷信を信じてしまうものなの」
ユテラルドにはよくわからなかった。きれいなあざなのに、なぜ嫌われるのだろう。
「お父さんの背中にもあるよ」
そう言うと、母は一瞬、強張った顔をした。
「他の人に、そんなことを言っては駄目よ」
「内緒なの？」
「そう。内緒よ」
母は暗い顔で言い聞かせた。ユテラルドは仕方なくうなずいた。
しかし、幼いユテラルドには、やはり母の言うことがわからなかった。どうしてこのあざが禁忌とされるのか、母が何を恐れているのか、わからなかった。

　ある日、ユテラルドは、近所の老婆の家へ一人で食べ物を届けることになった。いつもは母と一緒に行くのだが、その日に限って、急用が生じて母が行けなくなったのだった。
　心配そうな母に、ユテラルドは「大丈夫さ」と父の口真似をして請けあった。行き先はもう何度も通っている家だし、その家に住む老婆とも顔見知りだ。彼は大きな籠に食物を詰め、出かけた。
　老婆は寝台から身体を起こして、ユテラルドを歓迎した。
「一人で来たのかい。偉いねえ。ありがとう」
　パンや野菜を渡すと、老婆は目を細めて喜んだ。
　帰ろうとした時、老婆はためらいがちに口を開いた。
「坊や」
「何？」
「ちょっと手を見せてくれないかね」
「え？」
　ユテラルドはきょとんとしたが、深く考えずに手を差し出した。老婆はユテラルドの右手を取って、その甲を自分の顔に近づけた。皺だらけの顔が強張った。
「あざがあるね」
「……うん」

「前から、気になっていたんだよ。見間違いではないかと思ったが……やはりこれは、クレストだね」
　クレスト。父も、確かそう呼んでいた。
「おばあさん、クレストのことを知ってるの？」
「……ああ」
　老婆はユテラルドの手を離した。その顔が恐ろしげに歪んでいることを、幼いユテラルドは不思議に思った。
　彼は、無邪気な期待をこめて尋ねた。
「ねえ、教えて。クレストって何。お父さんやお母さんに聞いても教えてくれないんだ」
「坊や。かわいそうに」
「え？」
「クレストというのはね、呪われた者の印さ」
　老婆は寒気を感じたように、肩にかけたストールを引き寄せた。
　ユテラルドは唖然とした。
「呪われたって？　よくないこと？」
「そう。その印を持つ者は、災いをもたらすんだよ。昔から、クレストを持つ者の周りでは、嫌なことばかりが起こると言われているんだ。それに、そのあざを持つ本人も、早く死んでし

まうことが多いのさ。事件に巻きこまれたり、重い病にかかったりしてね」

　ユテラルドはぽかんと口を開けた。

　老婆の言葉は、まったく思いもつかないことだった。傷つくよりも、悲しむよりも、ただ信じられないと思うばかりだった。

　老婆は気まずそうにユテラルドを見た。

「坊や、もう家には来ないでくれるかい」

「……え?」

「こんなことを言ってごめんよ。許しておくれ。坊やがいい子だってことは、よくわかってる。いつも食べ物を届けてくれること、本当に感謝しているよ。だけど、私は怖いんだ。坊やのその手のあざが」

「……」

「もうお帰り、坊や。帰っておくれ」

　老婆は再び寝台に横になり、もうユテラルドのほうを見ようとはしなかった。

　ユテラルドはからになった籠を持って、とぼとぼと外に出た。老婆に言われた言葉が、ようやく、胸に鋭い痛みをもたらした。

　ユテラルドは自分の右手の甲を見た。あざは、いつもより少しだけ濃さを増しているように見えた。

クレスト。呪われた者の印。
このあざを持つ者の周りでは、嫌なことばかりが起こる。
「うそ」
ぽつんと、そうつぶやいた。
そんなこと、少しも知らなかった。父も母も、教えてくれなかった。ただ、きれいなあざだとばかり思っていた。
母が暗い顔をして告げた言葉を思い出した。
頭の固い人は、古い迷信を信じてしまうものだから。中にはこのあざを嫌う人もいる……その言葉の意味が、ようやくわかった。
「うそだ……」
左手に握っていた籠が、地面に落ちた。ユテラルドは右手を見つめて、涙ぐんでいた。
うつむいてしゃくりあげていると、声をかけられた。
「ユテラルド？　どうしたの」
あわてて目をこすり、顔を上げた。シャルアミが驚いたような顔をして立っていた。
「泣いてたの？　まあ、誰かにいじめられた？」
シャルアミは身をかがめ、自分の服の袖でユテラルドの頬をぬぐってくれた。
「泣かないで。男の子でしょう」

「……うん」

「どうしたの？　喧嘩した？」

「……ううん」

ユテラルドは唇を噛んだ。また涙がこみあげてきそうになった。

他の者になら、きっと何も話さなかっただろう。なんでもないと言い捨てて、家に走り帰っただろう。

しかし、シャルアミは姉のような存在だった。いつでもユテラルドに優しくしてくれ、話を聞いてくれる相手だった。

ユテラルドはおずおずと言った。

「あのね、シャルアミ」

「うん？」

「これ……」

ユテラルドは自分の手を持ち上げて見せた。

シャルアミの顔が、一瞬、緊張したようだった。

ユテラルドはびくっとした。やはりシャルアミもクレストのことを知ってるのだろうか。知っていて、これまで見ぬふりをしてくれていたのだろうか。

「手が、どうかしたの、ユテラルド」

「……この、あざ」
ユテラルドは泣きそうになりながら言った。
「クレストって言うんだって。これ、呪われた印なんだって。このあざを持ってると、悪いことを呼び寄せてしまうんだって。僕がいると、悪いことが起こるのかな。ひょっとして、村の人たちがみんな困ってるのは、僕のせいかな……」
「ユテラルド」
シャルアミは珍しく厳しい声を出し、ユテラルドの右手をぎゅっと握りしめた。いつも笑っているはずの明るい顔が、急に大人びて真剣な表情を浮かべていた。
「誰。誰がそんなこと言ったの」
「……」
「そんなの、迷信だよ。嘘だよ」
「シャルアミ……」
「信じちゃだめ。それは、呪われた印なんかじゃないよ。ユテラルドは、呪われてなんかいないよ」
シャルアミは急に、自分のほうが泣きそうな顔になって、ユテラルドをぎゅっと抱きしめてくれた。
ユテラルドの鼻先を、シャルアミの髪がくすぐった。ふわっといい匂いがして、ユテラルド

は心の傷がすっと癒されるのを感じた。

村の暮らしは楽ではなかったけれど、後から振り返ると、自分の幼年時代はほのかな明るさに包まれていたとユテラルドは思う。

村の人たちとの関係は、微妙だった。あの老婆のように、ユテラルドの手にあるクレストを嫌な視線で見る人もいた。

しかし、父と母がユテラルドを守ってくれた。彼がひねくれたり、いじけたりしないよう、愛情を注いでくれた。

それに、シャルアミ。彼女の存在は大きかった。本当の姉のようにユテラルドを可愛がり、面倒を見てくれた。時に、近所の子供たちがユテラルドをいじめようとした時には、顔を赤くして怒ってくれた。

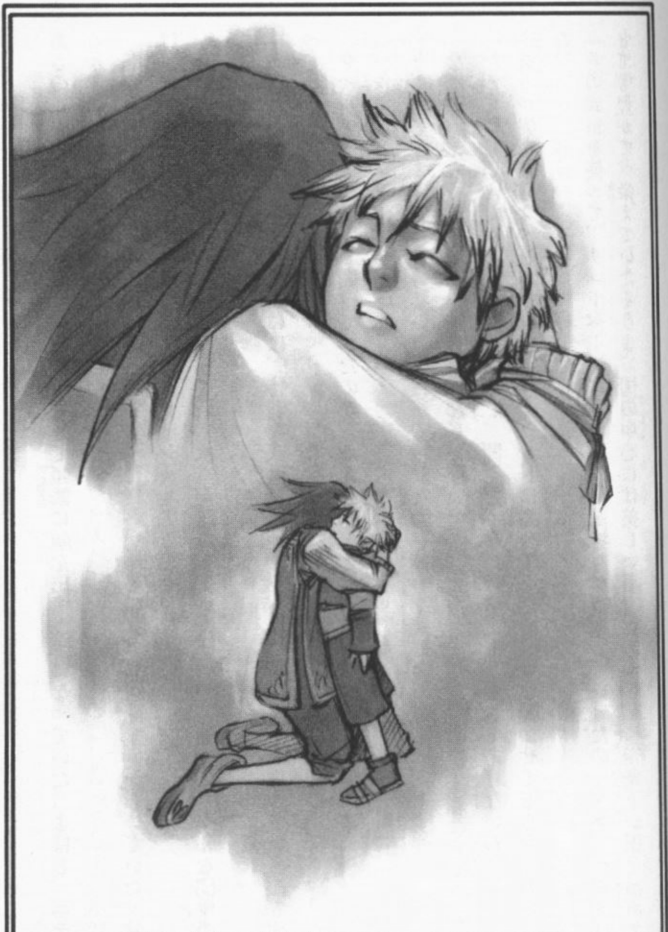
彼らの大きな愛情に包まれて、ユテラルドはまっすぐ成長するはずだった。

運命が急変したのは、ある夜のこと。

災いをもたらしたのはモレア村の男たち――そしてユテラルド自身だった。

その夜、シャルアミがユテラルドの家に遊びに来ていた。

以前から家族同然の交流をし、たびたび立ち寄っていたシャルアミだが、ユテラルドが手の



あざのことで傷ついて以来、以前にも増して頻繁に顔を出すようになっていた。よほど、ユテラルドの気持ちを気づかっていたのだろう。

二人はユテラルドの母が作った料理を食べた後、いつものように居間でくつろいでいた。父は長椅子で本を読んでおり、ユテラルドはシャルアミと話をしていた。

台所のほうから、母が洗い物をしている水音が聞こえていた。いつも通りの、平和な団欒のひとときだった。

「失われた帝国リューベーンには、特別な武具があったそうよ。パルミラ武具っていうんですって」

シャルアミは、どこで調べてきたのか、そんな話をしてくれた。

「パルミラ？　それはどういうもの？」

「うーんと……よくわからない。とにかく特別な力をもった武器のことよ」

「なんだ。シャルアミ、よく知らないんじゃない」

「だって難しいんだもの。古いお話だし。聞きたくないなら、もう話してあげないわよ」

シャルアミはちょっとふくれた。ユテラルドは謝って、話の続きを聞かせてもらうことにした。

「その武器を使って、リューベーンは周りの国々を次々に征服していったの。リューベーンはとても豊かで、栄えていたそうよ。国の中心には美しい王宮があって、皇帝陛下が国を治めて

いたの。もちろん、とてもきれいなお姫様や素敵な王子様もいたと思うの」
「お姫様なんてどうでもいいよ。パルミラ武具の話がいいよ」
「だから、詳しいことはわからないって……ただ、パルミラ武具はビリヤナの森と関係があったらしいわよ」
「森と？」
「ええ。ビリヤナの実を利用して作られていたんですって。パルミラ武具は、人間の潜在能力を引き出すことができたの。つまり、その武具をつけた人間は、普通よりもずっと早く走ったり、高く飛んだり、信じられないほどの力で剣を振るったりすることができたのよ」
「かっこいいなあ」
「もちろん、本当かどうかはわからないけれどね。とにかく、ビリヤナの実にそんな力があったために、リューベーン帝国はもっとたくさん利用したいと思ったのよ。それで、ビリヤナの森を守護していたトレドの村に襲いかかったの」
「そのお話は前に母さんに聞いたから知ってるよ。たった一晩で、リューベーンは消えてしまったんだよね」
「そうよ。不思議なことね。帝国じゅうの家や道路や王宮が、あっという間に消えてしまうなんて、そんなことあるのかしら。そこに住んでいた人たちは、みんなどこに行ってしまったのかしら……」

「迷信だよ、シャルアミ」
本に没頭しているとばかり思っていたユテラルドの父が、顔を上げて口をはさんだ。
「伝説というものは歴史の断片を伝えてくれるが、事実を大きくねじ曲げてしまうこともあるんだ。かつてこのエディンベリー大陸にリューベーンという国が存在し、その国が短期間のうちに滅びてしまったことは確かだと思う。だが、パルミラ武具だの、ビリヤナの森の怒りだのと言われていることは、すべて作り話だよ」
「……そうですね」
シャルアミはうなずいた。
ユテラルドは、パルミラ武具の話にうっとりしていたので、少々がっかりした。
「なんだ。嘘なのか」
「嘘なんて言ったら、夢がないわ。伝説って言うのよ」
「結局、嘘ってことじゃないか」
「まあね」
シャルアミは苦笑した。
その時だった。玄関のドアを叩く音がした。台所にいた母が、「出てちょうだいな」と声をかけたので、ユテラルドは立ち上がった。
シャルアミが言った。

「お客さんかしら。こんな時刻に、珍しいわね」
「うん。見てくるね」
ユテラルドは玄関に行き、念のためドアの向こう側に「どなたですか」と尋ねた。
呑気そうな男の声が答えた。
「夜分にすみません。荷物を届けに来たんです。開けていただけませんか」
なんの荷物か、ユテラルドは疑問に思いもしなかった。男の声は柔らかく、ただ近所の誰かがちょっと立ち寄っただけという口調だったから。
ユテラルドはドアを開けた。
瞬間、力強い手が伸びてユテラルドを抱え上げた。悲鳴をあげようとした口を、押さえつけられた。入ってきたのは一人ではなかった。五人の、黒い服を着た男たちがなだれこんできた。
男たちはユテラルドを捕えて、まっすぐ家の奥へ進んだ。
居間に入った瞬間、父が弾かれたように長椅子から立ち上がった。シャルアミは小さな悲鳴をあげた。
父はすぐに男たちの正体を悟ったようだった。彼はすさまじい形相で闖入者たちを睨みつけた。
「――モレア村の者か？」
「そうだ」

男たちのうちの一人、ユテラルドを捕えていた中年男が答えた。
他の連中はみな、武器を構えている。ユテラルドの喉元に、鋭い剣が突きつけられていた。
「ユテラルド……」
シャルアミがおろおろと叫んだ。台所から母親が出てきて、やはり悲鳴をあげて立ちすくんだ。彼女の手にあった皿が床に落ちて割れた。
ユテラルドの父は、一歩も動けずにいる。息子に突きつけられた剣が、彼の動きを封じていた。彼は押し殺した声で尋ねた。
「ビリヤナの森のことだな？」
「そうだ。貴様は、我々の警告を無視し、森の伐採計画を決めた」
「貴様のやり方は危険すぎる」
別の男が憎々しげに言った。
「放置しておくわけにはいかん。我々には、森を守る使命がある」
「待ってくれ」
ユテラルドの父は一歩進み出ようとしたが、鋭く制止されて足を止めた。
「話をしよう。君らの言い分を聞こう。その前に息子を離してくれ」
男たちは目くばせを交わしたが、ユテラルドを解放しようとはしなかった。
「話し合いの余地はない」

ユテラルドを捕えている、リーダーらしい男が言った。
父は首を振った。
「なぜだ。武力では何も解決しな……」
「黙れ」
男は苛立ったようだった。
「貴様は生かしてはおけん。ビリヤナの森を守るために、貴様には死んでもらわなければならん」
ユテラルドは、父の身体が一瞬震えたのを見た。
恐怖のためではなかった。話し合いより暴力を、しかも幼い子供を盾にした一方的な暴力を選んだ敵に対する怒りが、彼を震わせたのだ。
「手を上げて、前に出ろ」
モレアのリーダーが命じた。
抵抗のすべはなかった。父は、その言葉に従った。
槍を手にした若い男が進み出た。ユテラルドは夢中で「父さん！」と叫んだ。
短い気合いとともに、男は槍を父の身体に突き刺した。
悲鳴があがる。シャルアミがあげた声だった。
父は脇腹から鮮血を噴き上げてよろめいた。唇が動き、「息子を……」と言いかけたが、そ

の身体にまた、鋭い穂先が突き立てられた。父の大きな身体はその場に頽れた。
また一人、剣を手にした男が進み出て、ユテラルドの父に斬りつけた。
一方的な殺戮だった。息子を捕えられて身動きのできない男を、彼らはまるで嬲るように切り刻んでいった。
父は切られ、蹴り上げられ、突き刺されて、やがてまったく動かなくなった。その身体に、すでに生命のないことが明らかになっても、なおもモレアの男たちは凶刃を振るい続けた。彼らは血に酔っていた。
ユテラルドは目を見開いていた。父の身体が槍に貫かれた瞬間に、彼の中で何かが切れてしまった。
目の前で繰り広げられる光景は、ただの映像だった。現実味がなく、まるで芝居を見ているようにしか思えなかった。
母が倒れた。気を失ったのだった。
黒い男たちはそちらに向かった。母の身体にも、槍が突き刺された。
「母さん！」
ユテラルドは叫んだ。
これは、現実だ。夢でも幻でもない。父が殺され、今、母が斬られようとしている。
ユテラルドは必死に暴れた。目の前にあった男の手に思いきり噛みつく。男は声をあげてユ

テラルドを突き放した。

「母さん！」

ユテラルドは母親に駆け寄ろうとした。しかし、その首を男が捕まえた。

「このガキ！」

男は怒りをこめてユテラルドを殴りつけた。ユテラルドの小さな身体は、壁際まで吹っ飛ばされて叩きつけられた。

シャルアミは部屋の隅にうずくまっていた。その目はいっぱいに見開かれて、まっすぐにユテラルドを見ていた。

もはや、モレアの暗殺者たちの意図は明白だった。彼らは、ただ父親だけを殺しに来たのではなかった。政治にはまったく関わりのない女も、子供も、容赦なく殺害するためにやって来たのだ。おそらくは——ビリヤナの森の伐採計画を進める一派への見せしめのために。

「殺れ」

リーダーが命じ、剣を構えた男がユテラルドに歩み寄った。

ユテラルドは頭をぶつけたために、くらくらしながら、自分に迫ってくる刃を見つめた。それは、父や母の血に濡れていた。

殺される。

父母と同じように。あの刃に切り刻まれる。

そう思った瞬間だった。
シャルアミが叫んだ。
「ユテラルド！」
彼女は素早く立ち上がり、剣を構えた男に背後からむしゃぶりついた。
男は一瞬バランスを崩した。シャルアミは顔をくしゃくしゃにして叫んだ。
「逃げて、ユテラルド！」
「この……」
男は怒りに顔を歪めて、自分に突っかかってきた少女に向き直った。
その手に、白刃。
ユテラルドは壁に寄りかかったまま、その光景を見ていた。
時間の流れが妙に遅く感じられる。人も、物も、すべてが色を失って遠ざかっていくように見える。その中で、少女の姿だけがまぶしいほど鮮やかだ。
——シャルアミ。
ユテラルドが傷ついた時、悲しんだ時、絶望した時、ぎゅっと抱きしめてくれた、優しいシャルアミ。
そして、ユテラルドに刃が向けられた瞬間、自分の身も顧みずに飛び出していった——華奢な身体のどこにそんな勇気があったのかと思うくらい、強いシャルアミ。

右手が熱かった。
炎を上げそうなほど熱かった。
ユテラルドは手を持ち上げた。自分の手ではないように重かった。
手の甲のあざが、かつてないほど激しく輝いている。
いつか父の背にあったのと同じ。いや、それよりももっとずっと強く、あやしい光を帯びている。
ユテラルドは手を顔の前にかざした。
クレストは今や、世界を睨みつける眼のように鋭く輝き、ユテラルドの身体を支配していた。
心臓の鼓動に合わせて、クレストから発する光が脈を刻む。一拍ごとに体温が高まり、身体の深い部分に力が溜めこまれる。
ユテラルドは歯を食いしばった。必死に耐えなければ、自分の内側から沸き上がる強すぎる力に、身体ごと引き裂かれてしまいそうだった。
男は剣を振り上げた。
膝をついたシャルアミの頭上に。
振り下ろされれば、シャルアミの命はない。少女は気丈に顔を上げて、迫りくる運命を見つめていた。

——シャルアミ。

大好きな、シャルアミ。

ユテラルドは唇を開いた。一番大事なその名を、大声で呼びたかった。しかし、声にはならなかった。

白い、強烈な光が目を射た。

ユテラルドはぎゅっと目を閉じた。その光が、自分の手の甲から発したものであることはわかった。

これまで身体の内に眠っていた、すさまじく狂暴な獣が解き放たれたような気がした。

気がついた時、状況は一変していた。

男たちが倒れている。武器を手にしたまま。

彼らの身体は、まるで無数の剣に斬られたような残骸と化していた。中には、手足や首をほとんど切断された無残な死体もあった。

血の臭いが部屋に充満している。ユテラルドは瞬いた。

夢だろうか。男たちが押し入ってきたことも、父や母が殺されたことも。すべて、悪夢だったのだろうか？

いや。そうではなかった。父と母はやはり床に倒れ、事切れていた。

何が起きたというのだろう。
「シャルアミ?」
ユテラルドは小声で呼び、身体を起こした。
シャルアミは、部屋の中央に倒れていた。ユテラルドは這うようにして、そちらに近づいた。
「シャルアミ……シャルアミ!」
呼びながら、彼女の身体に手をかける。
シャルアミはうっすらと目を開いた。
ユテラルドは泣きたくなるほど安堵した。
「よかった、シャルアミ……助かったんだね。もう、悪い奴らはいないよ。みんな死んじゃったよ、シャルアミ」
抱きついて、彼女の胸に顔を寄せる。シャルアミはやはり、いつもと同じように、甘い匂いがした。
「ユテラルド……」
シャルアミは微笑み、ユテラルドの頬にそっと指を当てた。ユテラルドはその手をしっかり握りしめた。
「わたし……わたし……ね……」
何を言おうとしたのだろう。言葉はかすれ、聞き取れなかった。

シャルアミは、これまで見たこともないくらいきれいな笑みを浮かべると、目を閉じた。
ユテラルドはぽかんとして、少女を見つめた。
疲れて眠ってしまったのか。それとも——。
「シャルアミ」
ユテラルドはその名を叫んで、少女の身体を揺さぶった。もう、返事はなかった。
——まさか。
まさか、シャルアミが死んでしまうなんて。そんなことはあるはずがない。
安らかな、眠っているような少女の顔を見つめた時、ユテラルドはまたしても身体に変化が生じるのを感じた。彼は息を呑んで、右手に目をやった。
クレストが輝きを増している。さっきと同じように——いや、もっと鮮やかな光を発し、高熱を帯びている。
ユテラルドは悟った。このあざは、ユテラルドの感情に呼応するのだ。ユテラルドが激しい怒りに、あるいは深い悲しみにとらわれた時、制御が不能なほどのすさまじい力を解き放ってしまうのだ。
ユテラルドは何かに引きずられるように手をかざし、目を閉じた。もはや、何も考えられなかった。ただ、目覚めた力に身をまかせることしかできなかった。
記憶に残っているのはそこまでだ。その後のことは、霧に包まれたように朧げにしか覚えて

いない。

後から聞いたところでは、ユテラルドは死体の転がる部屋の中に、呆然として座りこんでいたのだという。彼は助け出されたが、数日間はショックのあまり意識が戻らなかった。ようやく回復した彼に、大人たちが事情を聞こうとしたが、彼にもはっきりしたことは言えなかった。

モレア村の暗殺部隊が、森林伐採計画を進めていたユテラルドの父を殺すために侵入したのだということは確かだった。しかし、なぜ彼らが惨殺されていたのか、その事情はわからなかった。常識で考えて、幼いユテラルドに、屈強な男たちを皆殺しにする力など、あるはずはなかった。

――しかし、あの子の右手を見たか。

――ああ。クレストだ。間違いない。

――そういえば、彼の父親も、やはり呪いの烙印を……。

そんな声が、ユテラルドの頭上を通り過ぎていった。ユテラルドには、何も考えられなかった。

父が死んだ。母も死んだ。そして、シャルアミまでも。

あの時、右手が燃え上がりそうなほど熱くなったのは、錯覚だったのだろうか。クレストから白い光が放たれたように思えたのは、あれは……。

ユテラルドは、誰にも喋らなかった。
謎に包まれたまま、事件は闇に葬られた。ユテラルドは、ストルタから遠く離れたセクルエ村に住んでいる父の知人に引き取られることになった。
彼は気のいい人物で、両親を亡くしたユテラルドをあたたかく迎えてくれた。
彼には息子が一人いた。名前はリヤナ。柔らかい金色の髪と、長い睫毛にふちどられた青い瞳を持つ、可愛らしい少年だった。年齢はユテラルドより一つ年下だった。
「よろしく、ユテラルド」
初めて会った時、リヤナは快活にそう言って、手を差し出した。
ユテラルドは右手を差し出そうとしたが、あざが気になって、もじもじと手を引っこめた。握手を拒絶されても、リヤナは嫌な顔をしなかった。端整な顔に浮かんだ笑みは、少しも翳ったところがなく、性格の良さをうかがわせた。
少しだけ、シャルアミに似ている。
ユテラルドはそんな印象を抱いた。
もちろん、リヤナは男だし、年齢はシャルアミのほうがずっと上だった。外見に似たところはなかったけれども、表情の優しさや、物腰の柔らかさに、どこか共通する雰囲気があった。
しかし、ユテラルドはなかなかリヤナに対して心を開くことができなかった。シャルアミに似ていると思えば思うほど、彼女の最期の笑顔が思い出され、うまく話すことができなくなっ

てしまうのだった。

リヤナはあせらなかった。ユテラルドの事情を無理に聞き出そうとすることもなかったし、彼がなかなか打ち解けないことに苛立った様子も見せなかった。

彼は聡明な少年だった。明るく、賢く、健康的だ。かたくなだったユテラルドも、いつしかリヤナに惹かれていった。

やがて、二人は共に剣を学び始めた。

もともとはリヤナの希望だった。リヤナにしてみれば、たしなみとして剣術くらい磨いておきたいという、軽い気持ちだったのだろう。

誘われて始めたユテラルドは、たちまち剣に取り憑かれた。彼の上達は早く、すぐに先生が舌を巻くほどになった。

最初は遅れをとったリヤナだが、ユテラルドの進歩を見て奮起したようだ。猛練習を積んで、間もなくユテラルドに追いついた。

リヤナの剣は明るい。ユテラルドのそれは暗い。先生が、一度そんな風に言ったことがある。

リヤナは腑に落ちないようだったが、ユテラルドには言われた意味がよくわかった。

「先生がおっしゃったのは、どういうことだろうね」

その日の稽古の後、テラスでお茶を飲みながら、リヤナが言った。

ユテラルドは答えた。

「オレにはわかるよ。オレは、相手を憎んで剣を振るう。おまえは違う。おまえは、守るもののために剣を振るうだろう」

リヤナは驚いたようだった。「そうか」と言った声があまりに無邪気なので、ユテラルドは失笑した。

リヤナは小首を傾げて、ユテラルドの顔をのぞきこんだ。

「そういえば、剣の話をするのは初めてだね。ユテラルド、君はなぜ剣を学ぶの？　相手を憎むって、どういうこと？」

「オレは——」

ユテラルドは左手でカップを持ち上げながら答えた。

右手は、普段の生活にはほとんど使わなくなっていた。この手が活躍するのは、剣を握る時だけだ。幾重にも布を巻きつけて、クレストを隠している。

「強くなりたい」

「え？」

「もう誰も死なせなくていいくらい、強くなりたいんだ」

「ユテラルド……」

リヤナは息を呑んだ。

ユテラルドは淡々と続けた。
「父も母も、オレの目の前で殺された。オレには何もできなかった。父母がぼろきれのように突き殺されるのを、ただ見ていただけだ」
「ユテラルド、それは……」
「それから、シャルアミ。近所に住んでた、姉のような女の子が、オレを庇って死んだんだ。オレが無力だったから。何もできなかったから、彼女をむざむざ死なせてしまったんだ」
「だけど、それは君のせいじゃ……」
「誰のせいかなんて、どうでもいい。ただオレはもう、大事な人を死なせるのは嫌なんだ。誰にも負けないくらい強くなりたいんだ」
リヤナは語気の激しさに打たれたように、しばらく黙っていた。
やがて、彼はお茶で喉をうるおして口を開いた。
「ユテラルド。君は言ったよね。自分は誰かを憎んで剣を振るうって。だけど、今の君の話ならば、僕らの目指すものは同じじゃないか。僕は、家族や友達を守るために戦いたいんだよ。君だって一緒……」
「一緒じゃない」
ユテラルドは笑った。
「オレはおまえとは違うよ、リヤナ。おまえはまっすぐだ。どこにも歪みがない。おまえの剣

は、確かに、おまえの愛するものを救うだろう」
「……」
「オレを動かすのは憎しみさ。オレは、何よりもまず、仇を討ちたい。両親とシャルアミを殺したモレアの連中を、皆殺しにするために戦うのさ」
「ユテラルド。だけど、君たち一家を襲ったモレアの暗殺部隊は、すでに……」
「全員、死んだ」
ユテラルドはリヤナの言葉を遮って言った。
「だが、まだ足りない。オレはモレアの連中を許さない。暗殺部隊だけじゃない、奴ら全員を許さない。あの村を滅ぼすまで、オレは戦うよ。奴らを滅ぼし、奴らが守ろうとしたビリヤナの森を滅ぼし、父の望んでいた通りその土地を豊かな作地にするまで、オレはやめられないんだよ」
「……ユテラルド」
「見ろ、リヤナ」
ユテラルドは右手に巻いた布をゆっくりほどいた。
セクルエ村に来てから、ほとんど誰にも見せずにいたクレストが現われる。
リヤナとは、兄弟のように一緒に眠ったり遊んだりしてきたから、何度か見られたことがある。だが、リヤナはその由来について深く聞こうとはしなかった。はっきり彼の前に示すのは、

これが初めてだった。
　リヤナは少し悲しげな顔で、ユテラルドの手を見つめている。
　布をほどいた右手の甲に、赤く浮かび上がっていた。幼い頃よりも濃さを増したクレスト――呪いの烙印が。
「聞いてるだろう。あの時オレたち一家を襲った暗殺部隊は、全員、鋭い剣で切り裂かれたみたいに惨死していた。何が起きたのかはわからないままだ。生き残ったのは、その部屋でぼうっと座りこんでいた子供、つまりオレだけだった」
「ユテラルド……」
「あの時の記憶は曖昧だ。ただ、シャルアミが殺されると思った瞬間、この右手の甲が不思議なくらい熱くなったことを覚えてる。このあざが、ひときわ鮮やかに、まるで内側から光ってるみたいにくっきり浮かび上がっていた。目を開けていられないくらい白い光が迸って、気がついたら、男たちが倒れていた。疑いようがないよ、リヤナ。オレがやったんだ。このクレストの力が暴走して、連中を殺したんだ」
「……」
「クレストのせいで死んだのは、奴らばかりじゃない。シャルアミが巻き添えになった。そうさ、シャルアミを殺したのは、モレアの連中じゃないんだ。オレだ。オレが彼女を……」
　言葉が勢いよく流れ出し、止まらなかった。リヤナはあわてたようにカップを皿に置き、気

づかうようにユテラルドを見た。

　ユテラルドは呼吸を整(ととの)え、布をしっかり右手に巻き直した。

「だから……わかるだろう。オレは、もうこいつを暴走させたくない。こいつは、オレの感情に呼応して力を帯びるんだと思う。オレは、クレストじゃなく剣の力で奴らを殺すよ。そのために、修行(しゅぎょう)してるんだ」

「ならば、僕は、君の背中を守るために戦おう」

　リヤナの言葉に、ユテラルドは一瞬ぎょっとして身体を引いた。

　他の者なら笑い話にしかならないような大真面目(おおまじめ)な台詞(せりふ)を、さらっと口にしてしまえる無邪気さが、リヤナにはあった。彼はなんのてらいもなく、美しい金色の瞳でユテラルドを見つめていた。

「君が何も心配せず、思う存分(ぞんぶん)に剣を使えるよう、僕は盾になるよ」

　ユテラルドはたじろぎ、横を向いた。

　リヤナの真剣な台詞は、彼にはくすぐったく、照(て)れくさかった。

「オレにつきあう必要はないさ。おまえには関係ないことだ。おまえは家族も健在(けんざい)だし、幸せに暮らしてる。あえて泥沼(どろぬま)に踏みこむ必要は……」

「ユテラルド、僕は君のお父さんを尊敬(そんけい)している。お会いしたことはなかったけど、君のお父さんは本当に立派(りっぱ)な人だったって、うちの父がいつも言ってるよ。村の暮らしをよくするため

に真剣に闘ってたんだろう？　僕も、同じように戦いたい。僕には、家族を失った君の辛さはわからないかもしれない。でも、目指すところはきっと同じだよ」

あくまでも健やかで、翳りのないリヤナだった。

「お人好しだな、おまえは」

ユテラルドは笑った。苦笑に近い笑いだったが、リヤナは晴れ晴れと、いつもの笑顔でうなずき返した。

数年後、ユテラルドは戦士としてストルタに戻った。もちろん、リヤナも一緒だ。

二人は、モレアとの戦いに身を投じたのである。ビリヤナの森の処置をめぐる争いは、ますます激化していた。

ストルタ村は、ユテラルドが暮らしていた頃よりもさらに疲弊していた。

食糧の不足は深刻だった。老人が、子供たちが、次々に飢えて死んでいった。

貧しい人々を見下ろすかのように、ビリヤナの森はまるで衰えを見せず、豊かな葉を茂らせていた。森に対する人々の憎しみは、かつてないほどに高まっていた。

ビリヤナの森が大地の養分を吸い上げるから、周囲の土地が痩せ細る。早急にビリヤナの森を切り拓き、そこに畑地を作らなければならない。その考えは、すっかり人々のあいだに浸透していた。もはや、反対しているのは、モレアだけだった。

四つの村が連合して作ったフォントレールは、いよいよビリヤナの森の伐採を進めることになった。
あくまでも反対の姿勢をとるモレアは、フォントレールから除外されることに決定した。彼らは孤立し、追われる立場になったのである。
伐採を強行しようとするフォントレール連合軍に、モレア軍はあくまでも抵抗し続けた。ユテラルドもリヤナも、稽古で身につけた剣の技を、実戦でますます磨いていった。
いつしか彼らは、四剣主と呼ばれる使い手になっていった。
他の二人は、それぞれ癖のある若者たちだった。一人はフェルク。ストルタ出身で、父親は現在のストルタの指導者である。〝ストルタの希望〟とまで言われる凛々しい青年だが、いささかやんちゃで、子供っぽさの抜けないところがある。父親の考えを受け継いでいるためか、モレアに対する反感を人一倍強くもっているようだ。その点ではユテラルドと考えが似ているのだが、いかんせん、性格的にまったく正反対なものだから、あまり気が合うとは言えなかった。
もう一人は、アルフトアイン。他大陸から流れてきたという傭兵である。黒髪に黒い目の大柄な男で、他の者にはとても振り回せないような大剣を軽々と扱う。年は二十代の半ばぐらいだが、よほどの修羅場をくぐり抜けてきたのだろう、年齢に似合わぬ老獪さを備えている。腕前は確かだが、金で雇われているだけという態度を露骨に見せるので、結束の固いストルタ軍

の中では明らかに浮いている。ただ、ユテラルドとの仲は悪くなかった。どちらも無口で無愛想なところが、お互い、気楽なせいかもしれない。

彼ら四剣主が中心となって、戦を重ねていった。戦況は圧倒的にフォントレールが有利で、モレアは次第に追い詰められていった。

ほとんどあと一歩のところまできていた。残るのは、少女レステアが率いる残党だけだった。彼女たちさえ討てば、いよいよモレアは滅び、フォントレールは完全勝利をおさめることができるのである。

しかしながら、レステアの戦術は見事に戦のつぼを押さえており、なかなか壊滅には至らなかった。

今回もまた、蜂の襲撃という情けない結末を迎えてしまい、ストルタ軍の苛立ちは募るばかりである。

第三章

「もう容赦はしねえ。オレは怒った。モレアの奴らはぶっ殺す。一人残らずぶっ殺ーす！」
フェルクが叫んで、テーブルを拳で叩いた。
作戦会議の最中である。天幕の中には、四剣主を始めとして、ストルタ軍の幕僚が顔を揃えている。
全員、フェルクの怒声に恐れをなしたように黙りこんだが、一人だけクスッと笑い声を漏らした者があった。
言うまでもない。傭兵のアルフトアインである。
このような重要な会議に傭兵が加わるのは異例のことだが、彼はストルタの四剣主としてフェルクやリヤナと並び称されるほどの男であり、これまでの戦いで大きな勲功を挙げてきたことから、こういった場には必ず連なることになっている。もっとも本人は、戦場で剣を振るう以外のことにはあまり興味がないらしく、会議のあいだはたいてい黙っている。
「笑いやがったな」
フェルクはじろっとアルフトアインを睨んだ。アルフトアインは、わざとらしいくらい取り繕った真面目な顔になった。
「別に」
「いいや、笑った。今確かに、オレのほうを見て笑った。何がおかしい、説明しやがれ！」
いつものやりとりなので、全員、しらけた顔で成り行きを見守っている。

　アルフトアインは大剣を膝に抱えて、笑いをこらえたような声で答えた。
「『もう容赦はしねえ』、か。いい台詞だ。まるで今まで容赦していたみたいに聞こえる」
「なんだと！」
「今までだって俺たちは全力で戦ってきたはずなんだが。おまえは手を抜いていたのか？」
「そんなことは言ってねえ。ただ、今度こそ死ぬ気で、本気で、今までより一万倍も真剣に、奴らをぶっ殺すという意味だ」
「ま、いいさ」
　フェルクのわけのわからない言い分に、アルフトアインは肩をすくめてみせた。
「レステアの手強さを認識したなら、いいことだ。『ぶっ殺す』以上に有意義な作戦が出てくるなら、もっと喜ばしいんだが」
「うるせんだよ、おまえは」
　フェルクは舌打ちをした。
　リヤナが、二人のあいだを取り成した。
「確かにレステアは手強いよ。これまで以上に気を引き締めてかかろう。逃してしまったのは痛いけど、数の上では比較にならないぐらいこっちが有利なんだ。見つけ出し、包囲し、慎重に叩けば、きっと勝てる」
「しかし、連中どこに逃げたかわからないぜ。数が少ないだけに、どこに潜んでやがるのか

「……」

「レステアを誘き出す最良の方法は、いったん戦場から退いて、ビリヤナの森の伐採を進めることだ」

リヤナの言葉に、何人かが賛同の声をあげた。

フェルクが顎を撫でる。

「まあな。奴ら、森の守護者を気どってるから、ビリヤナの森に焼き討ちでもかければ、飛び出してくるだろうが」

「焼き討ちはちょっと、火事が大きくなりすぎるから危険だけれどね。ともかく森の木を切り倒して、大規模な伐採を進めていることを報せれば、きっと動きがあると思うんだ。そこでこちらは部隊を二つに分けて……」

話の途中で、アルフトアインが立ち上がった。

リヤナは口をつぐんだ。傭兵は、天幕を出て行こうとしている。

「待てよ」

フェルクが引き止めた。

「どこへ行くんだ。まだ話は終わってないぜ」

「俺の出る幕ではなさそうだからな」

アルフトアインは大剣を背に、薄ら笑いを浮かべた。

「俺が振るうのはこの剣だけだ。樵の斧は、専門外だ」
「貴様なあっ」
フェルクは怒鳴った。
「場を乱すんじゃねえよ、戦バカが。戦場で暴れるだけが戦いじゃないんだぞ。こういう作戦会議の大切さがわからないなんて、おまえは、図体ばっかり大きいただのガキだ」
一同がちらっと顔を見合わせたのは、それがいつも子供っぽい暴言で会議の場を乱すフェルクの台詞とも思えなかったからである。
アルフトアインは「やってられない」とでも言いたげな顔で、踵を返そうとする。
リヤナが呼び止めた。
「アルフトアイン。フェルクの言う通りだよ。僕らの戦いは、ただモレアを滅亡させることだけが目的じゃない」
言いながら、ちらっとユテラルドの顔をうかがう。
ユテラルドは何も言わなかった。
「人々の暮らしを守り、より豊かな社会を作るために僕らは戦ってるんだ。そのためにはビリヤナの森のことを考えないわけにはいかない」
「だから、それはおまえたちに任せる」
アルフトアインはうんざりしたように答えた。

「俺は傭兵だ。戦場で働くだけだ。森の問題など、俺には関係のないことだ」
「そうではないよ、アルフトアイン。君は異大陸の出身だから、実感が湧かないかもしれない。だけど、ビリヤナの森は、エディンベリー大陸だけの問題じゃないんだ。僕らは、意地の張りあいや、私利私欲のために争っているわけではない。ビリヤナの森は、きっと今に世界じゅうを覆いつくし、大地の養分を吸い上げてしまうだろう。そうなる前に手を打たなければ、あらゆる生命があの森のために滅ぼされてしまいかねない。ストルタやモレアだけの問題じゃないんだ。考えてみてくれ、アルフトアイン」
リヤナの声はおだやかだったが、力強かった。
ユテラルドの眉がわずかに動く。リヤナの熱心な口調は、かつてビリヤナの森の脅威を説いた彼の父によく似ていた。
「ビリヤナの森がどんな働きをするのか、それは誰にもわかっていないはずだ」
アルフトアインは、リヤナの熱弁とは対照的な、醒めた口調で言った。
「モレアにはモレアの信念がある。彼らは、あんたと同じ熱心さで、まったく逆の言い分を唱える。俺の耳にはどちらも意味のない囀りと同じだ。どちらが正しいのかなんてことには、興味がない。俺はあんたたちが払った報酬分、働くだけだ」
「貴様、まだそんなこと……」
激昂したフェルクが食ってかかった。

リヤナは彼を手で押し止め、アルフトアインに尋ねた。
「アルフトアイン。一つだけ聞かせて欲しい。君は――モレアの言い分を聞いたことがあるのか」
傭兵は、何を聞かれたかわからないという顔で、リヤナを見た。
「モレアの主張ぐらい、誰だって知ってるだろう。それともまさか、あんたは、彼らがなぜビリヤナの森を守ろうとしてるか、知らないのか?」
「そういうことじゃない。ただ、君の言い方は、まるでモレア村の人から直接に意見を聞いたみたいだった」
天幕の人々は、顔を見合わせた。
リヤナはためらいがちに尋ねた。
「アルフトアイン。僕は以前から、君の言動に疑問を感じていたことがある。君はモレア村やレステアのことをよく知りすぎているように思う。まさか、以前、モレア村に雇われたことがあるんじゃ……?」
「おい!」
フェルクが顔色を変えた。
「迂闊なこと言うなよ、リヤナ。いくらこの仏頂面のひねくれ野郎でも、そんなコウモリみたいな……」

フェルクは急に声を落とし、アルフトアインのほうを見た。
アルフトアインは笑いだした。低く、喉を鳴らすような独特の声で。
いつもなら「何がおかしい」と食ってかかるフェルクも、何も言わなかった。ただ、アルフトアインの笑い顔を見つめている。声をかけることができないような、冷たい響きが、彼の笑いにはあった。
「アルフトアイン」
リヤナが青ざめた顔で言った。
「なぜ笑う?」
「妙に深刻な顔で、くだらんことを質問するからさ」
「くだらないか?」
「ああ。あんたたちは——」
アルフトアインは笑いを消し、天幕の人々をさっと見渡した。まるで、敵陣に捕われた孤独な将のように。
「傭兵の仕事ってものを知らんのか。本当におめでたい連中だな。俺には、おまえらみたいなご立派な信念も理想もない。金のために戦うだけだ。おまえらと一緒の軍で戦っているからって、別に、おまえらの理想とやらにおつきあいする気はさらさらない」
「答えてくれ。君は、モレア軍のために働いたことがあるのか?」

「否」
アルフトアインは素早く答えた。
拍子抜けしたような顔のフェルクを見て、彼は続けた。
「依頼をされたことはある。だが断った」
「何……？」
「正確に言えば、モレア軍の依頼ではなかったが。ごく個人的にな、人を殺して欲しいと言われた」
「詳しく聞かせてくれ」
リヤナが言った。冷静を装ってはいたが、動揺は隠しきれていなかった。
「答える必要はない。依頼人の秘密は厳守。傭兵の鉄則だ」
「今は僕らが君の依頼人だ」
肩をすくめたアルフトアインに、リヤナは「情報に見合った報酬を約束する」と告げた。
フェルクが怒鳴った。
「リヤナ。こいつをつけあがらせるだけだぞ」
「黙っててくれ、フェルク。さあ、答えてくれ、アルフトアイン。君は、いったいどんな依頼をされたんだ？」
アルフトアインは元の位置に戻って、面倒くさそうに座り直した。

「やれやれ、だな。まあいい。俺はあの時、モレアの依頼を受けなかった。したがって、この件について話すのは契約違反じゃない……」

自分を納得させるようにつぶやいて、彼は目を上げた。

リヤナやフェルク、それにユテラルド。厳しい視線が彼に向けられている。

アルフトアインは指を突きつけた。——天幕の隅で腕を組んでやりとりを見守っているユテラルドに。

「彼を。殺して欲しいという依頼だった」

ユテラルドは動かなかった。形のよい眉をわずかに寄せただけだった。

フェルクは絶句している。他の者たちも同様だった。

リヤナが言った。

「君にそれを依頼したのは、誰だ？」

「レステアだ」

「断ったんだね？」

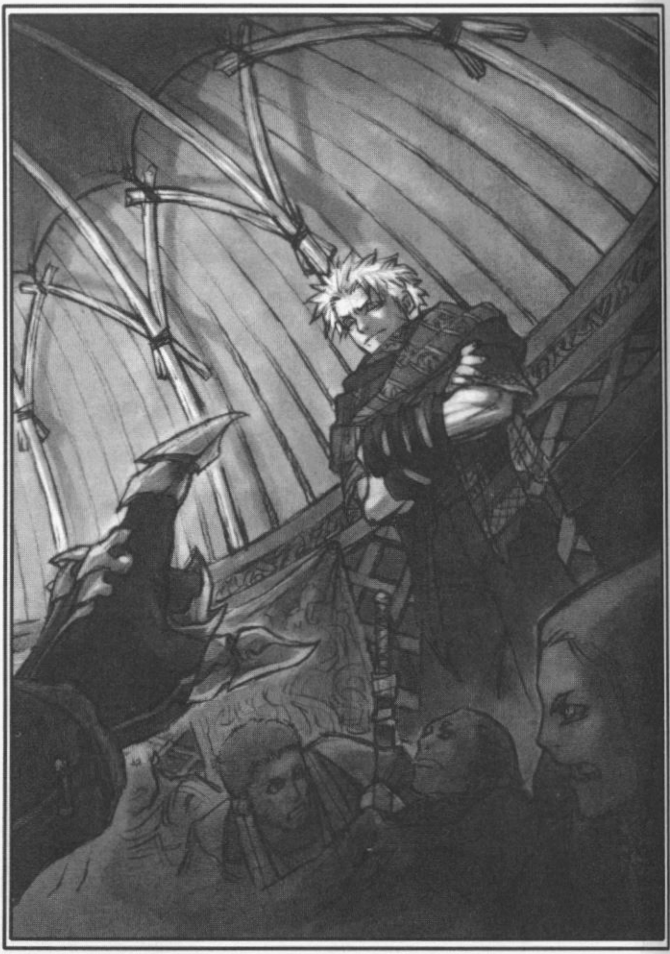
「ああ」

「なぜ？」

「単純な話さ。彼女は相場を知らなかった」

「相場？」

アルフトアインは何か思い出したらしく、片頬に笑みを浮かべた。
「傭兵を雇って人を暗殺させるための妥当な金額を、彼女は知らなかったんだ。馬鹿みたいに安い値段を呈示してきた。俺は笑い飛ばした。彼女はそれ以上交渉を続けようとはせず、青ざめて帰って行った。彼女にとっては、それがぎりぎりの金額だったんだろう」
「いつ頃のことだ？」
「当然、俺がストルタ軍に加わるより前の話さ」
「その頃なら、レステアはまだ軍の指揮をとってはいなかったはずだが」
「さあ。そうだったかな」
「とぼけないでくれ、アルフトアイン。民間人の女性が、傭兵を雇って暗殺を依頼するなんてことがありえるか？」
「貴様」
傭兵が答えるより早く、フェルクが怒鳴りかかった。
「正直に言えよ。本当は依頼を聞いたのはいつなんだ？　レステアが軍に入った後だったら、おまえがストルタ軍に加わってからってことになるぞ。ストルタ軍にいながら、おまえはこっそりモレアの軍人と接触したのか？」
「わからん連中だな」
アルフトアインはぼやくように言って、自分の耳に小指を突っこんだ。それ以上説明する気



はないと言いたげな仕草だった。
「腑に落ちない」
リヤナが言った。普段はおだやかなその顔が、今は、敵に対した時のように厳しく強張っている。
「なぜ、当時の彼女がユテラルドの名を知っていたんだ？　その頃、彼はまだそれほど名を知られていなかったはずだ。ましてや、命を狙われるなんて」
「おい、ユテラルド」
フェルクが声をかけた。ユテラルドは、まるで他人事のような顔で視線を落としている。
「おまえ、まさか、レステアと面識でもあったのかよ？」
自信のなさそうな口調だった。アルフトアインに続いて、ユテラルドに対してまで、疑心をかき立てられているらしい。
ユテラルドは首を振って短く答えた。
「いや」
「だけど、あのアマ、おまえを名指ししてきたっていうぜ？　四剣主と呼ばれてる今ならともかく、まだ名前も知られていなかった当時、なぜ……」
ユテラルドは答えなかった。その表情を見れば、隠しだてをしているのではなく、彼自身にも思い当たる節がないことは明らかだった。

リヤナが、アルフトアインに詰め寄った。
「君は、これまで一言も言わなかったな？　レステアからそんな依頼をされたことがあったなんて」
「誰にも訊かれなかったからな」
「アルフトアイン！」
「レステアは相場を知らなかったが――あんたたちも、どうやら傭兵の雇い方を知らないようだな」
　からかうような口調で、アルフトアインは言った。
「信用ならない流れ者を雇うなら、どんな過去があるか事前に調査をしておくものだ。俺が本当にモレアの密偵だったら、さて、どうするつもりだったんだか」
　誰にも言い返せなかった。
　全員の、敵意のこもった視線を悠々と受け流して、アルフトアインは天幕を出て行った。もう誰も止めようとはしなかった。
　作戦会議は思わぬ暗転を迎えてしまった。モレア軍掃討の案を練るどころではない。
　重苦しい沈黙を破って、フェルクが口を開いた。
「あいつ、やっぱり信用できねえ……」
「フェルク」

　リヤナが止めようとしたが、フェルクはたまりかねたように叫んだ。
「解雇だ。さっさとお払い箱にしたほうがいい。あいつ、危険すぎるぜ。本当にモレアと通じてるかも……」
「だけど、彼の力はストルタ軍に必要だ」
「そんな呑気なこと言ってられるか！　あいつが、いつ、ユテラルドの首を抱えてレステア側に寝返らないとも限らないんだぜ」
　毒の強い言葉に、リヤナは黙りこんでしまった。
　皆がユテラルドを見た。彼は相変わらず目を伏せていたが、フェルクの発言を聞くと、大儀そうに左手を持ち上げて首筋を撫でた。
「ぞっとしないな」
　苦笑まじりにつぶやく。
　フェルクが尋ねた。
「本当に、心当たりがないのか？　なぜレステアが、そんな……」
　ユテラルドは答えず、天幕を出て行った。
　フェルクが呼び止めようと怒鳴り、リヤナがなだめようとしていたが、ユテラルドは足を止めなかった。

アルフトアインは、彼のために与えられた小さな天幕の中にいた。
ユテラルドは声をかけて、仕切りの厚い幕を持ち上げた。
傭兵は片隅に敷いた蓙の上に座り、例の大剣を磨いている。
「邪魔していいか」
ユテラルドの問いかけに、アルフトアインは剣をかたわらに置き直すことで応じてみせた。
ユテラルドは、アルフトアインの前に腰を下ろした。
しばらく、どちらも黙っていた。飛びこんできた羽虫をユテラルドは無造作に叩きつぶし、口を開いた。
「レステアの名を頻繁に耳にするようになったのは、ここ半年ほどのことだ」
「――そうだな」
アルフトアインは愛想のない声で相槌を打った。
「モレア軍の中で頭角を現わしている、若い女がいる。男のようななりをして、戦場に現われる跳ねっかえり。最初のうちは面白半分にそう囁かれていただけだった。だが、彼女はあっという間に有名になった。連敗を続けるモレア軍の中で、彼女が率いる部隊だけは負け知らずだった」
「ああ」
「オレは、彼女には会ったことがない」

アルフトアインはじっとユテラルドを見守っている。フェルクを冗談まじりにあしらっている時とはまるで別人のような、考え深い顔をしていた。
「戦場で、何度か見かけたことがあるだけだ。はっきり言って、剣の腕前はさほどのものじゃない。器用ではあるが、体力が追いついていない。前線に出れば、もたないだろう。だが、彼女は頭がいい。モレアの兵士たちを、まるで自分の手足のように自在に動かして戦果を挙げている。大したもんだ。年齢は、たぶんオレと同じぐらいだろうにな」
「そうだな」
「あの年齢で、一部隊を率いるのは、並大抵のことじゃない。オレやリヤナだって、最初の頃は軍の中でずいぶん軽く見られたものだ。彼女が短期間に今の地位に昇りつめたのは、よほどの才能と——そして戦への情熱があったからに違いない」
アルフトアインはうなずいた。
ユテラルドは問いかけるように首を傾げた。
「何が彼女を駆り立てているんだろう。ビリヤナの森を守りたいという熱意か？　いや、それだけじゃないはずだ」
「……」
「彼女があんたにオレの暗殺を依頼したのは、おかしなことだ」
ユテラルドは、アルフトアインの剣にちらっと目を走らせた。これまでに、数えきれないほ

どの人の血を吸ってきた魔剣である。
「オレは当時、名を知られてはいなかった。雑兵の一人にすぎなかったのさ。ストルタ軍の勢いを止めるために誰かを殺そうというなら――そうだな、たとえばフェルクを狙ったほうがよほど効果的だっただろう。彼はストルタの指導者の息子だ。〝ストルタの希望〟と呼ばれる、我が軍の英雄。すでに当時から、その名はモレアにもよく知られていたはずだ」
「英雄伝説というのは、結構いい加減に作られるものだということがよくわかる」
「茶化さないでくれ」
ユテラルドは笑い、話を続けた。
「しかし、レステアが狙ったのはまったく無名のオレの命だった。なぜ彼女はオレを知っていたんだ？　なぜ殺そうとまで思ったんだ？」
ユテラルドは背を伸ばし、アルフトアインをまっすぐに見つめた。
「さあ、な」
アルフトアインは視線をそらせた。
「俺はレステアから詳しい話は聞かなかった。立ち入った話になる前に依頼を蹴ったからな。だから、彼女がなぜあんたを狙ったのか、それは知らない。ただ、あの時彼女の表情から感じ取れたのは、激しい憎悪だった。この少女はどんな地獄を見てきたんだろう――そう思うほどの、毒々しい感情だった。あれは、森を守ろうとか、村を守ろうとか、そんなきれいなものじ

やなかった。怒り、そして憎しみだ。相手をこの世から抹殺したいと願う、すさまじいほどの憎悪だった」
　ユテラルドは硬い表情で聞いている。
　アルフトアインは息苦しさを払いのけるように首を振って続けた。
「おかしなことだが、俺はあんたに初めて会った時、彼女のことを思い出したよ」
「……え？」
「あんたと彼女は似たところがある。あんたは、モレアを滅ぼしたいという憎悪に凝り固まっていた。リヤナやフェルクのような、理想を信じてる連中とは明らかに違った。美しい理想のためではなく、憎悪のために戦おうとしていた。だから、俺は思ったのさ。ああ、似ているって。あのモレアの少女と、このストルタの少年は、不思議なくらい似通ってるってな」
　ユテラルドはむっとした顔でアルフトアインを睨んだ。
　アルフトアインは、大剣を膝の上にのせ直した。
「今から思えば、俺の選択は正しかったわけだ。彼女の依頼を受けて、あんたを殺そうとしていたら、今頃、俺もあんたのそのクレストにやられていただろうからな」
「――こいつは好き勝手に使える武器じゃない」
「ま、彼女に持ち金が足りなかったおかげで、俺は命拾いしたってわけだ」
　話は終わりだというように、アルフトアインはまた剣の手入れを始めた。

ユテラルドは立ち上がり、無言で天幕を出て行った。

第四章

手もとが不意に明るくなったので、少女は顔を上げた。

司書が、テーブルの上のランプの向きを調整してくれたのだった。白髪混じりのその男は、少女が読書を中断したことに気づくと、取り繕うような笑いを浮かべた。

「おお、すまないね、邪魔をしたかな。あまり暗いところで字を見つめていると、目を悪くすると思ったのでね」

少女は瞬いて、礼を言った。

つい本に夢中になってしまって気づかなかったが、すでに図書室の中は夕方の闇につつまれていた。

さっきまでは何人かの利用者が出入りをしていたのだが、今は、少女と司書の他には誰もいない。

首を回し、背を伸ばすと、骨がきしむような音をたてた。ずっと同じ姿勢で座っていたものだから、身体が強張っている。

「ずいぶん熱心だね」

「ええ」

「そんなに面白い本かい」

「まあね」

話しかけられるのは迷惑だったが、あまりそっけなくして、かえって注意を惹くのも嫌だっ

た。あっちに行ってくれればいいのに、と思いながら少女は適当に答えた。
司書は暇を持て余しているのか、まだ何か話したそうにこちらを見ている。少女はランプの明るさに苛立ちながらうつむいた。
司書の視線が、必要以上に熱心な気がして、小さな不安が芽生える。
やはり、無謀だったのか。敵の拠点の一つであるセクルエの図書館を訪れるなんて。
いや、身もとがばれるはずはない、と思い直す。
腰まであった髪は、首の長さで切り落としてある。
火のようだと言われた色も、黒く染めた。顔だちは変えようがないが、服はいつもの男装ではなく、平凡な町娘のようなスカートをはいている。慣れない口紅までさした。
わかるはずはない。相手が、戦場で顔を突きあわせたことのある兵士ならともかく、戦いとは無縁の司書なのだから。
レステアは、司書の視線に感じた不安を払いのけた。
「何を読んでるのかね」
「古い本よ」
「ほう……消滅帝国の歴史書か」
「ええ」
レステアは、微笑みが強張らないよう苦労した。

「珍しいねえ。若いお嬢さんなら、もっと楽しい物語を好むものだと思っていたが」
「私は歴史ものが好きなの」
レステアは、なるべく気軽な調子を心がけて言った。
「ほう。それは嬉しいことだね。最近の若い子は、なかなか昔話に興味をもってくれないものだからね……」
「おじさん、すまないけど、一人にしておいてもらえるかしら？　ちょうど面白いところだから。読んでしまいたいの」
「おっと、すまなかった」
司書は謝り、自分の持ち場へ戻って行った。
レステアは横目で彼の姿をうかがった。
何か気づいた素振りはないだろうか。もしや、こっそり図書室を抜け出し、通報に走るようなことはないだろうか。
彼はおとなしく机について、積まれた蔵書の整理に取りかかった。
レステアは安堵し、また本に目を戻した。

消滅帝国リューベーン。
その名を初めて聞いたのは、いつだっただろう。記憶が霞むぐらい遠い日のことだ。

話してくれたのは父だった。子供向けの絵本を広げ、レステアを膝の上にのせて語ってくれたのだ。
今でも目に焼きついている。その本は、父が子供だった頃、モレア村の暮らしがまだ少し楽だった頃に購入されたものだった。
表紙は色褪せ、背はほころび、古びていたけれど、ページをめくればたちまち鮮やかな色彩が現われた。賑わう街の絵。真っ白い王宮、整然とした街路樹、果物や野菜を並べた店先、美しく着飾った人々。
その風景は、レステアが知っている村の貧しい暮らしからは想像もつかないくらい豊かで、幼いレステアはいつもうっとりして絵本を眺めたものだ。
「リューベーンは、昔々、エディンベリー大陸にあった大きな国なんだ。周りの村を征服して、とても栄えていた」
伝説の帝国について話す父の声は、少年のように熱っぽく、レステアは父のその声が大好きだった。
「ところが、そのリューベーンと戦っている人たちがいた。彼らの数は少なく、その武器だって決して立派ではなかったのに、リューベーンの軍隊は、なかなか彼らを倒すことができなかった」
「どうして？」

「彼らの中に一人の勇者がいたんだよ。彼は信じられないくらい強くて、たった一人で、数千の軍隊を打ち負かすことができた。リューベーンの人たちは、なぜあの勇者はあんなに強いのだろうと考えた」
「なぜなの？」
「勇者は——あざを持っていたからだ」
レステアが黙りこむと、父は静かに続けた。
「そう、クレストだ。クレストの力のせいで、勇者はすばらしい力を発揮することができた」
レステアは首をひねって父親を見た。
父は絵本のページをめくって続けた。
「帝国の人たちは考えた。あのあざを研究すれば、彼を倒すことができるんじゃないかって。それと一緒に、帝国の人たちは、ビリヤナの森のこともよく調べた」
「森？」
「そう。ビリヤナの実には不思議な力があってね、中身を取り出して固めたものを『パルミラ』と呼んだ。パルミラを使えばすばらしい武器ができることはわかっていたけれど、普通の人には難しくてなかなか使えなかった。だけど、クレストを持っている勇者なら、パルミラを自由に使いこなすことができたんだ。パルミラとクレストの力を合わせれば、最強の戦士が作れるのではないか。帝国は研究を進めて、ついに、クレストによく似た働きをするあざを作り出す

ことまでできるようになった。だけど、科学者は欲深だった。彼らはもっともっと強い力を求めて、森に攻め入った」

「ビリヤナの森へ？」

レステアは震えた。

森は、彼女が生まれ育ったモレアの村のすぐ近くに広がっている。決して近づいてはならない、神聖な場所だと教えられてきた。

まさか、あのビリヤナの森に攻めこむなんて。

「どうなったの？」

「もちろん、天罰が下ったさ。ビリヤナの森を傷つけようとしたリューベーン帝国は、あっという間に滅びてしまった」

レステアはほっとした。

悪い人たちは滅んだ。だから、ビリヤナの森は今でも青々としている。

ただ、一つだけ引っかかるところがあった。

「お父さん、パルミラはどうなったの？　ビリヤナの実を使えば、今でもパルミラが手に入るの？」

「それは無理だ」

父は苦笑した。

「リューベーン帝国が滅びた時に、その研究もすべて失われてしまったんだよ。今では、それがどんなものだったのかもわかっていない」
「そうなの」
レステアはがっかりした。
「だけど、クレストを持っている人は、そのパルミラを自由に使えたのでしょう?」
「――そう言われている」
「だったら、レステアも……」
父は娘をぎゅっと抱き寄せ、首を横に振った。
「そんなことは考えるんじゃない」
「どうして」
「言っただろう。もうリューベーン帝国の研究は失われてしまったし、パルミラの使い方も誰にもわからないんだよ」
「だけど、ビリヤナの森は今でもあるし、また新しく研究すれば……」
「考えるのはおやめ、レステア」
父は珍しく怖い顔をした。
「伝説の中の出来事だ。おとぎ噺なんだよ」
「だけど……」

ビリヤナの森は、伝説なんかじゃなく、今でもちゃんとある。レステアの家の窓からだって、その豊かな姿がよく見える。

そして、クレストも。

いにしえの勇者と同じ印が、レステアの身体にも、確かに刻まれている。

おとぎ噺なんかじゃない。そう言いたかったが、父の顔はあまりに険しく、レステアの言葉を封じた。

レステアは仕方なく、口をつぐんで、再び絵本に見入った。

ページをめくると、リューベーンの賑やかな街並から一転して、深い森の景色が現われる。重なりあった葉が、丹念な筆致で描かれている。青と緑に彩られた、すがすがしい空気まで伝わってくるようだ。

「ビリヤナの森は、とても大事な場所だ」

父は囁くように言った。

「あの森がなければ、私たちは生きていけない。森にあるのは、普通の樹じゃないんだ。ビリヤナは万物の母だ。すべてのものを生み出し、清め、生きる力を与えてくれる」

レステアは、本の中の森をそっと指でなぞった。深く美しいその緑の色に、指が染まりそうな気がした。

父の言葉は、これまで何度も聞かされてきたことの繰り返しだった。ビリヤナは世界の中心。

聖なる森。
「お父さん」
レステアは、こわごわ言ってみた。
「ビリヤナの森のせいで土地が痩せているっていうのは、本当のこと？」
「なんだ」
レステアの身体に回された父の腕が、急に強張ったようだった。
怒らせてしまっただろうか。レステアは後悔したが、口にしてしまった言葉は戻せない。言い訳のように続けた。
「モレア村が貧しいのは、ビリヤナの森のせいだって。森が栄養を吸い取ってしまうから、畑に作物ができないんだって。ねえ、ほんと？　そんなの、おかしいよ。ビリヤナの森は、生きる力を与えてくれるはずなのに、逆にみんなを苦しめるなんて」
モレア村の暮らしは、苦しい。しかも、年を経るごとにますます悪化している。
幼いレステアだって知っていた。父や母は、なるべく子供に苦労をさせまいとしているけれど、それでもわかる。母は、自分のぶんの食べ物をそっとレステアの皿に分けてくれたりする。
二つ上の兄が亡くなったのだって、病気のせいとは言いながら、もとを辿れば、貧しさゆえだった。貧しいから、ろくに栄養のある物を食べられなかった。薬だって買えなかった。兄は高熱にうなされ、苦しみながら死んだ。

「お父さん」
レステアはたまらなくなって、父の腕をぎゅっとつかんだ。
「ビリヤナの森は、本当に大事なの？　本当に私たちを守ってくれるの？　あの森を切り拓いて畑にしたほうが、みんなが助かるんじゃないの？」
「レステア」
父は怒ったような声をあげ、手を振り上げた。
レステアはびくっとしたが、父は娘を打とうとはしなかった。代わりに、膝にのせたレステアをゆすり上げるように抱き直して尋ねた。
「それはおまえの思いつきか？　違うだろう。誰から聞いた？　誰がそんなことを言ったんだ？」
「……」
「怒らないから言いなさい」
レステアはおずおずと、近所に住んでいる若者、ガスタルの名をあげた。
頭のいい、ちょっとひねくれたところのある青年で、レステアにいろいろな話をしてくれた。畑仕事をせずにぶらぶらしていることが多いので、村人たちからは怠け者として嫌われていたが、なかなか物知りなお兄さんだったから、レステアは彼を好いていた。
――ビリヤナは万物の母なんかじゃない。逆さ。あれは諸悪の根源なんだ。

醒めた表情のガスタルは、レステアを前にそう語った。
驚くレステアに、彼は苦笑まじりに肩をすくめてみせた。
——この村の連中は頭が固い。愚かなことさ。ストルタではどんどん進歩的な考えが出てきているっていうのに。このままじゃ、モレアは時代の波から取り残されて、滅んじまうぜ。
しかし、父は険しい顔でレステアを叱った。
レステアはガスタルが少し怖くなったが、彼の話はまんざらでたらめとも思えなかった。
「もう二度と、あんな奴と話してはいけないよ」
「……どうして」
「あいつはろくでなしだ。働きもしないで、罰当たりなことばかり言う」
吐き捨てるような、憎悪に満ちた口調だった。
いつも優しい父なのに、その時に限っては、恐ろしかった。その険しい顔には、力強い信念があふれていた。やはり父の言うことが正しいのだと、レステアは信じた。
——ガスタルの言うことはやっぱり間違ってる。
——ひねくれ者だから、正しいことから目を背けて、勝手な理屈をひねり出しているんだ。
ある日、ガスタルは喧嘩に巻きこまれて大怪我を負った。道でぶつかったとかなんとか、些細なことが原因で、数人の青年が彼を叩きのめしたということだった。
きっかけは小さなことだったが、その背景に、人々の反感があったことは間違いなかった。

ガスタルの無遠慮な発言は、モレア村の人々から激しく憎まれていたのだ。若者たちの喧嘩を数人の村人が見ていたということだったが、止めに入る者は一人もいなかった。

普通ならば、一人を取り囲んで暴行を加えた側に罰が与えられただろう。状況から見れば、ガスタルは明らかに被害者だった。

だが、暴行者たちが咎められることはなかった。彼らには軽い注意が与えられただけで、事件はうやむやのままにされた。

むしろ、被害者のほうに冷たい目が向けられるようになった。怪我の治りきらないガスタルが、足を引きずりながら村の店に現われたりすると、人々はぴたっと話をやめて迷惑げな視線を浴びせた。

結局、数日後にガスタルは村を出て行った。彼の両親が、近所の目を気にして、息子を親戚のもとへ追いやったという話だった。

レステアの胸は少し痛んだが、ほっとする気持ちのほうが大きかった。

もう、彼の姿を見かけてあわてて逃げたりしなくていい。みんなが見ているところで話しかけられたりしないかとひやひやすることもない。

出発の前日、ガスタルは別れの挨拶をしたいとレステアの家を訪ねたが、父親がけんもほろろに追い返した。

レステアは自分の部屋に閉じこもり、顔を出さなかった。

後ろめたいような、恥ずかしいような、自分が腹立たしいような、嫌な気分が残った。それは、村全体に満ちている陰気な空気と同じだった。

異端者を大勢で傷つけたことへの罪悪感。それを補うために余計に煽りたてた憎悪。モレア村は、村ぐるみで、少しずつ歪み始めていたのかもしれない。

父が、家族にも詳しく話さない活動に加わっていることは、薄々感づいていた。

父は時々夜中に出かけていって、朝方まで帰って来ないことがあった。レステアの家に、暗い顔つきの男たちが集まってくることもあった。

彼らはぼそぼそした声で何かを話しあっていた。陰鬱な、気の滅入る空気を漂わせて。

レステアは彼らが嫌いだった。父がその中に混じっていることが、とても嫌だった。けれど、父はむしろ彼らの中心になって場を仕切っているらしかった。

ストルタ。ビリヤナ。そんな単語が時々漏れ聞こえてきた。

レステアは耳をそばだてようとしたが、そのたびに、母にやんわりと注意されたり、用事を言いつけられて家から出されてしまったりした。

ストルタは、近隣の村の名だ。ビリヤナの森の処置をめぐって、モレア村とは昔から対立していた。

村を追い出されたあのガスタルは、ストルタ村に共感していた。レステアにとって、ストル

タという名前は、不吉なまじないのように聞こえた。
　ある日、レステアは父の部屋で刃物を見つけた。たまたま、本を借りようと思って部屋に入ってみたら、机の脇に立てかけてあったのだ。
　レステアはどきっとした。日常の生活で使うような、鉈や斧ではなかった。鋭く研ぎ澄まされた剣だった。
　こんなもの、どうするのだろう。何に使うのだろう。
　レステアが立ちすくんでいるところへ、父が入ってきた。
　父は勝手に部屋に入った娘を叱り、このことを人に言ってはいけないと厳しく言いつけた。
「お父さん。これ、何に使うの」
　レステアは剣を指差し、勇気をふるって尋ねてみた。
「おまえは知らなくていい」
　父は不機嫌な顔でそう答え、剣を布で幾重にもくるんで戸棚にしまった。

　運命が暗転したあの日のことを、レステアは今もよく覚えている。
　父は前夜から出かけていた。そのことは珍しくなかったけれど、母がいつになく口数が少なく、緊張した顔をしているので、何かあるらしいと気にかかった。
「お父さんはどこへ行ったの」

何気ない顔でそう尋ねてみたが、母は言葉を濁すばかりだった。

母の表情のせいだろうか、家の中にぴりぴりした雰囲気があった。足音をたてることすらはばかられるほど、空気が張り詰めていた。

何か、嫌なことが起きるのではないか。父の身に、よくないことが。そんな不吉な予感がして、たまらなかった。

予感は間もなく現実になった。報せが届いたのは真夜中のことで、レステアはもう眠りについていた。眠りは浅く、玄関先の物音にすぐに目を覚ました。

あわただしい足音がしていた。レステアは飛び起きて部屋を出た。

母が床に頽れて泣いていた。数人の男性が彼女を取り囲むように立っていた。

侵入した暴漢たちに母が襲われている。てっきりそう思ったレステアは、叫び声をあげて男たちに向かって行った。男たちは彼女をつかまえて落ち着かせ、重苦しい声で告げた。

「心をしっかりもって聞きなさい。お父さんが亡くなったのだよ」

母の泣き声が高くなり、レステアは呼吸を止めた。驚きというより、もっと鈍い、おなかの底が痛くなるような衝撃があった。

――やっぱり。

口には出さなかったけれど、レステアはとっさにそう思った。恐れていたことが本当になった。そんな気がした。

「どこ？　お父さんはどこ？」

レステアは男たちにすがりついて尋ねたが、彼らは首を振るばかりだった。

「どうして？　お父さんに会わせて。ねえ、会わせて」

最後は悲鳴のような声になった。母がしっかりレステアを抱きしめた。

結局、わけがわからないまま、母と二人で取り残された。詳しいことは何も教えられずに、心細い夜明けを迎えた。

事情がわかったのは、昼になってからだった。

父は殺されたのだ。ストルタ村の者に。

しかも、死んだのは父だけではなかった。モレア村の男たちが五人も亡くなっていた。

あまりに異常な出来事だった。レステアは呆然とした。父の部屋で見た剣と、あの時の父の怖い顔を思い出した。

「なぜ？　お父さんは、なぜストルタ村なんかに行ったの？　なぜ殺されたの？　誰がそんなひどいことをしたの？」

大人たちは、レステアの問いになかなか答えてくれようとはしなかった。父の遺体が戻って来ない理由すらも、聞かされなかった。

レステアは混乱した。

自分を取り残して、いろいろなことが進んでいく。

父が死に、母が泣き伏し、何人もの大人たちが難しい顔で家に出入りしているというのに、レステアには何も教えてもらえなかった。
「君のお父さんは英雄だよ。モレアのために死んだのだよ」
誰かがそう耳打ちしてくれた。
その一言を手がかりに、レステアは想像するしかなかった。
父は英雄として死んだ。いや、殺されたのだ。敵対するストルタ村に赴いて。
彼はきっと、戦いに行ったのだ。おそらく、ビリヤナの森を切り倒そうとする邪悪な計画を阻止するために。
戦いに敗れて、父は殺されたのだ。
もちろんレステアは悲しかった。声をあげて泣いた。
しかし、より大きな悲しみは、その後にやってきた。
父は、名誉ある死を遂げたのではない——そのことを知った時、レステアは気が狂いそうなほどの暗闇に突き落とされた。
レステアの父を含む七人の死は、モレア村ではほとんど禁忌のようだった。
皆、その話題に触れることを避けた。レステアたち遺族が嫌な扱いを受けることはなかったけれど、村人たちが腫れ物に触るように遠慮しているのがひしひしと感じられて、レステアに

は居心地が悪かった。

なんだか妙だと思った。

父が英雄的に死んだのであれば、こんな風に避けられることはないはずだ。みんなもっと同情して、父のことを語ってくれるはずだ。

レステアは父の死の真相を探ろうとしたが、事情を知っていそうな人は皆口を閉ざした。

母には聞けなかった。父の死後、今までよりもさらに痩せ細って病人のようになってしまった母に、追い打ちをかけるような質問をすれば、本当に彼女の身体と心を壊してしまいそうだった。

レステアは、話を聞かせてくれる人を捜し求めた。

その人物は、思いがけないところにいた。

ガスタルである。村を追い出されたはずのあの青年が、騒ぎに紛れるようにして、いつの間にか戻って来たのだった。

彼は両親と住んでいた家には戻らず、廃屋だった小さな小屋を借りて一人住まいを始めていた。以前もつきあいが悪かったが、戻って来てからはほとんど小屋に閉じこもりきりで、村人たちの集まるところには顔を出さなかった。

ガスタルが帰ってきたらしい。そんな噂を聞きつけて、レステアは思いきって彼を訪ねることにした。

ガスタルは物知りだ。それに、皮肉やだけれど、レステアを子供扱いせずに真面目に話をしてくれる。村の人たちが話したがらないようなことでも、彼なら教えてくれるに違いない。

レステアの突然の訪問に、青年は驚いたようだったが、喜んで迎えてくれた。

彼は薄々、レステアが訪れた理由を察しているようだった。レステアが切り出すより先に、言った。

「お父さんのことは、気の毒だった」

「……うん」

レステアはうなずいた。

ガスタルは例の怪我の後遺症なのか、片足を引きずりながら、レステアに粗末な椅子を勧めた。レステアは青年と向きあって椅子に座った。

「ガスタル、何か知ってる？」

思いきって彼の顔を見上げた。

「何かって？」

「お父さんが死んだ時のことよ。ストルタの人たちに殺されたんだって聞いてるけど、詳しいことを誰も教えてくれないの。何が起きたのか、知っている？」

「おや」

ガスタルは眉を上げた。青白い顔色と皮肉な表情は、以前と変わっていなかった。

「君は知らないのかい」
「誰も教えてくれないのよ。お父さんの亡骸にすら会わせてもらえなかった」
「そうか。まあ、そうだろうな」
ガスタルは訳知り顔でうなずいた。
レステアはもどかしくなって叫んだ。
「何か知っているなら教えて。誰がお父さんを殺したの？　ストルタの人たちは、なぜお父さんを？」
「知ってどうするんだ」
「どうするって……」
レステアは言葉に詰まった。
そんなことは考えてもいなかった。真相を知りたいだけだった。だが、誘導されるように彼女は答えていた。
「もちろん、復讐するのよ」
「復讐？」
「そう、お父さんを殺した奴らに仕返しをしてやるのよ」
「やめたほうがいいな」
ガスタルは薄笑いを浮かべた。その表情が癪にさわって、レステアは声を荒らげた。

「あなたにそんなこと言われたくないわ。知ってるなら教えてよ。私のお父さんのことなのよ。私が知らないですませられると思う?」
「ま、落ち着きたまえ」
ガスタルは相手の気持ちを逆撫でする声で言って、掌を下へ向けた。
レステアは青年を睨みつけた。
「知りたいなら教えてあげるよ。もっとも、君には辛い話かもしれないが」
「——教えて」
「よし。まず、村の人たちがなぜお父さんの話を避けたがるのか、その理由から話そう」
ガスタルは卓の上に身を乗り出すようにして、声をひそめた。
「連中は、君のお父さんのしたことをどうしても受け入れられずにいるのさ。森を守護するという役割を君のお父さんに押しつけておきながら、厄介事が生じると顔をしかめて避けようとする。それが、この村の連中のやりかたさ」
ガスタルは唇の端をつり上げた。
レステアは眉をひそめる。
「……わからないわ。どういうこと?」
「村の連中にとって、君のお父さんは、モレアの名誉を汚した忌むべき存在なんだ。なぜなら彼は、卑劣な手段でストルタの人間を襲い、幼い子供までも殺そうとした悪人だから」

レステアは目を見開いた。ガスタルは彼女の反応を愉しむように目を細めた。

「本当に何も知らないんだな。ま、無理もない」

そしてガスタルはレステアに話して聞かせた。ストルタ村で何が起きたのか。レステアの父たちが何をし、どのように死んだのか。ためらうことなく、淡々と。

聞きながら、レステアは全身が震え始めるのを感じた。冷気が足元から、襟首から入りこんできて、レステアを怯えさせた。父の死に様は、レステアがこれまで漠然と想像してきたのと全然違っていた。

「そんな……」

ガスタルが語り終えた時、レステアはかすれた声でつぶやいた。

「うそだわ。お父さんは正々堂々と戦って死んだのよ」

「君がそう思いたがる気持ちはわかるがね」

「だけど、まさか、私のお父さんがそんな卑怯なことをするはずが……」

「わかったかい、レステア。なぜ村人たちが話したがらないのか」

ガスタルははすに構えて、レステアの顔をちらっと見た。レステアは耐えきれず、両手で顔を覆ってしまった。

押し殺したすすり泣きが漏れる。ガスタルの言葉は、レステアをどん底まで打ちのめした。

父の死は確かに悲しいことだったけれど、それが名誉の死であったと思えばこそ、なんとか

乗り越えることができたのだ。だが、そうではなかった。父は一家団欒（いっかだんらん）の場を襲い、幼い子供までも手にかけようとした卑劣漢（ひれつかん）だった——。

「考えるんだ、レステア」

ガスタルは卓に手をついて、言い聞かせた。

「本当に卑劣だったのは誰なのか。君のお父さんか？　いや、違う」

力強い否定だった。レステアは顔を覆っていた手を下ろし、ガスタルの顔を見つめた。

「彼がやらなければ、いずれ他（ほか）の誰かが同じことをしただろう。もしも彼が成功し、無事に村に生還（せいかん）していたなら、今頃は英雄扱いだっただろうさ。彼はしくじったために、極悪人（ごくあくにん）のような扱いを受けているんだ。おかしな話じゃないか。君のお父さんを裁（さば）く権利など、誰にもありはしないのに」

「……だけど……」

レステアは戸惑（とまど）った。皮肉やのガスタルが父を庇（かば）うようなことを言ってくれるなんて、意外だった。

「俺はね、自分の手を汚さずに綺麗事（きれいごと）を並べる連中に我慢（がまん）がならないのさ」

ガスタルは彼らしく辛辣（しんらつ）な口調でそう説明した。

レステアは立ち上がり、よろめきながら部屋を出た。ガスタルが念を押すように、「考えるんだ、レステア」と繰り返した。その言葉はほとんど彼女の耳には入らなかったが、無意識下

にしっかり刻みこまれた。
——考えなくては。
誰が本当に卑劣だったのか。父は本当に、罪深き暗殺者だったのか。
レステアは悪夢の中を手探りでさまようようにして、なんとか家に帰り着いた。食事も取らず、ベッドに横たわっても、なお彼女は考え続けていた。彼女の思いが向かうのは、殺戮の現場でただ一人生き残ったという少年のことだった。
何者なのだろう。何が起きたというのだろう。彼が、事件の鍵を握っているに違いない。
その少年は、手の甲に不思議なあざを持っていると、ガスタルは語った。レステアは自分の右胸に手を当てた。まるでそこに重石をのせられたように苦しかった。
そこには、生まれつきのあざがある。父はたびたび、彼女に言い聞かせた。
——決して、他人に言ってはならないよ。そのあざを不吉な印と見る人も多いからね。おまえがそれを持っていると知ったら、いじめる人もいるだろう。だから決して、他人に知られてはならないんだよ。
レステアは胸に手を押し当てて泣いた。
父はいつも彼女のことを気遣い、大事に育ててくれた。想い出が次々に蘇ってくる。父の死を聞いて以来、凍りついていた感情が、ようやく溶けたようだった。レステアは大声で泣きじゃくった。

悲しみのためばかりではなかった。父の無念さ、村人たちへの怒り、悔しさ、憎しみ、そういった負の感情が混ざりあって、今にも爆発してしまいそうだった。
レステアの心を焼く怒りと憎しみは、やがて、鉱物のように硬く研ぎ澄まされ、純化されていった。彼女の憎悪の対象となったのは、むろん、ストルタの少年だった。
クレストを持った化け物。父たちを一瞬で殺したという怪物。
自分の胸にも同じあざがあるのだという苦しさが、余計に少年に対する憎悪をかきたてた。
レステアはほとんど食事もとらず、浅い眠りのたびに襲いかかってくる悪夢にうなされながら、幾つかの夜と昼を過ごした。
恐怖と憎悪の堂々めぐりをようやく断ち切り、寝台を離れた時、彼女は一つの決意を固めていた。

レステアは人が変わったように熱心に働き始めた。
それまでも、家や近所の手伝いくらいのことはしていたが、金を稼ぐための労働はしたことがなかった。彼女は村の商店や農家を訪ね、何か自分にできる仕事はないかと探した。
「お父さんが死んでから、お母さんは苦労してばかりなの。たまにはおいしいものを食べさせてあげたくて、お金が要るの」
そう訴えるレステアに、人々は同情を寄せた。

少々、後ろめたかった。レステアが働くのは、確かに、母や自分の生活の糧を得るためでもあったが、そればかりではなかった。だがレステアは事情を何も話さず、健気な少女を演じ、普通よりもいい条件で仕事を与えられた。

水汲み、農作業、針仕事、酒場の給仕、なんでもやった。レステアはもともと手先が器用だし、体力もあったから、たいていの仕事はこなせた。愚痴一つこぼさず真面目に働くので、村人たちに重宝されるようになった。

とはいっても、母と自分が村人たちに決して受け入れられていないことは、はっきり感じ取れた。表立っていじめられるようなことはなかったが、父が生きていた頃のようにすんなり村人たちの輪に溶けこむことはもうできなかった。人々はよそ者に対するようによそよそしくレステアたちに接した。

それだけならば、レステアは気に留めなかっただろう。心配なのは、母が村人たちの対応をひどく気に病んでいることだった。

母はしばしば、愚痴っぽく口にするようになった。

——お父さんがあんな馬鹿なことをしなければねえ。

——顔を上げて歩けないって、辛いことだね、レステア。

そのたびにレステアは苛立った。お母さんは何もわかっていない、と怒鳴りつけてしまい、口論になることもあった。

父だけが責められるいわれはないのだと、レステアはなんとか母にわからせようとしたが、無駄だった。母はすっかり打ちのめされ、塞ぎこみ、希望を失っていた。レステアが稼いできたお金でご馳走を作っても、喜ぶどころか、かえってやりきれないため息をついて顔を背けてしまうのだった。

何年かが過ぎた。母は日ごとに衰え、寝たり起きたりの生活を送っていたが、ある日ついに植物が枯れるように静かな死を迎えた。ある朝、母の部屋の窓を開けようとしたレステアが気づいた時には、もうベッドの上で冷たくなっていたのである。

衰弱死ということだったけれど、ほとんど自殺のようなものだった。夫の死に様を恥じ、世間から逃げ回るようにしてひっそりと暮らしてきた女が、みずから望んで安息を選んだのだった。

村人たちが慰めに来た。形ばかりの弔問だった。

彼らはレステアが泣きもしないのを見て眉をひそめた。気の強い娘だ、と聞こえよがしに言う者もいた。

実のところ、レステアにはもう悲しむだけの心のゆとりなど残っていなかったのだ。兄も父も、そして今また母も、みんな運命に狂わされるようにして死んでいった。今や彼女は天涯孤独だった。

がらんとした家に一人残されて、彼女は思った。

もう、人間らしい心なんて全部捨ててしまってかまわない。

愛も優しさも、ナイフで削り取るようになくしてしまえばいい。

胸に宿った憎悪を、どんどん研ぎ澄ませて、冷たい結晶にしてしまえばいい。

レステアは生まれ故郷を離れ、もっと人口の多い豊かな地方に向かうことにした。

そこは、モレア村よりは裕福で、稼ぎのいい働き口もいろいろあった。それに、遠方からの旅人も多く、情報が集まりやすかった。

レステアは、村にいた時よりもさらに忙しく働くようになった。娼婦たちが客を誘いに来る、いかがわしい酒場にも出入りした。

――皿なんて洗ってないで、こっちへ来いよ。

好色そうな男たちがそんな声をかけてくることもしばしばだった。レステアは顔も身体も十分に美しかったから、年齢よりも二つ三つは大人びて見られた。

――また今度ね。

レステアは相手を怒らせないよう、やんわりと断った。しつこく誘われても、決して応じなかった。お固い娘だよ、とからかわれたが、レステアの本心は違った。

貞操や、潔癖さのためではない。金のためだったら、身体でも心でも投げ出すことにためらいはなかった。

彼女が身体を売らない理由は、ただ一つ、肌をあらわにすれば右胸の呪われた印を見られて

しまうからだった。

　レステアは真面目に働き、こつこつと金を貯めながら、流れてくる噂に耳をそばだてた。旅人や傭兵が集まる酒場は、情報収集にはもってこいの場所だった。

　ストルタの少年ユテラルドは、その後、故郷を離れてセクルエに引き取られたという話だった。その後の消息はよくわからなかったが、やがて、剣の腕を磨いてストルタ軍に加わったらしいという噂が伝わってきた。

　レステアは、いよいよ計画を実行に移す機が熟したと感じた。彼女は傭兵を探し始めた。彼女の依頼を完璧にこなしてくれる、腕のいい傭兵を。

　情報屋たちの話題に頻繁にのぼるのは、アルフトアインという名だった。最近、異大陸から渡ってきた男だという。無口で無愛想だが、すさまじく腕が立つ。彼の動向を見て、身の振り方を考える傭兵もいるという有り様だった。

　ストルタにもモレアにも縁がなく、金次第でどちらにでもつくらしい。レステアはその男に興味をもった。

　彼が常駐しているという酒場は、村の北方、鉱山口の近くにあった。

　覚悟はしていたが、その一角に踏み込んだとたん、レステアはたじろいだ。それは、まともな人間なら近づこうとすら思わない、荒れた裏町だった。荒んだ目をした男たちがうろつく、血と酒の臭いの漂う場末だった。

アルフトアインのいる店は、その最奥の地下にあった。そこに比べれば、レステアがいつも働いている店などは、お上品な社交場と呼んでもいいくらいだった。

レステアはすえた臭いのする階段を下り、勇気を奮い起こしてドアを開けた。

酒の臭いと、あやしげな煙草の臭いが立ちこめていた。異国風の音楽が鳴り響き、肌もあらわな女たちが身をくねらせて踊っていた。

レステアに気づいた連中が、ひやかすような声をあげた。薄暗がりの中から幾本もの手が伸びてきたが、払いのけた。

黒い髪の傭兵は、一番奥のテーブルにいた。小さな椅子に窮屈そうに腰かけて、強い酒を呷っていた。

レステアが近づいて行くと、彼は気づいて、長い前髪の下から彼女を見た。

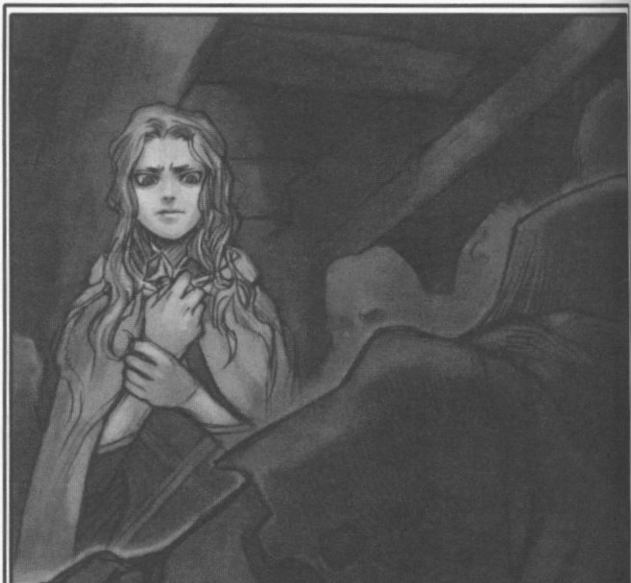
視線が絡んだとたん、レステアは震えた。

アルフトアインの目は鋭く、冷たかった。かなり飲んでいるはずなのに、その瞳は醒めきっていた。

こんな目をした人物に会うのは初めてだった。彼女がこれまで生きてきた世界とはまったく違う、本当の修羅をくぐり抜けてきた者の目だった。

レステアは彼に、人殺しを依頼した。

ストルタ軍のユテラルドという男を殺して欲しい。



レステアは彼に、人殺しを依頼した。
ストルタ軍のユテラルドという男を殺して欲しい。

アルフトアインは最初、迷惑そうだったが、話を聞くうちに面白がるような表情になった。脈はある。彼女は持ってきた革袋を差し出した。

——このお金を差しあげます。どうかこれで、ユテラルドを。

傭兵は面倒くさそうに手を伸ばし、片手で革袋をつかむと、とたんに笑いだした。大きな手の上で袋を弄びながら。

成り行きを見守っていた周囲の男たちも、声を合わせて笑っていた。

——出直してきな、お嬢ちゃん。こんな小遣いで雇われるほど、俺は安くはないぜ。

周りの声が爆笑に変わった。

レステアは立ちすくんだ。恥ずかしさと悔しさで、頭がぼうっとなった。

ひったくるように革袋を取り返して、店を走り出た。

酔漢たちの下品な口笛と拍手が彼女を送った。

その夜は眠れなかった。

結局、彼女が誓った復讐の思いは、ただのお遊びだったのだろうか。

数々の修羅場をくぐってきた傭兵から見れば、「お嬢ちゃん」の気迷い程度でしかなかったのだろうか。

何年もかけてこつこつ貯めてきた金も、役に立たなかった。彼女が必死に考えてきた計画は、

まったくなんの意味も為(な)さなかった。
レステアは泣きじゃくった。これまでの数年間、自分は何をしてきたのだろう。手詰(てづ)まりの絶望感に打ちのめされそうだった。
夜明けまで泣いた後、彼女は決意した。
傭兵になんて、頼らない。
他人が頼りにならないなら、自分でなんとかするしかない。
ユテラルドを殺すのは、自分しかいない。
軍に加わるのだ。ストルタと戦うために。
折(おり)しも、情勢(じょうせい)は急速に不穏(ふおん)になりつつあった。ストルタを中心として、統一国家フォントレールの母体(ぼたい)が作られ、ビリヤナの森伐採を強行(きょうこう)しようとする意見が強まっていた。あくまでもそれに反対するモレア村はフォントレールから除外(じょがい)され、孤立(こりつ)しつつあった。
各地で小競(こぜ)り合(あ)いが頻発(ひんぱつ)し、いつ大きな戦(いくさ)になってもおかしくない状況だった。アルフトアインのような戦士たちが大量にこの大陸に流入(りゅうにゅう)しているのも、金になる戦いを求めてのことだった。
レステアは剣を習い始めた。女の身で……と最初は呆(あき)れられたが、彼女の熱心さがものをいった。
同時に彼女は、消滅帝国リューベーンについて調べ始めた。幼い頃に聞いたおとぎ噺が、ど

れほどの真実を含んでいたのか、文献を読み漁った。

古文書の解読は難しく、正式な学問を受けたことのない彼女には、気が遠くなりそうな作業だったけれど、レステアは挫けなかった。

誰も頼れない。味方は一人もいない。道は自分で切り開くしかない。

その思いが、レステアを奮起させた。

リューベーン帝国、ビリヤナの森、パルミラ、そしてクレスト。これらについて、彼女は少しずつ知識を蓄えていった。そして、かつて絵本で読んだ出来事が、決して絵空事ではなかったことを知った。

リューベーン帝国で行われた研究を、人秘学と呼ぶ。ビリヤナの実から抽出されるエキスを結晶化したパルミラを利用し、武具を作り、クレストと感応させることによって人の能力を爆発的に高めるのだ。

それは、恐るべき研究だった。調べれば調べるほど、レステアは失われた人秘学へのめりこんでいった。

この秘密さえ解ければ。

失われた知識を復活させることさえできれば。

ユテラルドもストルタ軍も、恐れるに足らない存在となる。ユテラルドの持つクレストの力を封じることもできるだろう。

レステアは文献を読みふけり、その一方で戦の仕方を学んでいった。
体力でどうしても男たちに劣る彼女は、頭を使う戦いを選ぶしかなかった。
古来の戦術、戦法を説いた書をひもとき、ストルタ軍に関する情報も集めた。寝る間も惜しんで、彼女は戦に備えた。
やがて、その努力が実る日がきた。レステアはモレア軍への入隊を認められたのである。
最初のうちは、もちろん相手にしてもらえなかった。女の身で軍人となったことを奇異の目で見られ、嘲笑われるだけだった。
レステアは意に介せず、多くの的確な進言を行なって、注目されるようになっていった。
笑わぬ女将軍。いつしか彼女はそう呼ばれるようになった。
その通り、モレア軍に加わってからの彼女は、笑顔を見せることがなかった。友人も、もちろん恋人も作らず、つねに孤立して、相変わらず人秘学の研究にのめりこんでいた。
戦争はいよいよ激化していった。やがて、ユテラルドの名をよく耳にするようになった。
彼は優れた剣の使い手で、モレア軍をさんざん苦しめた。まるで鬼神が乗り移ったかのように強い、とも言われた。クレストの力を借りずとも戦えることを、彼はみずからの剣によって実証してみせたのだった。
〝ストルタの希望〟フェルクや、〝セクルエの剣士〟リヤナらとともに、ユテラルドは四剣主と呼ばれるようになった。四人の中に、彼女がかつて依頼しようとした傭兵アルフトアインの

名もあることを知り、レステアは運命の皮肉に苦笑した。

戦況は、モレアに不利だった。ストルタ軍の猛攻に耐えかね、モレア軍は敗退を重ねていった。日を追うごとに、敗色が濃くなっていった。

レステアは小部隊を任された。

彼女の指揮は的確だった。モレアの主力部隊が次々と敗退していくなか、彼女の小さな部隊だけが、勝利をいくつも挙げた。

だが、そのくらいではもはや全体の戦況を覆すことは不可能だった。歴史の波が、モレアを飲みこもうとしていることは明らかだった。

レステアは、気に留めなかった。

彼女にとって一番大事なのは、モレアの勝利でも、ビリヤナの森の保護でもない。

復讐だ。父を殺した相手。母を破滅に追いやった相手。しかも、自分と同じクレストを持つ少年。

ユテラルドに向けた、身を焼くほどの憎しみだけが、彼女を衝き動かしていた。

第五章

報せを受けた時、ユテラルドたちは半信半疑だった。

彼は、フェルクやアルフトアインとともにセクルエにいた。正確にいえば、リヤナの家に、である。

モレア残党を取り逃がしたストルタ軍は、結局、リヤナの提案にしたがって、ビリヤナの森伐採を進めることになった。その動きを知れば、レステアたちも姿を現わさざるをえないだろうという計算だった。

そうした作戦に向いているリヤナだけが現地に残り、兵を指揮することになった。四剣主のうち残る三人は、モレア残党の噂を追って、セクルエに来たのである。この付近で、モレア兵らしい一団を見たという証言があったからだ。

なかなか手がかりがつかめず、苛立ちを募らせていた時だった。通報は貴重だったが、その内容が奇妙だった。

朝から図書館に来ている若い女がいる。リューベーン帝国に関する文献を熱心に読み漁っている。普段は見かけない顔だし、旅人というわけでもなさそうだ。年齢からして、ストルタ軍が追っている女かもしれない。セクルエ図書館から、そういう報せが届いたのだった。

「レステアは潜伏中なんだぜ。図書館なんかにのこのこ現われるか？」

フェルクが首を傾げた。

リヤナの家の中庭で、セクルエ地方の地図を広げて、しらみつぶしの捜索計画を練っている

最中だった。

「しかも、リューベーン帝国の本だと？　なんだ、そりゃ。役にも立たねえ。奴らにしてみれば、そんな呑気なことやってる場合じゃねえだろ。人違いに決まってるさ」

フェルクは面倒くさそうに言って、また地図に視線を落とした。あやしいと思われる地点と、捜索済みの地点とに、それぞれ印がついている。

「リューベーンか……」

ユテラルドがつぶやく。

「気になるな」

「何が」

「若い娘が読みふけるには、妙な本だ」

「そうか？」

フェルクは読書にはさっぱり関心がない。誰がどんな本を読もうが、彼の知ったことではない。

「セクルエの図書館……あそこが所蔵しているリューベーンの本なら、オレも何冊か目を通したことがある」

「そういえばおまえはセクルエで育ったのだったな」

アルフトアインの言葉にうなずいて、ユテラルドは続けた。

「あの図書館には、リューベーンに関する研究書がほぼすべて揃っている。消滅帝国の伝説に興味があるなら、見逃せない蔵書だ」
「だからなんだよ？　あのな、考えてもみろよ、レステアは今、オレたちから逃げ回ってる最中なんだぜ。いくら昔のおとぎ噺が好きだからって、図書館なんかにのこのこ姿を現わすかってーの」
「——なるほど」
　アルフトアインが、フェルクの発言をまったく無視してユテラルドに言った。
「人秘学か」
「ああ。彼女は、モレアを救う最後の策として、パルミラ武具を復活させようと企んでいるんじゃないだろうか」
「面白いことを考える」
　アルフトアインは笑った。
　フェルクが癇癪を起こした。
「おめーらなあ、仲良さそーに二人だけでわかりあってるんじゃねえよ！　オレにもわかるように説明しやがれ」
「人秘学について何か知っているか？」
　アルフトアインの質問に、フェルクはきっぱり「いや」と答えた。

「パルミラについて聞いたことは？」
「ない」
「消滅帝国とは？」
「おとぎ噺だろ」
アルフトアインは「やれやれ」とばかりに肩をすくめて両手を広げた。フェルクはまた怒りだした。
「馬鹿にすんなっ！　リューベーン帝国だとか図書館だとか、そんなもんがなんの役に立つってんだよ！　レステアが図書館に現われる理由があるってんなら、言ってみやがれ！」
ユテラルドとアルフトアインは顔を見合わせた。どちらも説明するのを面倒くさがって、押しつけあっているのである。
無言の勝負に負けたのはユテラルドだった。彼はフェルクに向き直った。
「消滅帝国リューベーンには、人秘学という学問があった。簡単に言えば、ビリヤナの森の力を利用しようとする研究だ。ビリヤナの実から、パルミラという結晶体が採れる。これを使って武器を作ると、人間の力を超人的に高めることができるんだ」
「くっだらねえ。おとぎ噺だろ？」
「今では、ほとんどの人がそう思っている。しかし、人秘学を真面目に研究し、現代に復活させようとしている学者も、少数だがいる。セクルエの図書館に集められているのは、そういう

研究書なんだ」
「それで？」
「レステアは、人秘学に目をつけたんじゃないだろうか。パルミラ武具を現代に蘇らせて、ストルタ軍に対抗しようとしてるんじゃ……」
「なんだ、そりゃ」
フェルクは椅子の上でのけぞって笑いだした。
「レステアのやつ、追い詰められて気が変になったってことか？　いいや、オレは信じねえ。あのアマは、そんなおとぎ噺に夢中になるような夢見る乙女じゃねえよ。図書館になんか現われるもんか」
「夢を見るのは乙女に限らぬ」
アルフトアインが空を見上げながら言った。
「戦士は戦士の夢を見る」
「なんだそりゃ」
「――と、どこかの詩人が言っていた」
「がらにもねえこと言うな、気色悪い」
「人秘学は、おまえが考えているほど荒唐無稽なおとぎ噺じゃない」
ユテラルドが言った。

「むろん、リューベーン帝国に関する伝説には眉唾ものの話も多いが、少なくとも人秘学という学問がかつて存在し、それなりの成果を挙げていたことは確かだ。研究者たちはそう言っている」
「へへ」
「現に、人秘学において重要視された、呪いの烙印——つまりクレストを持つ人間は、今でも存在している」
「どうだかね。クレストの話は、オレもガキの頃に聞いたことがある。だけど、それこそ眉唾だぜ。オレはこれまで何千人もの人間を見てきたが、そんな奇妙なあざを持ってるヤツなんて、お目にかかったことは……」
ないね、とうそぶいたフェルクの目の前で、ユテラルドはゆっくり右手の布をほどき始めた。
フェルクの目が訝しげに細められたかと思うと、突然、丸くなった。
ユテラルドが示した右手の甲に、くっきり浮かび上がっていた。目のような、星のような、不思議な形のあざが。
フェルクは魅入られたようにユテラルドの右手を見つめた。しばらくは言葉も出てこない様子だった。
ごくんと唾を飲みこんで、彼は尋ねた。
「……なんだ、それ。刺青……？」

「じゃない。これがクレストだ」
ユテラルドは再び、右手の布を丁寧に巻いた。
まだ呆然としているフェルクに、ユテラルドは言った。
「オレには生まれつきこのあざがある。オレの父親にもあった。ストルタ村の連中はこれのせいでオレを忌み嫌った。このあざを持って生まれた人間の周りでは、次々に不幸が起きると言ってな」
ユテラルドは笑った。
フェルクはまだ信じられないような顔をしている。腑抜けたような、いつもより毒のない子供っぽい声で尋ねた。
「だけど、そんなもの……ただのあざだろ？　模様のように見えるのは、偶然だろ？　クレストなんて、まさか……」
「さあな。オレにはわからない。ただ、クレストが不幸を呼ぶというなら、なるほど思い当たる節はあるぜ。聞いてるだろう、オレの家族はモレアの奴らに殺された。そのモレアの暗殺者たちも、みんな謎の死を遂げた。誰の仕業かはわからないが、オレのこのクレストのせいだという者もいた」
「おまえ……」
フェルクの声は震えていた。いつも強気が信条の彼らしくもなく。

「これまで、言わなかったじゃないか。そんなあざのこと、一言も……」
「聞かなかったじゃないか」
「……」
フェルクは、興味なさそうに聞いているアルフトアインと、ユテラルドとを見比べた。
「……おめーら、性格似てるな、ひょっとして？」
「そうか？」
「本当なのか？　本当に……その……」
フェルクはためらいがちに尋ねた。
「おまえのそのあざが、人を殺したのか？」
「知らない。オレは何も覚えてないんだ。とにかく、クレストは今も存在する。伝説の中だけじゃなく。だとしたら、人秘学だってあながち嘘っぱちとは言えまい？　リューベーン帝国の研究によれば、パルミラ武具を使いこなせるのは、クレストを持った人間だけだという。もしもレステアが、その方法を復活させようと考えているなら……」
ユテラルドは言葉を切った。
彼ははっとしてアルフトアインに目をやった。アルフトアインも険しい目でユテラルドを見ていた。
「……まさか」

「ああ。俺もその可能性を考えていたところだ」
ユテラルドは顔を強張らせ、布を巻いた右手の上に左の手をのせた。
フェルクがまたしても怒りだし、テーブルを叩いた。
「おめーら、さっきから二人だけの世界を作るんじゃねえっ！　なんの可能性だって？　オレにも解説してくれ！」
「つまり」
と、アルフトアイン。
「レステアが人秘学を利用することを思いついたのは、彼女にもパルミラ武具を使える可能性があるからではないか。すなわち、彼女自身がユテラルドと同じく、クレストを持っているのではないかということだ」
「考えられる」
ユテラルドはうなずいた。
「いや、そうとしか考えられない。アルフトアイン、君はレステアに会ったことがあるんだろう。その時、彼女からそんな話を聞かなかったか？」
「いいや」
アルフトアインは首を振った。
「ただ、噂を聞いたことはある。モレアの笑わぬ女将軍は、決して肌を見せない。恋人も作ら

んし、そればかりか、暑い盛りの日でもきっちり襟の詰まった服を着ている。よほど男どもの視線が気に食わんらしいと、からかう連中もいる」

「──図書館だ」

ユテラルドは叫んで立ち上がった。

アルフトアインも椅子を蹴るようにして立った。一拍遅れて、フェルクも続く。彼はまだ、事情がよく飲みこめないような顔をしていたのだが。

気がつけば、ランプの明かりに照らされた机の上だけをのぞいて、部屋は濃紫の闇に沈んでいた。

セクルエの図書館は歴史が古く、リューベーンに関する研究書も豊富に揃っている。それを知って、レステアは部下たちの制止を顧みずに単身ここを訪れたのだった。

人秘学を復活させれば、必ず勝てる。ユテラルドを殺し、ストルタ軍を粉砕し、モレア軍に大逆転勝利をもたらすことができる。

今やそれは、レステアにとって最後の希望だった。

兵を失い、拠点を失っても、パルミラの秘術さえ解き明かすことができれば。

人の能力を爆発的に高めるといわれるその秘法さえ復活させることができれば、奇跡はきっと起きる。

方策を探るために読み始めた本だったが、レステアはすぐに、目的を忘れて本に没頭してしまった。

幼い頃、父の膝の上で見た絵本が脳裏に鮮やかに蘇る。もちろん、ここにある本は絵本ではなく、挿し絵も図版もなかったが、レステアには見えるような気がした。白亜の王宮、整然と並ぶ立木、色とりどりの野菜を積んだ商店の軒先……リューベーンの伝説は、いつまでも色褪せることなく本の中に存在していた。

午前中から夢中になって読みふけったが、結局、目を通すことのできた本はわずか数冊だった。

今日はもうそろそろ閉館の時間だろう。何日もかけて通わなければ、到底読みきることはできなさそうだ。

はたして、その時間があるだろうか。いつまでも気づかれぬまま、通い続けることができるだろうか。

レステアにはわからなかった。これほどの価値ある文献が、ほとんど注目もされずにこれまで放置されてきたことが、ただ残念だった。

リューベーンの歴史をおとぎ噺と決めつけずに、優れた学者が力を合わせて丹念に研究すれば、きっと人秘学のこともう少し明らかになるだろうに。ビリヤナの森を切り拓こうなどという馬鹿げた考えを改められるだろうに。人々は目先の利益に翻弄され、本当に価値のあるも

のを見失っている。
自分一人ではとても無理だ。だが、協力者を見つけることができれば。
これらの本を書いた学者たちを一人一人訪ね、人秘学を復活させられないかと相談をもちかけてみたら。
学者たちは、現在ではばらばらに研究を進めているにすぎない。だが、きっと協力しあえるはずだ。
ビリヤナの森を切り倒そうとするストルタ軍への反感は、彼らに共通しているだろう。モレアへの協力を仰ぐのも不可能ではない。
一筋の光明が見えてきたような気がした。細い、細い、今にも消えてしまいそうな光だけれど、暗黒よりはましだった。
レステアは立ち上がった。
本をもとの棚に戻そうとしたのだが、明かりがない。室内はもう、本の背文字を読み取ることすらできないほど暗い。
「司書さん。明かりをくださる？　遅くなって悪かったわね、もう帰るわ」
司書が座っているはずの席へ、声をかけた。
ぽっとオレンジ色の明かりが灯った。奥の控え室にいたらしい司書が、燭台を掲げて現われたのだった。

「終わったかい」
「いいえ、とても全部は読みきれないわ。まだこんなに残ってる」
「なんなら、何冊か家へ持って帰るかい」
「いいの？」
「リューベーンの研究書なんて、人気がないんだよ。読みたがる人は多くないから、適当に返してくれればいい」
　レステアは少し考えた。
　何度も図書館に通えば、そのぶん危険は増す。借り出せるなら、それに越したことはない。
「じゃ、借りてくわ。ありがとう」
　返せるかどうかわからないけどね、と心の中で付け加える。
　特に読み応えのありそうな本を四、五冊選び、腕に抱えた。
「気をつけてお帰り」
　出口まで送ってくれた司書の声が、なんとなくレステアの心に引っかかった。
　今、どこか奇妙な響きがあったような気がする。
　ほっとしたような。かすかに笑いを含んだような。
　レステアの神経が波立った。
　肌がちりちりする。本能が、危険を告げている。

司書は何かを企んでいる？　もしや、レステアの正体に気づいて？

いや、考えすぎだ。レステアはこみあげてくる恐怖を抑えつけた。

こんな時刻まで残っていた利用者がやっと重い腰を上げたから、やれやれと思っているだけだろう。別に、不自然なことではない。

神経質になりすぎてはいけない。挙動がぎこちなくなれば、かえって不審に思われる。

レステアは、司書が開けてくれた大きな扉から外に出て、歩道へと続く階段を数段下りた。

最後の数段を残して、彼女は足を止めた。

風が止まっている。空気が少しも動かない。

何か、奇妙だ。人通りがない。

ここはセクルエの中心地。周囲には食堂や商店も多く、今の時刻ならもっと賑わっているはずだ。

植え込みが、不自然に揺れた。

レステアは飛び上がるように身を翻した。

階段を駆け上がり、閉まりかかっている扉の隙間から、図書館の中へ再びすべりこんだ。

ユテラルドは図書館の周りに兵を配置し、民間人を退去させた。

館の中に残っているのは、司書とレステアだけだ。間もなく日が落ちる。レステアが出てき

たところを即座に捕える計画だった。
「ほんとかよ」
フェルクはまだ信じ難そうな顔をしている。
「これで人違いだったら、いい笑いモンだぜ。おとぎ噺好きの可愛い女の子一人のために、ストルタ軍が振り回されたなんてな……」
「黙ってろ」
ユテラルドが短く叱った。
セクルエの図書館は、この界隈で一番立派な建物だ。美しい灰白色の石で造られた二階建てで、外壁に沿って幾本も並んだ円柱と、ゆるやかな傾斜の屋根に特徴がある。
もちろん自慢は建物ばかりではない。遠方からも学者や学生が訪ねてくるほどの、豊富な蔵書を誇っている。
正面の扉は、知恵を司る梟の彫刻がほどこされた立派なものだ。扉は、歩道の高さから七段ほどの階段を上ったところにある。
ユテラルドたちは、近くの植え込みに身を隠して、レステアが現われるのを待っていた。
レステアはなかなか出てこなかった。変化のない状況に退屈したのか、またフェルクがぼやく。
「こんなところで待ってなくても、さっさと踏みこめばいいじゃねえか。中に入って、本当に

レステアなのかどうか確かめてみれば……」

「静かに」

フェルクはふくれっつらで黙りこんだ。

踏みこみたいのはユテラルドも同じだ。しかし、レステアに苦汁を舐めさせられてきた積み重ねがある。

今回もまた、罠ではないか。油断していると見せかけて、図書館に押し入ったとたんに何か仕掛けてくるつもりでは。

その警戒心が、行動を鈍らせる。兵を無駄に失うことはしたくない。

それに、司書がまだ中にいる。人質に取られたら身動きができなくなる。結局、彼女が出てくるのを待つのが最上の策と判断したのだった。

「ユテラルド」

呼びかけたのは、アルフトアインだった。

子供っぽいフェルクならともかく、アルフトアインまでが退屈を持て余しているのか。

ユテラルドは睨みつけたが、傭兵は図書館の扉を見つめたまま続けた。

「前に言ったたな。俺は、おまえを初めて見た時、レステアに似ていると感じた」

「……ああ」

「相手を憎む気持ちが似ているのだと思っていた。ストルタに、あるいはモレアに親を殺され

たことを恨み、相手を倒すまで戦い抜くと決めた心が似ているのだと」
「……」
「だが、それぱかりではなかったようだ」
アルフトアインは視線をすべらせ、ユテラルドを見た。
「あの女は確かに、おまえと同じ烙印を持っているのだろう。呪われた運命を背負った者の、諦めにも似た想い——それが、おまえたち二人に同じ翳りをもたらしていたのだな」
「抜かせ」
ユテラルドは腹立たしく吐き捨てた。
滅多に他人に関心を示さないアルフトアインにしては、珍しい言葉だった。それだけに、自分に向けられた視線は突き刺すように鋭く、痛かった。心を見透かされるのは、気持ちのいいものではない。
ユテラルドはこれまで、自分と父親以外にクレストを持つ人間を知らなかった。滅多に現われない印だからこそ、このあざは「呪いの烙印」などという恐ろしげなあだ名を与えられているのだ。
よりにもよって、自分が必死に戦ってきた相手が。
しかも、あの悪夢の日、自分が惨殺した男の娘が。
同じ印を持っているのだとしたら。運命の皮肉がいまいましい。

レステアに会ってみたいと、ふと思った。

話したいとか触れたいとか、そんな生ぬるい感情ではない。クレストを持つ者にふさわしいのは、理解より戦い、言葉より剣だ。彼女と戦ってみたい。それも、今までのように互いの顔もわからぬ戦場ではなく、一対一の場で。そんな気持ちが、ユテラルドの心にふと芽生えたのである。

理不尽な運命への怒り、人の世への恨み、家族を失った悲しみ——そんなどろどろした感情を確かめあうには、幾千の言葉を費やすよりも、火花が散るほど激しく剣を合わせるのが一番いい。

「来たぞ」

フェルクが緊張した声で告げた。

図書館の扉がゆっくりと開きつつあった。ユテラルドは剣の柄を握りしめた。

開いた扉から、女が出てきた。

距離は数十歩ほどしか離れていない。植え込みの陰から、彼女の姿はよく見えた。

これほど近いところで見るのは初めてだ。目の色、眉の形までよくわかる。

腕に重そうな本を数冊抱えている。おそらく、リューベーンに関する書物だろう。

髪は短く、黒い。戦場で見かけた、あの燃え立つような赤毛とはまったく違う。

しかし、見間違いようがなかった。おとなしげな町娘の格好をしていても、彼女の全身から、

闘気が立ち昇っていた。
　普通なら、見過ごされるかもしれない。しかし、幾多の戦場を戦い抜いてきたユテラルドの目には、彼女が自分と同じ戦士の気をまとっているのがはっきりわかった。
　ユテラルドは目を細めた。
　レステアは美しかった。小柄だが、力強く伸びた手足。追い詰められ、窮しているはずなのに、少しも生気を失っていない表情。
　こんな女は他にいない。紛れもなく、モレアのレステアだった。
　かたわらで身をかがめているフェルクが、軽く身震いするのがわかった。
　まだだ。もう少し近づいてから。
　そう合図を送ろうとした時だった。
　レステアの足が止まった。
　あと数段で歩道に下りるというところで、急に立ち止まったのだ。
　レステアは、風の音を聞く小さな獣のように、耳を傾ける素振りをした。
　気づかれたのか。ユテラルドはぎゅっと剣を握り直した。
　その瞬間、レステアの身体が跳ねるように反転した。まるで、投げこまれた石に驚いた魚が逃げるように。
　レステアは素早く階段を駆け上がり、閉じかけていた扉の内側にすべりこんだ。

一瞬遅れて、フェルクが立ち上がる。
「くそ！　気づかれた」
「逃げられんさ」
のんびりした調子で言ったのは、アルフトアイン。
「裏口も固めてある。もはや、どこにも逃げられん。袋の鼠さ」
「行くぞ」
ユテラルドは大股に図書館へ向かった。

レステアは、かつて味わったことのない恐怖を感じていた。
周りに味方はいない。彼女一人、敵に取り囲まれている。戦場でも、これほどの窮地に陥ったことはなかった。
図書館の中に駆け戻ったレステアが見たのは、大きく口を開いた司書の顔だった。手にした燭台に下から照らされて、化け物じみた陰影を帯びている。
自分の役目を無事に果たしたと、安心していたところだったのだろう。ふいをつかれて、間の抜けた表情をしていた。
司書はあわてて、燭台を振り上げてレステアに殴りかかろうとした。
レステアは半身を捩るようにして避け、抱えていた本を司書めがけて投げつけた。

司書の悲鳴があがったのは、本がぶつかったためというより、そのはずみで燭台を取り落とし、火傷を負ったためらしい。
一瞬、本に火が移りかけたのでレステアはひやっとしたが、さすがに司書は本を守ることに熱心だった。あわてて本の上に覆い被さるようにして火を消した。
レステアは彼の脇をすり抜けようとして、考え直した。
司書の襟に手をかけて、引きずり起こす。司書は、殺されるとでも思ったのか、壁が割れそうなほどの悲鳴をあげた。
レステアは覚悟を決めていた。建物の中に追いこまれ、出口を固められては、もはや勝機はない。だが、せめて一矢を報いるには、人質が必要だ。
「来い！」
乱暴に叫んで、司書を引きずった。司書は足を踏んばって抵抗しようとしたが、歯が折れるほど殴りつけると静かになった。
兵士ではない、しかも若くもない人間を相手に暴力をふるうのは、少々気が咎めないでもない。だが、かまってはいられなかった。
「出入り口は？」
「……え……」
「出入り口は何カ所にある！　答えろ」

「に……二カ所……正面玄関と、職員用の裏口……」
レステアは司書を引きずったまま、本棚のあいだを通り抜け、奥へ向かおうとした。
その時、前方から激しい物音が聞こえてきた。レステアは舌打ちした。
裏口の扉を破る音だ。いよいよ、強硬手段に訴えることにしたらしい。
裏口を諦め、何か武器になりそうなものはと周囲を見回す。もちろん、図書館の中では剣も斧もあるはずがない。気休めにもなりそうにないが、さっき司書が取り落とした燭台を一応拾いあげた。閲覧室を通り抜け、奥の書庫へと向かう。
図書館の内部は、迷路のように幾つもの部屋に分かれている。歴史、文学、科学などさまざまな分野の本が、部屋ごとに集められているのである。増築を重ねたらしい建物は、複雑怪奇な連絡をしており、通路が触手のように伸びて互いに絡みあっている。
各部屋の中がまた、本棚によって仕切られているので、全体が書物の迷宮と化している。閲覧者のためにランプは用意されているものの、今はどれにも灯が入っていない。暗がりの中を手探りで進むしかなく、すぐに方向がわからなくなる。
レステアにとっては、それが唯一の利点だった。図書館内の大まかな地図は、すでに頭の中に入っている。
それに、司書を連れている限り、場所を見失うことはない。慣れないストルタ軍の連中は、人数が多ければ多いほど混乱し、戸惑うはずだ。

もっとも、多少時間を稼げたところで、逃げ場のないことに変わりはなかった。正面か、裏口か——どちらかを突破できない限り、ここで死を待つだけだ。
足音が入り乱れて、近づいたり遠ざかったりしている。闇に包まれた迷宮に、叫び声が交錯している。
レステアは、身をひそめる場所を探した。とにかく、囲まれない場所。背後を気にせずにすみ、しかも退路を断たれない場所は。
「二階はどうなってる」
レステアは声をひそめて司書に尋ねた。
司書は喘ぎながら震えており、答えようとしなかったが、燭台の尖った飾りを喉元に突きつけると、ようやく口を開いた。
「二階も書庫です。専門書の部屋がありますが……一般利用者には入れないように……」
「階段は」
「一つだけ。司書控え室の奥が階段室です」
レステアは素早く、図書館の全体図を思い浮かべた。
控え室は正面入り口のすぐ脇にある。まだストルタ軍の侵入者たちでごった返しているはずだ。不用意に近づくのは危険だった。
侵入した兵士たちは戸惑っているらしい。暗闇に目が馴れないせいか、あちこちで鉢合わせ

しているようだ。いまいましげに悪態をつく声も聞こえる。
「火」
「え……」
「火をつける道具は」
司書は懐からマッチを取り出した。
レステアは目をつぶり、燭台に火をともした。
ざわめき。近くにいる兵士たちが、明かりに気づいたのだ。しかし、入り組んだ本棚のあいだを縫って光源に辿り着くには、少々時間がかかる。
レステアは目を閉じたまま燭台を司書に持たせ、声を張りあげた。
「ご苦労なことだな、ストルタの勇者諸君。こんな時刻に、いったいなんの調べ物だ？」
レステアの張りのある声は、高い天井に反響して、大きく響いた。一瞬、ストルタ兵たちは静まり返った。
レステアは、司書を突き飛ばすようにして背を向けた。司書が倒れる物音。情けない声で助けを求めている。
レステアは一瞬静止し、全身の神経を研ぎ澄ませた。
目を閉じたのは、光に視力を奪われないためだ。呼吸を整え、ゆっくりまぶたを持ち上げる。
彼女の目は闇に慣れ始めている。暗がりの中に、ぼんやりと本棚の輪郭がわかる。

突然の光は、兵士たちに秩序(ちつじょ)よりもむしろ混乱(こんらん)をもたらしたはずだ。空気の揺(ゆ)らぎで、敵の動揺(どうよう)が感じ取れる。

彼らは一人になることを恐れている。集団(しゅうだん)で動いているから、レステアには察知(さっち)しやすい。本棚をはさんですぐ反対側を、数人の兵士たちが通りすぎていった。レステアは息(いき)を殺(ころ)して、彼らの荒い呼吸を聞いた。

前方から近づいてくる連中がいる。棚の陰にひそんでやり過ごす。敵をあざむきながら、レステアは小走(こばし)りに本棚のあいだを走った。

「いたか？」

「いや、こちらには」

「どこだ」

「明かりが」

「あっちだ」

いくつもの声が交錯(こうさく)している。声と足音から、館内に進入した兵士はおよそ三、四十人と目星(めぼし)がついた。

レステアは身をかがめ、鼠のようにすばしこく棚のあいだをすり抜けた。

ストルタ兵たちを躱(かわ)しながら、少しずつ、出入り口のほうへ近づいてゆく。

兵士たちの底厚(そこあつ)の靴(くつ)が、足音高く床を踏みつけて、レステアのすぐかたわらを通り過ぎた。

レステアはじりじりと司書の机の陰に回った。
奥の階段室にすべりこむ。見咎められずに、なんとかここまでは来られた。レステアはふっと息をついた。
細い階段が上に伸びている。古い木の階段である。音をたてないよう気をつけながら、レステアは段に足をかけた。
兵士たちは司書を見つけたらしい。激しい声で、レステアの行方を尋ねている。
レステアは最後の数段を一気に駆け上がった。
二階は一階よりもさらに雑然としていた。天井まで届きそうな本棚が、管理者にしかわからない秩序で並んでいる。古い本の匂いが立ちこめていた。
確か、窓があったはずだ。建物を外から見た時に、一応、心に留めておいたのだ。
脱出できるかどうかは心もとないが、一階が塞がれている以上、外に出られそうなのはここしかなかった。
レステアは書庫の奥へと進んでいった。
ためらっている余裕はない。司書が階段のことを兵士たちに話せば、彼らはきっと上がってくる。
記憶通り、窓があった。闇の中に細長く、ほんのりと明るい矩形が浮かんでいる。外はもう月が出ているらしい。

レステアはほっとした。飛び下りられるかどうかわからないが、ともかく、脱出の手がかりではある。
窓に駆け寄り、取っ手に手をかけようとしたときだった。
いきなり、目の前に何かが降ってきた。
いや、振り下ろされたのだ。あまりに素早い動きだったから、小さな影が飛び下りてきたかのように見えた。
レステアは凍りついた。
いつの間にか、かたわらに大柄な男が立っていた。
彼が、手にした剣を無造作に振り下ろしたのである。レステアの鼻先を、ほとんどかすめそうな距離で。
気づかなかった。並の男より頭一つ抜きんでそうな長身のくせに、まったく気配を消して闇に溶けこんでいた。
醒めた瞳がレステアを見下ろしている。黒い、硬そうな髪が、窓から射しこむ月光を映している。
レステアは、彼の名を知っていた。彼女がまだ戦いに身を投じる前……憎しみに身を焦がしながら、自分では何もできなかったあの頃に、一度だけ出会った男だ。
「アルフトアイン……」

声がかすれた。指先が冷たくなる。血の気が引いていくのがわかる。
「覚えていてくれたか」
傭兵は笑った。かつてレステアに革袋を放り返し、「お嬢ちゃん――」と馬鹿にしたように笑った、あの時と同じ声で。
「なぜ……」
あと一歩だったのに。ガラス一枚隔てたところに、自由な空気があるのに。
レステアは悔しさに声を震わせた。
「なぜ、ここに？　あなたの仲間たちはまだ下の階を探し回っているのに……私がここに来ることをお見通しだったの？」
「まさか。俺はただサボってただけだ」
アルフトアインは剣を引き上げ、冗談めかして答えた。
「暗がりで喚きあいながら右往左往するのは、俺の柄じゃないからな。こっそり抜け出して、ここでサボってたのさ」
本気とは思えなかったが、笑いを含んだその口調のせいか、あながち嘘でもないのではないかという気がした。この傭兵は確かに優秀だが、どこか、規格外れのところがある。
「サボったつもりが、大手柄ってわけ」
レステアは観念した。

いよいよ命運尽きたようだ。あと一歩のところで思いがけない相手に足をすくわれるなんて、自分にふさわしい運命だと思った。

自分が死んだ後、モレアはどうなるのだろう。

部下たちは、なし崩しに敗走を続けるのだろうか。戦いを諦めて、ちりぢりになってゆくのだろうか。故郷も、家族も失って、どこまでも流れてゆくのだろうか。

モレアが抵抗をやめたら、ビリヤナの森はどうなるのだろう。切り倒され、焼き払われてしまうのだろうか。

森を失った後、世界はどうなってゆくのだろう。消滅した帝国と同じ道を辿るのだろうか……。

「大手柄とは？」

アルフトアインが尋ねた。

レステアは苛立った。言葉遊びをする気分ではない。

「とぼけてないで、さっさと捕まえなさいよ。あなたの雇い主はきっと誉めてくれるわよ。見事な猟犬だって」

「言っただろう。俺はサボってるんだ」

アルフトアインは面白そうに言って、大きな剣を肩に担ぎ上げた。

レステアは眉をひそめた。アルフトアインの意図がわからない。

「行け」

アルフトアインは顎で窓を示した。

レステアは目を見開いた。

「……なんですって？」

「聞こえなかったか？」

「見逃してくれるの？」

「捕まりたいのか？」

レステアはあわてて首を横に振った。

その仕草がおかしかったのか、アルフトアインは笑った。

「なぜなの？　なぜ私を逃がすの？」

「言っただろう。サボっている最中だ。働く気がしない」

レステアは窓に手をかけた。

まだ半信半疑だった。彼が自分を見逃そうとしている理由がわからない。

ひょっとして、希望をもたせておいて、後ろからザックリと斬りかかるつもりではないかとも疑った。しかし、そんな陰湿な冗談は、この傭兵らしくない。彼の性格をよく知っているわけでもないのに、なぜかそれだけは確信できた。

レステアは窓を開けた。新鮮な空気が流れこんできた。

窓枠に足をかけて、振り返る。アルフトアインは、大剣を肩にかついだままの姿勢で立っていた。

「お礼は言わないわよ」

きつい声で言うと、アルフトアインは肩をすくめた。

「礼儀知らずだな」

「きっとまた会うわ。戦場で」

「おまえは、まだ戦うつもりか」

アルフトアインの声には、皮肉めいた同情がこめられていた。レステアはむっとして胸を張った。

「当然よ」

叫んで、外に踏み出した。

窓の外に細い庇がある。そこへ足をかけ、そろそろと身体を移動させる。

くるぶしまで届くスカートが邪魔だった。いつものような男装ならば、もっと楽に動けただろうに。

月明かりに照らされぬよう、影になるほうを目指す。

下を見て、ぞっとした。

外に残っている兵士が、十人ほどいる。レステアが逃げ出さぬよう、正面入り口を見張って

いるのだ。
幸い、彼らは上には視線を向けない。扉を固めることに懸命だ。
レステアはゆっくり庇を伝い、建物の側面に回った。
下は土だった。芝も生えており、衝撃をやわらげてくれそうだ。
とはいえ、二階の高さから飛び下りるのは勇気が要る。レステアは小さく祈りの文句をつぶやいた。
思いきって、身体を投げ出すように飛んだ。
宙を飛んだ瞬間に、身のすくむような恐怖に囚われた。手足をばたつかせたのも、一瞬のこと。あっという間に、レステアは地面に叩きつけられ、転がった。
覚悟していた以上の衝撃だった。頭こそ打たなかったが、足と腰を強打した。
レステアは芝をつかみ、必死に身体を起こした。
アルフトアインの言葉が蘇る。彼独特の、嘲笑的な声。
——まだ戦うつもりか。
レステアは歯を食いしばった。
「当然よ」
同じセリフを小さく繰り返して、立ち上がる。
骨には異常なさそうだ。なんとか動ける。

レステアは、痛めた左足を引きずりながら歩きだした。

「明かりだ。明かりをつけろ！」

怒鳴り声が聞こえる。フェルクの声だ。

明かりが必要なのは確かだが、それにしても、彼の声はヒステリックで、いつもより甲高い。

ひょっとして暗闇恐怖症かとユテラルドは疑った。

今、館内にともっている明かりは、司書が手にしている燭台の光だけだ。ユテラルドは彼の前に膝をついて尋ねた。

「書庫内の明かりはどうなっている？」

「あ……」

司書は顔を強張らせている。無理もない。さっきまで、レステアに脅しつけられていたのである。

何度も唾を飲みこんで、司書は答えた。

「書庫ごとにランプが備えつけてあります」

「全部でいくつあるんだ」

「ざっと……五十ほど」

ユテラルドはため息をついた。

「全部、つけてくれ」
「時間がかかりますが……」
「かまわない」
とにかく、この暗闇では身動きが取れない。二カ所の出入り口は固めてあるのだから、彼女がまだ館内にいることは確かなのである。一つずつ明かりをつけて、しらみつぶしにしていくしかない。
「あ、あの……」
司書が、おぼつかない声で言った。
「なんだ」
「先ほど、あの女が……階段の場所を……」
「何？」
司書は興奮がおさまらないらしく、話がなかなか要領を得なかった。
「階段の場所を……確かめて……つまり、二階に上がるつもりじゃないかと……」
「なんだと？」
ユテラルドはあやうく司書の襟首をつかまえて揺さぶるところだった。
「二階に脱出口があるのか!?」
「いいえ。ただ、窓はあります。外に出るのは無理だと思いますが……」

　ユテラルドは司書を突き飛ばすようにして立ち上がった。
　レステアに不可能はない。あの女は、いざとなったら、空を飛んで逃げるぐらいのことはやりかねない。
「階段を……」
　封鎖しろ、と叫びかけた時だった。
「二階にはいない」
　声がした。
　アルフトアインだ。闇の中から、突然、彼の大きな身体が現われたのである。司書の燭台の細い光が、ぼんやりと彼を照らし出していた。
　ユテラルドは彼を見上げて尋ねた。
「どうしてわかる？」
「俺が見回ってきた」
　ユテラルドは眉をひそめた。アルフトアインには、正面から入って右側の書庫の捜索を頼んだはずだ。
「持ち場を離れたのか。勝手に」
「すまんな。階段を見つけたので、気になってな」
　咎めている場合ではなかった。ユテラルドは尋ねた。

「二階を見て回ったのか？」
「ああ。レステアはいなかった」
「一人で二階をすべて見回れるか？　見落としがないとは言いきれまい」
「それはそうだ」
アルフトアインは人を食った調子で答えた。
「もちろん見落とした可能性はある。ただ、俺は見かけなかったし、それらしい物音も聞かなかった」
「――とにかく」
ユテラルドはいらいらしながら言った。
「二階を捜し直す。一階は一つずつ明かりをつけて、捜索の終わった書庫を閉鎖していく。しらみつぶしにするしかない」
「名案だ」
アルフトアインに言われると、馬鹿にされているような気がする。いつもフェルクがカリカリしている理由が、初めてわかったような気がした。
「では、アルフトアイン。君は階段の位置も、二階のだいたいの様子もわかっているだろうから、もう一度二階に上がってくれ。十人ほど連れていけ。オレは一階を見回る」
「了解」

アルフトアインは再び闇の中に消えた。
入れ替わるように、フェルクが現われた。
「フェルク、君はこっちを手伝ってくれ。明かりを一つずつつけて、端から書庫を閉鎖……」
言いかけて、ユテラルドは、フェルクの奇妙な様子に気づいた。
目が奇妙に吊り上がっている。怪物にでも出くわしたかのように引きつった表情だが、そのくせ、酔っぱらったような興奮を浮かべてもいる。
ユテラルドは訝った。いつもの陽気なフェルクではない。明かりが弱いせいで、妙な陰影がついて、そんな風に見えるのだろうか。
「——を」
フェルクが呻くように言った。
聞きとりづらかった。ユテラルドは「え？」と問い返した。
「火をつけろ。燃しちまえばいいんだよ、こんなもの！」
フェルクは叫び、いきなり司書に飛びかかった。
司書の持っていた燭台が奪い取られる。フェルクは本棚から一冊の本を抜いて、火をつけて投げ捨てた。
革装のその本は、燃え上がったりはせず、ただくすぶった煙を上げただけだった。フェルクはその不手際に怒ったのか、手当たり次第に本を抜き出し、火をつけ始めた。

ユテラルドは唖然とした。
「やめろ、フェルク！」
押さえつけようとしたが、火のついた本を投げつけられた。
「明かりが必要なんだろ！」
フェルクは拗ねたような声で叫んだ。
「だったら、手っ取り早くこうすればいいんだよ！」
本に炎が移り始めている。棚に並んだ本の背を、オレンジ色の火が舐めるようにあぶってゆく。
「あ……あ……」
呻いたのは司書だった。彼は火を消そうと躍起になったが、フェルクに引きずり倒された。
「フェルク……」
ユテラルドは呆然としてつぶやいた。
兵士たちが集まってきた。彼らはフェルクの行動を見て、あわてるどころか、かえって力づけられたようだった。
意味不明の叫び声をあげる者もいた。彼らは火のついた本を手につかみ、炎を広げる手伝いを始めた。
「やめろ、おい！」
ユテラルドの制止はなんの力ももたなかった。

広がり始めた火の勢いは止められない。紙の燃える臭いがユテラルドの鼻孔を刺した。
「ああ」
背後で声がしたのでユテラルドは振り返った。
すでに、視界に不自由しないくらいにあたりが明るく照らされている。火に囲まれるように立っているのは、アルフトアインだった。
「やっちまったな」
「フェルクが」
「耐えきれなくなったらしいな」
アルフトアインは苦笑めいた表情で言った。ユテラルドは消火を諦めて、腹立たしいため息をついた。
「なぜ、こんなことを……」
「わからんでもない。俺も、この暗闇の中でこれだけ大量の本に囲まれていると、頭が変になりそうだ」
アルフトアインはぐるっと首を回した。
ユテラルドは眉を寄せた。意味がわからない。
確かに、本棚は捜索の邪魔だし、迷路のように入り組んでいるから、いらいらする。
だが……。

「だからって、燃やさなくてもいいだろう。ここには、貴重な史料だって集められているのに……」
「フェルクのような人間には、耐えきれないんだよ。本の一冊一冊にびっしり言葉が書かれ、声にならない主張をしている。そんなものが何万冊、何十万冊も並んで、無言でこちらを圧迫してくるんだ。しかもこの暗闇だ。闇の中から、叡智の瞳で見つめられているような気分になる。気持ち悪くもなろうってものだ」
「……わからない」
「まあ、おまえにはわからんだろう」
アルフトアインは、炎の壁と化した本棚を見た。
「そんなことより、早く全員退去させたほうがいい。焼死者を出したくはないだろう」
「しかし、レステアが……」
「外で待っていれば、そのうちいぶし出されるさ」
すでに熱気は耐え難いほどになっている。確かに、アルフトアインの言う通り、早く退去したほうがよさそうだった。
ユテラルドは、半狂乱で火を消そうとしている司書を捕まえた。
「すまないな」
司書の痩せた身体を引きずりながら、ユテラルドは声をかけた。

「損害はフォントレールに請求してくれ。いや、フェルクの親父にでもいいぜ。蔵書と建物の損失を……」
「わかってない！」
司書は噛みつくように叫んだ。
彼が泣いていることに気づいて、ユテラルドはげっそりした。フェルクのように本の価値がさっぱりわからない人間も困るが、この男のように書物に命を捧げている人間も手に負えない。
「あんたたちにはまったくわかっていない！　金で埋められる損失じゃないんだ。ここにどれほど貴重な本が集まっていたか、知りもしないで……！」
「すまない」
「謝罪ですむ問題じゃない、あんたたちはエディンベリー大陸の文化を燃やしてしまったんだ。エディンベリーの歴史を、エディンベリーの叡智を、エディンベリーの誇りを……！」
「わかったわかった」
口から泡を噴きそうな司書を引きずって、ユテラルドはなんとか正面玄関に向かった。兵士たちも、火の手を逃れて次々逃げ出しているようだ。
司書は呪詛のように吐き続けている。
「こんなことなら、通報などするのではなかった！　あんたたちに比べれば、モレアの女のほうがよほど理性があった……！」

「レステアはどんな本を読んでいたんだ?」
建物を離れたところで、ユテラルドは尋ねた。
司書はまだ震えていたが、答えた。
「リューベーン帝国の本だ」
「人秘学について?」
司書は、知っているのかという顔でユテラルドを見た。
「そうだ」
「彼女は何か本について言っていたか」
「いや。ただ……」
火がいよいよ建物に移った。美しい白楼(はくろう)が、無残(むざん)に炎を噴き上げている。火を放った張本人(ちょうほんにん)であるフェルクは、芝の上に座って足を伸ばし、他人事(ひとごと)のような顔で建物を見ていた。
司書は両手を上げて絶望的な呻き声を漏(も)らし、続けた。
「声をかけても気づかないくらい、本に夢中になっていた。あんなに熱心な読書家は、ここに長年勤めている私でも初めて見たくらいだ。彼女の心が現実を離れて、本の中に解き放たれているのがはっきりわかった……」
ユテラルドは燃え盛(さか)る図書館を見た。
レステアがあの力強い目を輝かせ、食い入るように本を読んでいる姿が、まるで目(ま)の当たり

にしたかのように鮮明に思い浮かぶ。

　かつて、彼も同じ体験をした。もう、四、五年も前のことだ。本好きのリヤナに誘われて、あまり興味はなかったものの、この図書館を訪れたことがあった。

　リヤナは文学の棚が好きだったようだが、ユテラルドはもっぱら、歴史に惹かれた。それも、今ではほとんどの人間が見向きもしない、消滅帝国リューベーンの伝説に。

　分厚い本を手に取り、時間の経つのも忘れて読みふけった。

　自分の右手に刻まれた呪いの烙印。リューベーン帝国では、そのあざを人工的に作り出す技術まで研究されていたと知って、ユテラルドは興奮した。

　パルミラ。クレスト。人秘学。もしも、リューベーン帝国が滅びることなく、それらの技術が現在にまで受け継がれていたら……それは恐ろしく、しかし魅力的な空想だった。

　アルフトアインは、ユテラルドとレステアが似ていると言う。いまいましいが、当たっているのかもしれない。この呪いの烙印を持つ者にしかわからない何かを、二人は共有しているのかもしれなかった。

　レステアは、まだ館内にいるのだろうか。煙に巻かれ、火に追われ、逃げ場を失っているのだろうか。

　ユテラルドは拳を握りしめた。

　こんな結末は、嫌だった。

モレア軍を全滅させること、レステアを討つことは彼の切実な願いだったが、彼女がこんな形で死を迎えるのは許せなかった。
逃げ出してこい——入り口の扉を睨みつけて、ユテラルドは念じた。
それとも誇り高き彼女は、敵の手に落ちるよりも、業火の中に留まって死ぬことを選ぶのだろうか？
フェルクも、司書も、兵士たちも、ユテラルドと同じように扉を見つめていた。そこから女が飛び出してくるのを待っていた。傭兵だけが、興味を失ったような顔で月を見上げている。
建物の一部が大きな音をたてて崩れ始めたが、モレアのレステアは、ついに姿を現わさなかった。

レステアは人目を避けて、裏通りを選んで歩いていた。
足の痛みは、時間が経つにつれてひどくなる。歯を食いしばって前へ進んだ。
セクルエは、ストルタやモレアなどに比べれば裕福で治安のよいところだ。裏通りと言っても、剣呑な雰囲気はない。ただ、家々のすすけた壁が連なっているだけだ。すれ違うのは、せいぜい犬や猫ぐらいだった。
だから、レステアはしばらくのあいだ、図書館の火災に気づかなかった。表通りを歩いていれば、人々が騒ぐ声がいやでも耳に入ったに違いないのだが。

町の中心をはずれたところで一息入れて、レステアは無理に背を伸ばした。
ここから少しのあいだ、街道沿いに歩かねばならない。
あたりはもう暗いし、少しぐらい足を引きずって歩いたところで、誰も気に留めはしないだろうが、すでに手配が回っていれば危ない。不自然に見えない程度にうつむき、歩き出したときだった。
レステアは、妙なざわめきに気づいた。
人々が、レステアとは逆の方向に足を速め、騒いでいる。誰も、とぼとぼと足を引きずっている女に気を留めはしなかった。
それはレステアにとってはありがたい状況だったが——聞こえてきた声に、レステアはひやりとした。
「火事だって」
「いったい、なぜあんな火の気のないところに……」
「ストルタ軍が火をつけたんだ」
「馬鹿なことを……」
火事。ストルタ軍。
まさか。信じられない。レステアは恐る恐る背後を振り返った。
もう図書館は見えない。だが、地上からの光が夜空を明るく照らしているのがわかる。大き

な火災が発生しているらしい。
　レステアは愕然とした。
　燃えているのは図書館か。貴重な蔵書も一緒に？
　ストルタ軍が火をつけたのなら、彼らの目的は一つしか考えられない。彼らはまだレステアが中に隠れていると信じ、彼女をいぶし出そうとしたのだ。
　愚かだった。あまりにも。レステアは、一瞬、足の痛みすら忘れるほどの怒りを覚えた。女一人を捜すために、何万冊もの本を灰にするつもりなのか。気が狂っているのか、ストルタの連中は？
　彼らの行動原理は明快だ。敵を捜すために図書館を焼き、農地を増やすためにビリヤナの森を切る。その場しのぎの判断力はあっても、過去から学ぶ力がない。未来を見通す想像力もない。獣と同じだ。
　できるものなら、駆け戻って火を消したかった。せめてリューベーン帝国の研究を綴った本だけでも救い出したかった。
　けれども、それは不可能だった。レステアはただ、野次馬の波にまぎれて呆然と明るい空を見つめるだけだった。
　やがて、彼女は踵を返して、人々の流れと反対の方向へ歩きだした。
　激しい怒りを胸に。耐え難い痛みと戦いながら。

第六章

ユテラルドたちは、セクルエを離れて、再びビリヤナの森に戻った。

リヤナが手際よく伐採の準備を進めていた。リヤナは、ユテラルドたちの話を聞くと、複雑そうな表情になった。

「では、レステアはその火事で死んだんだね」

「それがなあ」

フェルクが顔をしかめて答える。

「死体が見つからなかったんだ」

「え？」

「火が消えた後、焼け跡を調べたが、死体は出てこなかったんだ」

「どういうこと？」

「逃げたんだよ。あのアマ」

フェルクはいまいましげに地面を蹴りつけた。

「だけど、君たち、図書館が焼け落ちるまで見張ってたんだろう？」

リヤナは腑に落ちない顔で、フェルクやユテラルドの顔を見回した。

ユテラルドは苦々しくうなずいた。

「ああ。周囲を取り囲んでいた」

「ならば、逃げる隙なんてないのでは？」

「なかった。それは確かだ。だがあの女は消えた」
「どうやって？」
「おそらく、火が回る前に二階の窓から脱出してたんだろう」
「二階から？」
面食らったリヤナに、フェルクが吐き捨てるように答えた。
「魔女みたいな奴だ。空でも飛んで逃げたんだろ」
「その後、彼女は姿を現わしていないんだね？」
「そうだ。セクルエの村外れに、今は使われていない倉庫がある。奴ら、どうやらそこを隠れ場所にしていたらしいということはわかったんだが、オレたちがそのことに気づいた時には、もう連中は姿を消していた」
「……ということは、諦めたのかな」
リヤナは独り言のようにつぶやき、ユテラルドたちに向けて言い直した。
「もうストルタ軍への抵抗を諦めて、戦いを捨てたのかな。ちりぢりになって、どこか遠くへ逃げ延びたのかもしれない。だとすれば、これ以上、深追いする必要はないんじゃないか。……ユテラルド」
リヤナは友人に、遠慮がちな目を向けた。
「君の気持ちはわかるけど、レステアにこだわるのはやめよう。戦いは終わりだよ。これから

は、新生フォントレールのために働いたほうが……」

「オレなら、諦めない」

ユテラルドは激しい口調で、友人の言葉を遮った。

「たとえ仲間がすべて死んで、自分一人になったとしても、戦いを捨てたりしない。オレがモレアを憎むのと同じ強さで、彼女がストルタを憎んでいるのだとしたら、彼女も決して諦めたりしないはずだ」

「ユテラルド……」

「レステアは絶対に現われる」

ユテラルドは言いきった。

フェルクが「へっ」と笑い、「おまえはまるで、親友みたいにあの女の心をわかってるんだな」と皮肉った。ユテラルドは表情を変えなかった。

リヤナは、困ったような顔でうなずいた。

「とにかく、伐採の計画を進めることにしよう。彼女がまだ諦めていないのだとしたら、きっと黙ってはいないだろうから」

その日の夕方、リヤナはユテラルドをモレア村へ誘った。

「モレア？　あそこにはもう誰もいないぜ」

不審そうなユテラルドに、リヤナはうなずいて答えた。
「そうだよ。だから、見に行ってみよう。捨てられた村がどんな様子なのか」
「オレは行きたくない。そんなことより、森の伐採を……」
「それは現場に任せておけばいい。そんなに長い時間じゃない、少し散歩のつもりで出かけてみようよ」
ユテラルドは渋い顔だったが、リヤナが強引に連れ出した。
モレア村はすっかり廃村となっていた。家々はまだ残っているのに、人気がまるでない。開け放された扉が風に揺れて音をたてている。畑には、まるでたった今までそこに人がいたかのように、農作業の道具が打ち捨てられてあった。
リヤナとユテラルドはしばらく無言で村の小道を歩いた。
リヤナが口を開いた。
「ここは、君の育った村に似ているかい」
「……ああ」
ぶっきらぼうにユテラルドは答えた。無人の家を一軒ずつ睨みつけながら。
「貧しくて、陰気で、希望がない。確かによく似ている。どちらも、ビリヤナの森に呪われた村さ」
「昔は、友好的だったんだろう」

「ずっと昔の話だぜ。オレが生まれるより前の。少なくともオレが物心ついた時には、ストルタとモレアは啀みあっていた」
「不幸なことだね」
ユテラルドは一瞬、不満そうにリヤナを睨んだ。
リヤナは目を合わせずに続ける。
「ね、ユテラルド。僕らはそろそろ、モレア村の復興のことを考える時期じゃないかと思う。レステアがどんな行動を取ろうとも、この戦いがじきに終わりを迎えることは確かなんだ。問題はその後だ。戦いが終われば、この村にも人が戻るだろう。戦禍を逃れていた人たちが帰ってきて、新しいモレア村を築いていくだろう。僕らはその手助けを考えなきゃ」
ユテラルドは顔を背けて答えない。
リヤナはゆっくり足を運びながら続けた。
「君の気持ちはわかるつもりだよ。モレア村を絶対に許す気にならないことも。でも、ユテラルド、君はもう目的を果たしたじゃないか。これからは、復讐に囚われるのをやめて、未来のことを考えてくれないか」
「──そんなことを話すために、オレを連れ出したのか」
「そうだよ」
リヤナはうなずいた。

「村の風景を見れば、君もわかってくれるんじゃないかと思ったんだ。この村を、こんな寂しいままにしておいてはいけないよ。フォントレールは君の力を必要としている。フェルクたちと力を合わせて、僕らはきっと……」

リヤナは友人の横顔をうかがい、不思議そうに尋ねた。

「どうかしたかい、ユテラルド……？」

ユテラルドは立ち止まった。一瞬遅れてリヤナも、同じ音に気がついた。

乾いた砂を踏む、小さな音だったが、二人は聞き逃さなかった。二人はちらっと目を見交わし、同時に背後を振り返った。

やや強い風が、砂ぼこりを巻き上げている。午後の陽射しを後ろから受けて、数人の人影が立っていた。

中央に、ひときわ小柄な――ほとんど子供と見間違えそうなシルエット。

襟の詰まった男の服を着た女だった。炎のようだと言われた髪は、黒く染めて短くしている。少年のように切った前髪の下で、力強い瞳が輝いている。

モレアのレステア、そして彼女が率いる精鋭の部下たちが、まるで陽炎のように廃村の小道に立って、二人を見ていた。

リヤナは一歩退いた。彼は動揺していた。まさかこの場所で敵に出くわすとは思いもしなかった。リヤナもユテラルドも武器を持っていない。

　ユテラルドのほうは落ち着いていた。散歩の途中で旧知の友人に出会ったかのように、晴れ晴れとした声で言った。
「どうやってここへ？　村の周りは、ストルタ兵がうようよしているはずなんだが」
「――私はこの村で生まれ育った」
　レステアはよく通る声で答えた。
「村へ続く抜け道はいくつも知っている」
「俺たちが軍を離れるのを、どこからかこっそり見張ってたってわけか」
　レステアは無言だった。
　モレア兵たちが近づいてくる。
　後ろへ下がろうとしたリヤナは、びくっとして立ちすくんだ。いつの間にか、背後も塞がれている。兵士たちはいずれも剣を手にしていた。
「やはり――モレアは戦いを決して諦めないということか」
　ユテラルドが叫ぶ。
　答えを待たずに、彼は続けた。
「俺も同じだ」
　そして彼は素早く身を翻した。
　同時に、リヤナも反対側へ。

ユテラルドは手近な民家に飛びこんだ。扉も窓も開け放された、貧しげな家へ。
このあたりの民家の構造はどこも似ている。土間があり、その奥に台所といくつかの小部屋、家の中央に階段があって二階へ続く。
ユテラルドは土間を駆け抜けて、台所に身をひそめた。
土間はまだ明るいが、その奥には窓もなく、急に暗くなる。暗がりの中で、ぴたっと壁に身体を寄せる。
すぐに足音がなだれこんできた。
床を踏む音を聞きながら、ユテラルドは笑いたくなった。
図書館の時と同じだ。暗闇の中で一人息をひそめる者と、数をたのみに右往左往する者。ただ、立場が逆転しているだけだ。
最初の一人が台所に足を踏み入れると同時に、ユテラルドは床を蹴って飛びかかった。
相手も用心はしていたのだろうが、ユテラルドの勢いのほうが勝った。
ふいをつかれてよろめいた相手の鳩尾に拳を入れる。意識を失った兵士の手から、剣を奪い取る。
続く兵士たちがユテラルドに襲いかかる。ユテラルドが体勢を整えるより早く、剣先が鋭く繰り出された。
左肩に痛みが走った。とっさに身体をひねっていなければ、胸を貫かれていただろう。

ユテラルドは満身の力をこめて剣を振るった。

モレア兵の右腕を斬る。肘から切断された腕が落ちた。

絶叫が響く。その声と、飛び散った血飛沫に、兵士たちはたじろいだ。

一瞬凍りついたように立ち尽くした兵士たちに、さらに斬りかかる。

ユテラルドに躊躇はなかった。むろん、恐怖も。たちまち二人のモレア兵が倒された。

数の上で勝っているモレア兵たちのほうが、恐怖に呑まれていた。きっと彼らの脳裏には、ユテラルドがこれまで築いてきた華々しく血生臭い戦歴が蘇っているに違いない。

四剣主の称号は伊達ではない。百戦錬磨の戦士たちのあいだで、畏怖と尊敬をこめてそう呼ばれるには、理由がある。

鬼神にもたとえられる剣の冴えと、戦士に不可欠な不屈の精神力。今自分たちの目の前にいる青年が、その両方を兼ね備えた希有な戦神の一人であるのだと、モレア兵たちはあらためて認識したのだった。

ユテラルドは、勢いよく剣を振り上げた。

負傷した左側が、がらあきになる。モレア兵の一人が、自分を励ますような叫び声をあげながら斬りかかってきた。

ユテラルドは素早く剣を薙いだ。モレア兵は首を斬られて倒れた。

彼の剣は技巧的ではない。これが剣の稽古であれば、先生からいろいろ注意されるだろう。

無造作で、隙だらけにも見える。
だが、勢いだけにまかせた凡百の兵士とは違う。ユテラルドの剣を支えているのは、あふれるほどの闘志と、卓越した反射神経だった。
モレア兵たちは完全に戦意を削がれていた。及び腰で、後じさり始めた。
隙をついてユテラルドは彼らの包囲を突破し、再び家の外に走り出た。
正面の民家から、リヤナが駆け出してくるところだった。
ユテラルドはにやっとした。見なくても、リヤナの戦いぶりは想像がつく。
彼の剣はユテラルドとは対照的である。繊細で、華麗で、正統的な型を踏まえている。
リヤナの腕前を知らない者は、所詮、お坊っちゃまのお稽古事と馬鹿にする。死体の山が築かれてから、ようやく彼らは気づくのだ。一見剣舞のようにすら見えるリヤナの美しい剣さばきが、実はどれほど恐ろしいものかということに。
リヤナも敵から奪った剣を手にしていた。彼はユテラルドを見ると、心配そうに尋ねた。
「斬られたのか」
「かすり傷だ」
痩せ我慢である。左肩の傷は、思ったよりも深手だった。
左の腕はだらんと落ちて、使い物にならない。痛みをこらえると、どうしても身体のバランスが崩れる。止血しないと体力がもたないだろうが、その暇がない。

二人は背中合わせに立って構えた。
「負傷した腕の分は、僕が守る」
リヤナが素早く囁いた。
ユテラルドは「ふん」と鼻を鳴らして応えた。気持ちを通わせるにはそれで十分だった。
モレアの兵士たちが二人を囲んでいる。
ちょうどユテラルドの正面にレステアがいた。彼女もやはり剣を握っていた。教則本通りに落ち着いた、隙のない構えである。
ユテラルドは彼女を睨みつけた。レステアも、リヤナのほうには目もくれず、ユテラルドを見ていた。
ユテラルドは身震いしそうだった。恐怖のためではない。ようやくレステアと対峙した歓喜のために。
ユテラルドは彼女に向けて剣を構え直し、声を張りあげた。
「一つ、確かめておきたいんだが」
兵士たちはびくっとしたようだった。レステアは身じろぎもせず聞いている。
「おまえの父は加わっていたのか？　モレアの暗殺部隊に？」
レステアの目が険しくなった。
顎を引いて、彼女は答えた。

「――そうだ」
「それでおまえはオレを恨んでいるのか？　父親を殺されたから？」
「……」
レステアは唇を噛んだ。
ユテラルドは嘲笑した。
「そいつはお門違いだぜ。おまえの父親は卑怯者だった。無力だったオレを盾にとって、オレの親父とおふくろを嬲り殺した。その酬いで死んだんだ」
「黙れ」
「オレは絶対に忘れないぜ。父母が、それに姉のように優しかったシャルアミが、モレアの凶刃にかかって殺された日のことをな」
「黙れ」
「オレを憎むがいいさ。オレも憎む。おまえを、おまえたちモレアの民すべてを憎む。おまえらを根絶やしにするまで、オレは戦いをやめる気はないぜ」
兵士たちは圧倒されていた。憎しみに彩られた奔流のような言葉に。
兵たちばかりではない。背中合わせに立っているリヤナまでもが、迸しる憎悪の激しさに狼狽しているようだった。
レステアはぎゅっと唇を噛んで、ユテラルドを睨みつけている。ユテラルドを衝き動かして

いるのと同じ憎悪が、彼女の心を焼いている。

「――貴様は化け物だ」

低い声で、レステアは言った。

ユテラルドは笑った。

「この右手のあざのことか？　ああ、確かに俺は化け物だ。自分でも制御できない力に操られる怪物だ。だが、おまえはどうなんだ、レステア。なぜ危険を冒してセクルエの図書館を訪れた？　なぜリューベーン帝国の人秘学を調べた？　パルミラとクレストについて知りたがったのはなぜなんだ？」

「……」

「答えないのか？　ならばオレが言ってやろう。おまえにはパルミラ武具を操る能力があるからだ。おまえもオレと同じなんだ。オレを怪物と呼ぶならそれもいい。だが、おまえも同類。呪いの烙印をその身に刻んだ怪物だ！」

兵士たちの目が一斉にレステアに向いた。

一瞬、戦いを忘れてしまったようだった。ユテラルドの言葉は、兵士たちに動揺をもたらしていた。

「違う」

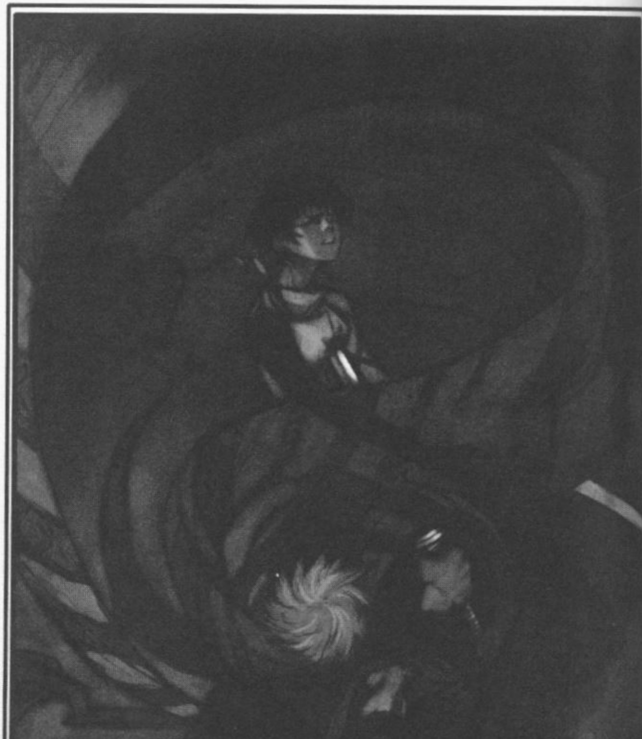
レステアは怒りに震えながら言った。

「私はおまえとは違う」
「同じさ。服で隠しても、布を巻きつけても、決して逃れられない。クレストを持つ者は、一生、その印に呪われ続ける」
「違う。私は怪物じゃない」
レステアは小柄な身体をいよいよ低くして、突きかかってきた。
ユテラルドの力強い剣が、彼女の剣を撥ねのける。
鋼の合わさる、甲高い音。
それが合図だった。モレアの兵たちは、いっせいに二人に斬りかかった。
ユテラルドは左肩の痛みも忘れて、夢中で剣を振った。
リヤナがさりげなく彼を庇いながら、自分も敵を斬り伏せていく。
正面の敵を突き、右側から襲いかかってきた相手を叩き伏せる。ユテラルドの左側を狙った敵を、素早く倒す。
人を庇いながら戦うのは、容易なことではない。リヤナの力量は本物だった。
レステアは執拗にユテラルドだけを狙ってきた。鋭く突きかかっては飛びすさるという戦法で。
彼女は優秀な使い手だった。もちろん、体力でも技量でも、ユテラルドやリヤナには遠く及ばない。だが、正確で大胆な剣さばきである。

風が強さを増した。砂を巻き上げ、戦士たちを包みこむ。
ユテラルドの息があがり始めた。普段ならばこんなことはないのだが、肩からの出血が急激に体力を奪いつつある。
それに気づいたモレア兵たちが勢いを取り戻した。
リヤナは奮闘したが、ユテラルドを庇いながらでは限界がある。二人を囲む輪が、少しずつ狭まってゆく。
一人の兵士が、ユテラルドに向けて斬りつけた時だった。
躱そうと身体をひねったユテラルドは、一瞬よろめいた。
砂が目に入ったのである。一度バランスを崩すと、失血のため体力を欠いている身体は、持ち直せなかった。
瞬間の出来事だった。しかし、レステアはその隙を見逃さなかった。
気合いとともに、レステアは剣を振り下ろした。
高々と掲げられた剣が、光を反射する。勝負は決まったかに見えた。一撃が頭蓋に決まっていれば、間違いなくユテラルドは死んでいただろう。
しかし、さすがにユテラルドは並の使い手ではなかった。
あわやの瞬間、身体を引いてレステアの剣を躱し、その無理な体勢から一撃を繰り出したのである。

肉を斬る嫌な音がした。
その一瞬、すべての動きが停止した。
モレア兵たちは唖然として、ここまで彼らを率いてきた少女を見つめた。
ユテラルドの剣先が、彼女の左胸を正確に貫いていた。
レステアは手を広げた格好で、まだユテラルドを睨みつけていた。
ユテラルドはその視線を受け止め、荒い呼吸をしながら、剣を引き抜いた。
鮮血が噴き上がる。レステアは驚いたような顔をして、一歩よろめいた。その手から、剣が落ちた。
レステアの小さな身体が、崩れるように倒れた。
同時に、ユテラルドも膝をついていた。緊張の糸が途切れてしまったのだ。
モレア兵たちは我に返った。彼らはうろたえ、どうしていいかわからないようだった。戦を続けるのか、このまま逃げ散るのか、それすらも判断できずにいるようだった。
「――ここまでだ」
声を張りあげたのはリヤナだった。
彼は倒れたユテラルドを抱き起こし、モレア兵たちを見回した。たった今まですさまじい剣を振るっていた青年とは思えないほど、静かに落ち着いた目で。
「終わりにしよう。君らの指揮官は倒れた。これ以上傷つけあっても意味がない」

「終わりにしよう。君らの指揮官は倒れた。これ以上傷つけあっても意味がない」



モレア兵たちは戸惑っていた。
そのうちの一人が、剣を投げ捨てた。
「おい」
誰かが咎めるような声をあげたが、剣を捨てた兵士はつぶやいた。
「――彼の言う通りだ。指揮官がいなければ戦いは続けられない」
「しかし」
「手当てをしたほうがいい」
兵士たちはレステアを見た。
うつ伏せに倒れている。背中から噴き出した血が、服を染めている。身体の下にも、赤い染みが広がりつつあった。
彼女がもう虫の息であることは、誰の目にも明らかだった。
「――運ぼう」
モレア兵が彼女の身体に手をかけようとした。
その時、ユテラルドが口を開いた。
「待て」
モレア兵たちが、ハッとして身構える。ユテラルドがまだ戦いを続けるつもりなのかと疑ったためだ。

しかし、彼は続けた。
「彼女と——レステアと少し話がしたい。時間をくれ」
「ユテラルド」
リヤナが気遣った。
「彼女はもう意識がない。君も深手を負ってる。手当てが先だ」
「いやだ」
ユテラルドは、リヤナの腕から逃れるように身体を起こして言い張った。
その彼に応えるように、倒れていたレステアの背がかすかに震えた。
ゆっくり、首が持ち上げられる。腕が、弱々しく身体を支えようとしている。
モレア兵が助けようとしたが、レステアは力ない声で拒んだ。
時間をかけて、彼女は起き上がった。膝をつき、だらんと両手を落として、壊れた人形のように。
敗走を続けても決して輝きを失わなかった瞳から、光が失われていた。
「……私、は」
喉の奥から、言葉の塊を押し出すように、彼女はつぶやいた。
「化け物じゃ、ない」
レステアは、手もとに落ちていた剣をつかんだ。

握るだけの力も、ほとんど残っていないようだった。
彼女は長い時間をかけて、それを両手で捧げるようにようやく持ち上げ、震えながらその剣先を自分の胸に当てた。
見守る者たちは息を呑んだ。レステアは、このままゆっくり死んでいくより、自分の胸を突いて死ぬことを選ぶのだろうか。
だが、彼女はそうしなかった。
彼女は剣をゆっくり動かして、自分の服を裂いた。
襟の詰まった、男の服が、喉元から裂かれる。
彼女の肌があらわになった。
レステアに羞恥はなかった。白い、しなやかな裸身を男たちの前にさらして、レステアは満足げに笑った。
ユテラルドのつけた致命的な傷が、まだ血を噴き出し続けている。しかし、全員の視線が集中したのは、その傷痕ではなかった。
レステアの左胸。そこには異様なものがあった。
あざ——というより、醜く引き攣れた火傷の痕である。それは彼女の左胸に大きく広がり、肩にまで達していた。
黒い花が開いたかのようだ。元の肌が美しく白いだけに、その痕は痛ましかった。

リヤナが呆然（ぼうぜん）としてつぶやいた。

「レステア……君は……その傷痕は……」

「クレスト」

レステアは弱々しく答えた。

「ここに、あった。呪（のろ）いの烙印（らくいん）が。父が、生きていた頃――私に、いつも、襟の詰まった服を着せて、言い聞かせた」

レステアは剣を取り落とし、目を閉じた。

「誰にも、見せてはいけない。これは、呪いの印だから。私には、父の言うことが、よくわからなかった。父が、正しかったのを、知ったのは、あの事件の後だ――」

レステアは再びゆっくり目を開いた。

濁（にご）った目が、ユテラルドを見据（みす）える。

彼はみじろぎもせずに、レステアの火傷の痕を見つめていた。

「父を殺した少年は、私と同じ、呪いの烙印を持っていた。その力が爆発して、父たちを殺したのだと――そう知って、私は狂いそうになった。クレストが、父を殺した。それと同じ印が、私のこの胸にも刻（きざ）まれているなんて」

レステアの顔が歪（ゆが）んだのは、痛みのためなのか、それとも怒りのためなのか。

「許せなかった。父を殺した少年が。そいつと同じ印を持った自分が。だから――だから、私

は――」

語尾は不明瞭にぼやけた。彼女の瞳から、いよいよ光が薄れてゆく。意識が霞んでいるようだった。

彼女が最後に、ほとんど唇の動きだけでつぶやいたのは、

「私は、怪物じゃ、ない」

という一言だった。

ずるずるとレステアは倒れた。最期の力を使いきって。

モレアの兵士が抱き起こした時には、すでに彼女は事切れていた。濁った目で宙を睨んだまま。

モレア村に、鐘の音が響く。

人の住まない家、手入れをされない荒れた畑の上に、清らかな音が流れてゆく。

レステアの死を確認したストルタ軍は、一時的に休戦を認め、その葬儀を行なうことを許した。

教会の鐘楼に登ったのは、三人のモレア兵だった。彼らが、使われていない鐘をついて、レステアを死出の旅へと送り出したのだった。

牧師はいない。死者の家族もない。レステアを見送るのは、最後まで彼女のそばで戦ったモ

レアの兵士たちと、彼女の宿敵であったストルタの数名だった。
リヤナとアルフトアインが立ち会った。フェルクは嫌がって顔を見せなかった。ユテラルドは、負傷を理由に引きこもっていた。
人手が足りないため、あくまでも略式の葬儀である。死者に白い服を着せ、木箱を改造した棺桶に入れて、墓地に埋葬するだけだ。
モレアの墓地には、彼女の父が眠っている。その隣に新たに彼女を埋めることになった。モレアの兵士たちが墓穴を掘った。
棺桶の蓋を閉める直前に、リヤナが摘んできた花を亡骸の上に播いた。
アルフトアインが、
「優しいな」
と、からかったが、誰も笑わなかった。
彼女の死に顔には、生前の激しさはなかった。おだやかな、ごく普通の人生を生きた幸福な少女のような微笑みを浮かべていた。
むろん、胸の傷痕も服で隠されている。彼女が二つの無残な傷痕を持っていることは、外見からはわからなかった。
蓋が閉められ、上から土がかけられる。
全員、頭を垂れて祈りを捧げた。

その人生と同じく、短く、簡素な葬式が終わった。

リヤナはアルフトアインと肩を並べてモレア村を出ると、ストルタ軍が駐留している天幕へと帰った。

葬儀が始まる前から、リヤナには不思議に思うことがあった。彼は大柄な傭兵を見上げて、言ってみた。

「アルフトアイン、ちょっと意外だったよ」

「何が」

「君が彼女の葬儀に参列するなんて……」

アルフトアインはリヤナを見下ろし、不審そうに目を細めた。

リヤナは言い換えた。

「いや、誰の葬儀であっても意外だったかもしれない。君はそういうことに関心がないのかと思ってた」

「人の生き死にに関心がないと言えるほど、俺は達観した人間ではない」

「うーん……そういう意味じゃなくて」

リヤナはアルフトアインが苦手だ。こうして二人きりで話すのは、考えてみれば、初めてのことだった。

　アルフトアインは優れた戦士だし、経験も豊富だ。リヤナは彼に好意を感じてはいるが、しかし、自分と彼とでは立っている地平が違いすぎることを痛感していた。
　同じ戦場で戦い、生死をともにしてきたが、リヤナには決してアルフトアインを理解することはできない。時折、わかったような気がすることがあっても、それはただ影を見て実体を判断するようなものだ。真の意味で彼を知ることは、決してできないだろう。
「儀式とか、形式とか、君はそういうことには興味がないんじゃないかと思ったんだ。でも、君が来てくれてよかった。レステアは敵だったけれど、彼女の戦いぶりは尊敬に値するものだったからね……彼女を見送ることができてよかったと思うよ」
　アルフトアインは馬鹿馬鹿しそうなため息をついただけだった。
　リヤナはそんな彼を横目で見て苦笑した。
「――彼女の胸のあざのことだけど」
「ああ？」
「あれは、本当にクレストだったんだろうか」
「何？」
「クレストを持つ人間は一生その運命に呪われる。ちょうど、ビリヤナの森が人々を苦しめるのと同じように。……ユテラルドがたびたび言ってた言葉だ。クレストがそれほどまでに人の運命を左右するものならば、たとえ焼いたとしてもその力を失うことはないんじゃないかと思

うんだ」
「では、彼女のあざはクレストではなかったと？」
「僕はそう思う」
リヤナは首を振って、目にかかりそうな前髪を払った。
「考えてみたら、クレストがどんな形状をしているものなのか、ほとんどの人間は知りはしないんだ。実際にクレストを持っているユテラルドのような人以外にはね。レステアの胸にあったのは、クレストではなくただのあざだったんじゃないだろうか。復讐のために――ユテラルドを憎み続けるために、彼女は曖昧なあざをクレストと信じて、自分を追い詰めなければならなかったんじゃないだろうか。それが真であるか否かにかかわらず」
「――焼いてしまったために、ただのあざをクレストを思いこむことがますます容易になったというわけか。皮肉だな」
リヤナはうなずいた。
「痛ましいことだよ。もしも彼女が過酷な運命を負わず、平和な生活を送っていたなら、クレストにもパルミラにも興味を惹かれなかったと思う。自分の肌を焼くようなこともなかっただろう。結局彼女は、クレストの幻影に狂わされた一人だったのかと――」
リヤナは言葉を切った。
アルフトアインが、ほとんど聞いていないことに気づいたからだ。

彼は視線を落として、黙って歩いていた。
いつもより少し悲しげな、しかしおだやかな顔をしているようだった。だが、何を考えているのかは、リヤナにはわからなかった。
やがて、天幕の集落が見えてきた。
二人は心もち足を速めた。
アルフトアインが言った。
「もう、俺の仕事はないな」
「え？」
リヤナは驚いてアルフトアインを見上げた。
「戦いは終わりだろう。俺のすることは、ここにはもう残っていない」
彼が何を切り出そうとしているのかはわかった。
戦争が終われば、傭兵は軍を離れる。また新たな戦いを求めて、旅立つのだ。
それはリヤナにもわかっていたし、引き止める気もなかった。
だが、これまでともに戦い、四剣主と並び称されてきた相手に対して、一抹の寂しさを感じずにはいられなかった。
リヤナは心から言った。
「行ってしまうつもりなのかい？　僕は……もう少しのあいだ、君に助けて欲しいんだけど、

アルフトアイン」

「何を助けるって？　森の伐採の手助けならごめんだ」

「そうじゃなくて。モレア兵はまだ残ってるし、徹底的に抵抗を続けるつもりの連中だっているし……」

　アルフトアインは肩を震わせるようにして笑った。

「レステアはもういない。残りの連中の追撃など、おまえらにとっては朝飯前だろう。俺の出る幕じゃない」

　リヤナは言葉に詰まった。

　確かに、アルフトアインの言う通りだった。

　戦いの日々は、じきに終わる。これからは、リヤナがずっと望んでいた新しい時代になる。人々が力を合わせてビリヤナの森を切り拓き、豊かなフォントレールを築いてゆくことになるのだ。

　待ち望んだ結果であったはずなのに、リヤナの心は晴れなかった。苦しい戦いを続けてきた日々が、急に懐かしく感じられた。

　リヤナは心残りを振り切るようにうなずいた。

「じゃ、お別れなんだね」

「ああ」

「元気で。どこかで君の噂を聞くことがあったら、無事を祈ることにするよ」
「おい、そんな呑気なことを言っていていいのか？　忘れるなよ、俺は報酬次第でどちらにでも転ぶ傭兵だ」
アルフトアインは呆れたように釘を刺した。
「次に会う時は敵かもしれない。俺は、顔見知りにだって、容赦はしないぜ」
「――もちろんさ。僕だって、君に負けないぐらい、もっと強くなっているよ」
アルフトアインは、リヤナの無邪気さに驚いたのか、もう何も言わなかった。リヤナは笑って、視線を逸らせた。
豊かに葉を茂らせたビリヤナの森が見える。
大地の養分を吸い上げて、周辺の土地を痩せさせている――憎むべき存在であるはずなのに、今はなぜか、森の緑が嬉しかった。青々と茂る葉が、フォントレールの未来を象徴しているようにすら思えた。
リヤナは、アルフトアインと別れて、ユテラルドが休んでいる天幕へと向かった。
天幕の中は薄暗く、外の陽射しに慣れたリヤナの目には、内部の様子がなかなかわからなかった。
「ユテラルド？　具合はどう？」

彼が奥で横たわっているものと思って天幕に入っていったリヤナは、二、三歩足を進めて、驚いて立ち止まった。

ユテラルドは寝ていなかった。天幕の中央に置いた卓子に向かって座りこんでいた。両腕を卓子について、うなだれている。

彼が肩に負った傷は思ったよりも深く、しばらくは安静にしていたほうがいいと診断されていた。だから、てっきり横になっているものと思っていたのだが。

リヤナは目を瞬き、気遣って声をかけた。

「何をしているんだ？　起きてちゃいけないよ。無理をすると、熱が出てしまう。肩の傷、早く治さなきゃ……」

ユテラルドは顔を上げた。

リヤナは彼と向きあって腰を下ろした。

ユテラルドの顔をのぞきこむ。薄暗い天幕の中では、表情がよくわからなかったが、ひどく思い詰めた気配は感じ取れた。

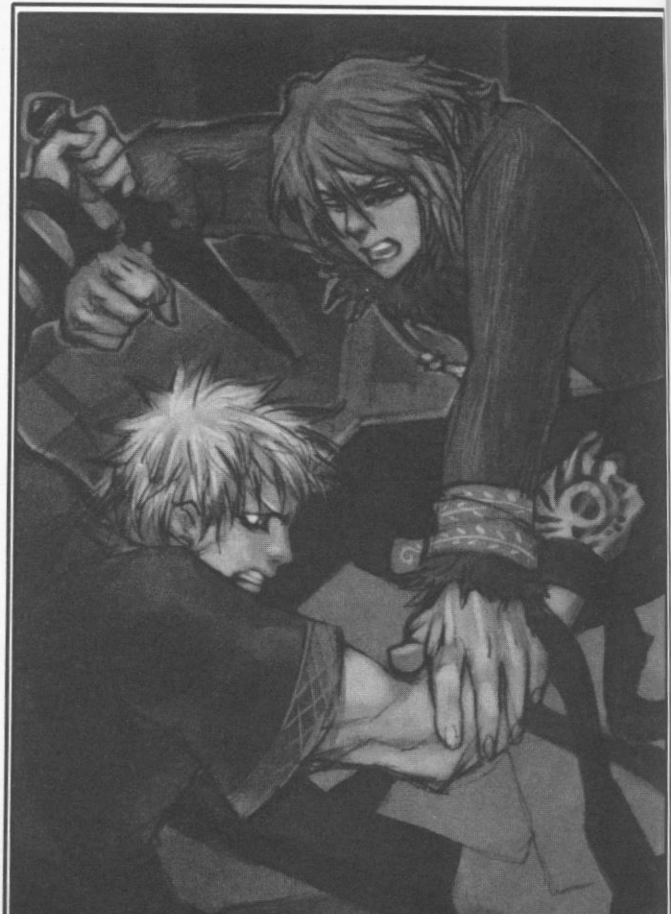
「ユテラルド……？」

囁きかけたリヤナは、びくっとして身体を退いた。

ユテラルドがおもむろに手を持ち上げたのである。彼はその手に短剣を握り締めていた。しかも、利き腕ではない、左手に。

短剣をゆっくり自分の顔の前にかざし、ユテラルドはしばらく黙っていた。
リヤナは友人を凝視した。張り詰めた空気を破るのが怖くて、声が出なかった。
「――考えたんだ」
ユテラルドはかすれた声で言った。
「レステアの死を見届けてから、ずっと考えていたんだ。なぜオレは、彼女と同じようにしなかったんだろうって。彼女が自分のクレストを傷つけたのと同じように、オレもやればよかったんだ。オレは……このクレストを厭いながら、こいつから逃げなかった。布で隠して、目を背けてきた」
リヤナは何度も瞬いた。ようやく、暗さに目が慣れ始めていた。
ユテラルドの顔には表情がなかった。うつろな、空洞のような目がリヤナを見ていた。
いや、視線はリヤナに向けられていたけれど、彼が見つめているのはどこか別の時空のようだった。
「もっと早く、決断すればよかったんだ。運命から逃れるために」
ユテラルドはそっと剣を下ろした。
刃先で、右手に巻いた布を切断する。
布が落ちて、呪いの烙印があらわになった。それは、薄暗い天幕の中でも、ほんのり明るさを帯びているように見えた。

「――シャルアミを殺したこの烙印を、もっと早く斬り捨てるべきだったんだ。オレは」
ユテラルドは刃先で軽くあざをなぞった。短剣を握る左手は、かすかに震えていた。刃先が止まった。
短剣の柄を握る手に、ぐっと力がこめられた。
リヤナはとっさに立ち上がり、叫んでいた。
「やめろ、ユテラルド」
手を伸ばし、短剣を奪い取ろうとした。
ユテラルドはしっかり握って離さなかった。揉みあいになり、リヤナは思いきってユテラルドの左肩をぐいっと押した。
呻き声が漏れる。ユテラルドは短剣を取り落として、卓子に突っ伏した。
リヤナは剣を奪い、息をはずませてユテラルドを見た。
ユテラルドは顔を上げて、恨めしそうな声で言った。
「……おまえ、思いきり突いたな！」
「剣を離さないからだ」
「怪我人だぞ、オレは。いたわれ！」
「怪我人なら、怪我人らしくしていろよ」
叱りつけるように言うと、ユテラルドはぷいっと顔を背けた。



ユテラルドは顔を上げて、恨めしそうな声で言った。
「……おまえ、思いきり突いたな！」
「剣を離さないからだ」
「怪我人だぞ、オレは。いたわれ！」
「怪我人なら、怪我人らしくしていろよ」
叱りつけるように言うと、ユテラルドはぷいっと顔を背けた。

時々、この友人は妙に子供っぽい仕草をする。
リヤナは言い聞かせた。
「頼むから、馬鹿なことはやめてくれ」
「馬鹿だと?」
「自分の身体を傷つけないでくれ」
「レステアは自分のクレストを焼いた」
「それは……」
レステアのあざは、クレストではなかったのではないか。
その言葉が喉まで出かかったが、リヤナは口をつぐんで飲みこんだ。
その可能性を示したところで、ユテラルドの慰めになりはしないと気づいたからだ。かえって彼を混乱させ、自棄にさせかねない。
リヤナは慎重に続けた。
「彼女と君とは違うよ」
「――違わない」
ユテラルドは、卓子の上に置いた両手を握りしめた。
「アルフトアインが言ったぜ。オレと彼女は似ているって。そう、確かにオレたちは同じものを持っていた。相手を憎む心。自分の運命を呪う心。それにクレストだ。オレたちは似た者同

士だった。だからあんなにも相手を憎んだのさ」
「君は彼女じゃない」
リヤナは辛抱強く言い聞かせた。
「レステアは孤独だった。家族を失った後、友達も作らず、ずっと一人で戦ってきた。君は違うじゃないか」
「違わない。オレは……」
「君には、僕がいるよ」
「……」
ユテラルドは驚いたようだった。
その表情は、リヤナに、初めて会った頃のユテラルドを思い起こさせた。
──友人の息子を預かることになったよ。おまえより一つ年上だ。仲良くしてくれ。
いきなり父からそう言われた時、リヤナはびっくりした。それから、嬉しくなってはしゃぎ回った。
なぜ急にユテラルドが引き取られることになったのか、その理由は詳しく知らされなかった。
何か暗い事情があるらしいとは思ったが、リヤナは聞こうとはしなかった。
そんなことより、一人っ子の自分に、兄のような、親友のような相手ができることが、ただ

嬉しかった。リヤナはその日を心待ちにした。

けれども、現われたユテラルドは、ひどく無愛想で、無口で、敵意に凝り固まっているように見えた。

話しかけても、ほとんど返事をしてくれなかった。なんとか面白い話題を持ち出そうとしても、乗ってきてくれなかった。

リヤナは我慢強く、ユテラルドにつきあった。たびたびユテラルドの部屋を訪ね、他愛ない話をしょっちゅう持ちかけた。簡単な返事を聞くことができると、それだけで一日じゅう嬉しかった。

やがて、少しずつではあるが、ユテラルドは心を開いてくれるようになった。最初のうちは迷惑そうにしていたリヤナの軽口にも、嫌な顔をせずに応じてくれるようになった。

それでも時折、怒りを爆発させることはあった。リヤナのちょっとした言葉が気に障るらしく、激しい罵声を浴びせかけたりするのだ。そうして荒れ狂った後で、ひどく落ちこんで部屋に閉じこもってしまったりするのだ。

リヤナはこの友人に手を焼いたけれど、それでも彼が好きだった。彼が時々見せる暗い表情も、爆発させる怒りも、すべて含めて彼が好きだった。

リヤナの父は、最初のうち、ユテラルドとリヤナが仲良くなれるのかと心配していたようだった。だが、やがて彼は呆れたように笑うようになった。

——まるで本当の兄弟のようじゃないか。
そう言われるたびに、リヤナは「それ以上だよ」とすまして答えた。

あれからずいぶん月日が流れた。
リヤナとユテラルドは、ともに剣の腕を磨いて、ストルタ軍に志願した。
戦場に出て、何度も危険な目に遭いながら、生き抜いてきた。気がつけば、二人とも「四剣主」と恐れられるほどの戦歴を刻んでいた。
今はもう、かつての子供っぽい二人ではない。だが、今ユテラルドの表情を目の前にして、リヤナは昔に帰ったような気がした。
「僕は、君を傷つける者を許さないよ。たとえそれが君自身であってもね」
リヤナの言葉に、ユテラルドは鼻白んだように肩をすくめた。
リヤナは立ち上がり、ユテラルドの肩に——負傷していない右肩にそっと手を置いた。
「アルフトアインは、ストルタ軍を離れるってさ」
「……え？」
「戦は終わりだ。彼はまた新しい戦場を求めるんだろう」
「……そうだな」
ユテラルドはうなずいた。

リヤナは続けた。

「だけど、君にはまだ働いてもらわなきゃいけない。君は傭兵じゃなくて、フォントレールの支柱なんだから」

ユテラルドは、何を言いだすのかという顔でリヤナを見た。

リヤナは笑った。

「だから、怪我をちゃんと治してくれよ。ほら、さっさと横になれ。君には、仕事が山のように残ってるんだからさ」

「……もっと優しい言い方はないのか」

ユテラルドは不服そうな顔をしながらも、リヤナに言われた通り、奥の寝台に向かった。

ユテラルドは順調に回復していった。

口の悪いフェルクが「けだもの並み」と評したほど、傷の治りが早かった。もともとの体力があったせいでもあるし、リヤナの看病が功を奏したためでもあった。

まもなくユテラルドは天幕を出て、歩き回るようになった。

ビリヤナの森の伐採は遅々として進んでいなかった。やはり、モレア残党の工作に手を焼いているのである。レステアを失ったとはいえ、森を守ろうとする彼らの意志は強固だった。

アルフトアインはすでに姿を消していた。彼らしく、手続きをすませてこれまでの報酬を受

け取ると、さっさといなくなってしまったのである。行く先は誰も知らない。

フェルクは「せいせいした」とうそぶいていたが、喧嘩相手がいなくなって、少々物足りなさそうでもあった。

ある夕刻――。

ユテラルドは誰にも告げずにストルタ陣営を離れた。

愛用の剣と、数日分の食糧と水。それらを身につけて、ただ一人、ビリヤナの森へ向かったのである。

森には、数人のモレア残党が逃げこんでいる。そういう情報を、伐採計画を進めている兵士たちの噂で伝え聞いたからだった。

リヤナに言えば、きっと「あせるな」と止められるだろう。リヤナは理性的で、計画的だ。斥候兵を出して、本当にモレア兵がいるのかどうか、いるとしたら森のどの区画にひそんでいるのかを確認し、それから十分に武装を整えて……と段取りを踏もうとするだろう。

ユテラルドは、それを待てなかった。

身体の奥で、なかなか燃え上がらない、しかしどうしても消すことのできない火がくすぶっているのだ。

レステアの死を見届けて以来、彼はその火にちりちりと心を焼かれているのだった。

右手を斬り落とそうとした時、リヤナに止められた。彼の説得は確かにユテラルドの心に響いたけれども、彼の火を消せはしなかった。

もう、自分を傷つけるようなことはしない。だが、それなら別の方法で決着をつけなければならない。

ストルタ。そしてモレア。長い戦いに、レステアが自分なりの決着をつけたように。

ユテラルドは、ユテラルドの決着をつけなければいけないのだ。それができない限り、戦は終わらない。

考えた揚げ句の単独行動だった。リヤナやフェルクの助けを借りるわけにはいかない。

自分の心の奥から湧き出してくる何かに衝き動かされて、ユテラルドは森を目指した。

誰にも見咎められずに、彼は森に入った。

森に踏みこむと、急に空気がひんやりと冷たくなった。

陽射しが遮られるせいばかりではないようだ。森の清浄な呼吸が、空気をたえず鎮め、余計な熱を奪っているのだった。

ユテラルドは立ち止まり、立木にそっと手を当ててみた。

ざらついた、なんの変哲もない樹の表皮である。しかし、その奥の樹液の流れを——生命の流れを感じ取れるような気がした。

ビリヤナの森は、ユテラルドにとって苦い記憶の源である。しかし同時に、彼はこの森に懐かしさを感じずにはいられなかった。それは、この森の間近に暮らす人々すべてに共通の感情であった。

ビリヤナの森は、太古の昔から、いつもここにあった。貧しい人々を見下ろすように、青々と葉を茂らせ、葉ずれの音を鳴らしていた。

恐ろしく、同時に優しい――神々にも似た矛盾の存在。それがビリヤナの森だった。

エディンベリー大陸に生まれた者は、決してビリヤナの森から逃れられない。それは、二重の意味で真実だった。ビリヤナの森が生み出す貧しさは、人々の生活を苦しめずにおかない。そして、ビリヤナの森が心に落とす微妙な影からも、人はやはり逃れることはできないのだ。憎くて、おぞましくて、しかし懐かしい。ビリヤナの森は、この大陸の民にとって、まさに故郷そのものだった。

ユテラルドはどんどん奥へ進んで行った。

森の中は、想像していたよりも暗かった。梢の合間から光が射しこんではいるが、進むにつれてそれも薄れてきた。

けれども、森は生命に満ちていた。やかましいほどに、鳥や獣の鳴き声が響きあっている。薄暗がりに目が慣れると、密生した植物の合間に、おかしな形の虫が張りついているのがわかる。時折、ユテラルドの頭をかすめそうなほどの低空飛行で、鳥が飛んでゆく。

ユテラルドは、モレアの残党を追っているはずだった。だが、時々、その目的を忘れそうになった。

歩き疲れると、樹の根に腰を下ろして休息を取る。水筒から水を飲み、ビスケットをかじる。そうしてぼんやり鳥の声を聞いていると、このまま自分がこの森に取りこまれてしまいそうな、けだるい心地よさを感じるのだった。

いけない。これは森の魔力だ。

自分にそう言い聞かせ、あわてて立ち上がる。しかし、しばらく歩くとまたどうしようもない倦怠に襲われ、腰を下ろす。もう二度と歩きたくなくなる。

目を閉じて、うとうとする。長いのか短いのかよくわからない眠りをむさぼっているうちに、甲高い鳥の声にはっと気づく。あわてて立ち上がり、また歩き始める。

そんなことを繰り返しながら、ユテラルドはだんだん森の奥深くに入りこんでいた。当初考えていたよりも、もっとずっと深いところへ。

モレア兵の姿は見かけなかった。彼らの声や足音も聞こえなかった。誰かが通り過ぎたように、草が踏みつけられている場所を何度か発見したが、それも、モレア兵なのか、伐採の調査のために入りこんだストルタ兵なのか、あるいは別の動物なのか、判断がつかなかった。

奥へ。ひたすら、森の奥へ。

どのくらいの時間歩き回ったのかわからない。幾日かが過ぎたはずだ。きっとリヤナたちが

心配し、捜し回っていることだろう。
ユテラルドは夢の中をさまようように、森をただ歩き続けた。

それは、突然現われた。
頭上を覆っていた厚い葉のかさなりが、ふいに途切れたのである。
明るい陽が射しこんでいた。その傾きから判断すると、午後から夕方に向かう黄金色のひとときではないかと思われた。
ユテラルドは目をこすった。
目の前に、一本の巨木がそびえ立っていた。
周囲の木々とはまるで違う、圧倒的な存在感を放っている。太い幹と、大きく横に張り出した枝。大地を盛り上げるような太い根。葉の色までが、周囲の緑を色褪せて見せてしまうほどに、みずみずしく鮮やかだった。
うるさく聞こえていた鳥の声が、いつの間にかやんでいる。獣や虫も影をひそめた。あたかも、この樹の周囲は聖なる玉座であり、誰も近づくことはできないのだとばかりに。
この樹はまさしく、森の王。これこそが、世界の中心たるビリヤナの古木なのだと、ユテラルドは直感的に悟った。
ユテラルドはしばらく立ち尽くしていた。樹から放射される、火よりも、風よりも力強い気

に圧されて。

ようやくその呪縛から解放されると、彼はゆっくり、一歩ずつ踏みしめるように、巨木に近づいていった。

リューベーン帝国の伝説が、脳裏に蘇る。

——かつて、栄華を誇った帝国があった。彼らは驕慢の罪を犯し、世界の母なるビリヤナの樹を我が物にしようとした。天の怒りに触れた彼らは、一夜にして消滅した。

ユテラルドは大樹を睨みつけた。

太古の昔から、この樹はここに王として君臨してきたのだろう。

周囲の養分をことごとく吸い上げて。

人々のいとなみを嘲笑って。

運命に護られて。

ユテラルドは、自分でも意識しないまま、腰の剣に手をかけていた。

引き抜く。刃の輝きを目にした瞬間、ユテラルドの心にくすぶり続けていた火が、突然激しく燃え上がった。

彼は、はっきりと悟った。

敵は、レステアではない。モレアでもない。彼の家族を殺した者たちではない。

ユテラルドの運命を弄んだ、真に憎むべき存在は、ここにあった。戦場ではなく、この一見

平和な森の中に。ストルタ村の、目と鼻の先に。
憎悪。しかし、これまでずっと心にくすぶり続けてきた燠のようなそれとは違う。もっと透き通った、冷たい、氷のような憎悪が彼を凍らせようとする。
ユテラルドはぐっと剣を握りしめると、叫び声とともに斬りかかった。
剣先が、ビリヤナの樹の幹に食いこんだ瞬間——。

世界がはじけた。

まばゆい光がユテラルドを包みこむ。
目を開けていられず、彼は手で目を覆ってよろめいた。
閉じたまぶたの裏に、色彩が爆発する。目を閉じていてもなおわかる。すさまじい光の奔流がユテラルドを包んでいる。
ユテラルドは光の奔流に弄ばれ、流され、揺さぶられながら思い出した。これと似た光景を、昔、体験したことがある。
あの運命の日。シャルアミが殺されると思った瞬間。
クレストが熱くなり、白い光があたりを包みこんだ。
あの時と同じだ。いや、もっともっと強い力がユテラルドの身体に漲り始めている。

彼は気づいた。熱を帯びているのはクレストばかりではない。ビリヤナの樹が、クレストの力に反応するかのように輝き始めていた。幹も枝も葉も、すべてが白銀の結晶と化したかのように、まばゆい光を放っていた。

――共鳴しているのか？

ユテラルドは目をみはって、ビリヤナの樹を見つめた。ビリヤナの輝きに合わせて、彼の手のクレストも光を強める。ビリヤナの樹から力を分け与えられたかのように、ユテラルドの身体が熱くなった。

――シャルアミ。

ユテラルドは目を閉じたまま、声にならない声をあげた。

なぜその名を呼んだのか、わからない。長いあいだ、封じてきた記憶なのに――優しい少女の顔がまざまざと思い出される。

シャルアミが、ユテラルドを招くように微笑んでいる。

ユテラルドの身体は、弾き飛ばされるように倒れた。

意識が遠のいてゆく。

最後に、かすむ夢のような景色の中で思った。

——これが、クレストを負いし者の運命か。

後悔はなかった。これが彼自身の選んだ決着だったから。

シャルアミが、くるくると跳ねるように踊っている。明るい笑顔をふりまいている。

夢の少女へ、ユテラルドはかすかに微笑み返した。

次の瞬間、彼は完全に意識を失った。

巻末スペシャル対談

竹内将典
（エヴァーグレイス　プロデューサー）

×

高瀬美恵

『エヴァーグレイス』の真実が
いま明かされる……

ゲームのプレストーリーとして、ユテラルドをはじめとするストルタ四剣主の活躍と、それに対抗するモレア軍との戦いを描いた本書。今回、巻末スペシャルとして、『エヴァーグレイス』をプロデュースされた(株)フロム・ソフトウェアの竹内将典氏と、本書の著者である高瀬美恵さんの対談を掲載。ゲーム、小説をさらに盛り上げるとっておきのお話を語っていただいた。

クレストには2つの意味があるんです（竹内）

編集部（以下「編」）：いきなりですが、本書を読まれた感想をお聞かせいただけますか?

竹内将典氏（以下「竹内」敬称略）：そうですね、今回作家の高瀬さんにはプレストーリーを書いていただいたんですが、自分でゲームの設定は作っていたんですけど、ここまで考えていなかったんですよ。そういうこともあって、一読者として楽しく読ませていただきました。

高瀬美恵さん（以下「高瀬」敬称略）：ありがとうございます。

編：いま、考えていなかったとおっしゃいましたが（笑）？

竹内：もちろん、大まかなイメージとしてはありました。ただ、具体的に考えてはいなかったです。ユテラルドのキャラクター説明として、「ストルタ四剣主」や幼い頃の事件などは考えていたのですが、ディティールまでは……。今回小説にしていただけるということで、かなり大雑把にですが、概要をお伝えしたという感じです。

高瀬：書いていてちょっと思ったんですけど、ユテラルドたちがいるのはフォントレール統一国家なのに、なんで「ストルタ四剣主」なんでしょうか?

竹内：それはですね、ストルタ軍のほうがフォントレール連合国家よりも先にあったんです。設定にもあるんですが、4つの村があって、その中のモレアとスト



ユテラルド

ルタが始めは戦っていたんです。他の村は協力していなくて。で、戦いが進むうち、ストルタ軍の中で特に強い人たちがストルタ四剣主と呼ばれるようになった。そして、彼らの活躍もあって、ストルタは他の村の協力を得られるようになっていくんです。もしかしたら、リヤナあたりが仲介に入っているかもしれませんが……。まず、軍事同盟的に村と村が結びつきました。それがあとになって、統一国家であるフォントレールになるわけです。

高瀬：なるほど、今わかりました(笑)。あと、クレストっていうのは、具体的にはどういうものなのでしょうか？　設定だとイマイチ漠然としていて……。

竹内：僕の中では、『エヴァーグレイス』全体を貫くテーマとして「クレスト」があるんですよ。クレストを持つ者という設定自体は、中世で行なわれた魔女狩りの「魔女」をイメージして作りました。クレストを持つ人、もしくは持っていると言われた人が本当に忌み嫌われるべき存在なのか？　そうでないのか？　そういった価値観の違いから来る誤解というところを、ストーリーのテーマにしていますので。あと、クレストには2つの意味があるんです。1つは、ゲームや小説でも語られている忌み嫌われる存在として。もう1つは、万物の母という、世の中の流れをある程度コントロールできる超存在の声を聞ける人。また、その力を行使できる人の証。だからといって、他の人と変わらないんですけどね。でも人からは、悪いことを起こす病原体みたいに思われている。人が思っていたり噂していたりすると、本当になることってありますよね？　クレストもそんな感じです。本当は悪いことなど何も無いのに、いざ何か起こると、クレストを持っている人のせいにするみたいな。人の思い込みなんです。

(株)フロム・ソフトウェア
『エヴァーグレイス』プロデューサー
竹内将典
←続編の製作も決まり、シナリオを構想中という竹内氏。


↑高瀬さんです!

高瀬美恵
➡「写真はちょっと」ということで、シャルアミで登場の高瀬さん。

設定がしっかりしていたので、書きやすかった（高瀬）

編：今回の小説はゲームのブレストーリーにあたるわけですが、どうでした？　書きやすかったですか？

高瀬：そうですね、とても書きやすかったです。クレストがあって、リューベーンがあって、とか、ゲームのストーリー以外の設定がしっかりしていたので。

竹内：ブレストーリーなのに、「リューベーン」や「クレスト」、「パルミラ武具」とか、『エヴァーグレイス』のキーワードになる単語をいっぱい盛り込んでいただいてて（笑）、スゴイなって思いました。

高瀬：パルミラ武具の出し方は、ちょっと強引でしたけどね（笑）。ところで、四剣主のキャラクターは、どうでした？　竹内さんのイメージにあってました？

竹内：ピッタリでした。じつはアルフトアインに関しては、ほとんどノーアイデアだったんですよ。かえって、このお話で固まったかなと（笑）。

高瀬：私、いただいたキャラクターの設定を見たとき、あ、この人カッコイイって思ったんですよ（笑）。

竹内：僕は設定を考えるとき、わざと穴を残すんですね。あとで辻褄を合わせられるように（笑）。キャラクターの中では、アルフトアインがそうだったんです。でも、ユテラルドやフェルク、リヤナに関してはある程度イメージがありました。特にリヤナは自分のイメージ通りだったので、とにかくスゴイと思いました。



編：小説のヒロイン（?）のレステアなんですが、どうして敵役を女性に?

高瀬：ストルタ四剣主とか、このお話って出てくる人って男性ばっかりだったから(笑)。本当はシャルアミを出したかったんですけど、小説の時代ではもう死んだことになっているじゃないですか。ですから、他に女性を出したいと思って。

竹内：そういえば、レステアって本当にクレストを持っていたんですか? 1回目読んだときは、持っていると思ったんですけど、よくよく考えたら特に明記されてないし。

高瀬：どうなんでしょう? 設定ではクレストを持っている人ってかなり少ないですよね。だからそこら辺は、読む人にお任せします。

竹内：あと、図書館のシーンなんですけど、どうしてアルフトアインはレステアを逃がしたんですか?

高瀬：お話の都合上ですね(笑)。

竹内：僕なりにいくつか考えたんですよ。1回レステアの依頼を無下に断っているから、その借りを返すとか。そういうのもあるかなって思ったんですけど、全体を読んでみると、アルフトアインはそういう性格じゃないしなぁと…。

高瀬：最初はアルフトアインが、レステアに好意を持っているとか考えたんですけどね。でも、書いているうちにそんなヤツじゃないって思い始めて。もしかしたら、違う形で会わせたかったのかもしれないですね、ユテラルドとレステアを。2人が似ているって、アルフトアインが説明してたじゃないですか(笑)。



レステア

ゲームのシナリオが書きたいと思ったこともあります（高瀬）

編：高瀬さんはよくプレイされるんですか？

高瀬：はい、好きです。じつはゲームのシナリオを書きたいと思ったこともあります。でも、難しいんですよね。やっぱり私には小説があっていると思います。

竹内：そうですよね。僕も学生時代に小説を書いてみたことがあるんですが、ゲームのシナリオとはやっぱり違う。僕はゲームの方が合っているようですね（笑）。

編：具体的にどういうところが違うのでしょうか？

竹内：小説はいろいろな点があって、それを書き手が線で結んでいくものだと思うんです。でもゲームの場合は、作り手が点を用意するんですけど、線を結ぶのはあくまでもゲームのプレイヤーなんじゃないかと思うんです。そういった意味で、全然違うと思います。小説の中でユテラルドとリヤナがお茶を飲んでいるシーンが印象に残っているんですけど、あれって小説ならではの表現だと思うんですよ。ああいう穏やかな空間で、じつはハードな話をしているっていうシチュエーション。個人的には好きなんですけど、ゲームだと蛇足になってしまうんです。それに、ゲームの流れも止めてしまいますし。『エヴァーグレイス』の場合、ゲームの性質上そういった演出は向かないかなと。



フェルク

高瀬：では、ゲームの制作途中で切ってしまったエピソードがあるんですか？

竹内：あります。ユテラルドがリューベーンに行きますけど、じつはあれはシエナ（※1）が呼んだんです。シャルアミ編のオープニングで、ユテラルドがクレストを持っているというセリフをシャルアミに言わせようと思ったんですけど。オープニングが長くなってしまうというのがあって、あえて切りました。まあ、そこら辺はユーザーの方に感じていただこうと。本で言うところの、行間を読むっていうやつですね。僕は、結構行間を読んでもらうのが好きなんで……。

編：そういった意味では、ゲーム前のお話は今回の小説で埋めてもらおうと（笑）。

竹内：そうですね。プレストーリーとしてしっかりとしたものを作っていただいたので。じつは今回の小説の話、すごく楽しみにしていたんですよ。自分がシナリオを作る場合、そのときに出来る最大限のものを注ぎ込むわけですが、他の方が書かれると、自分が知らないものや考えもしなかったものが見られるじゃないですか。こういう形が今までなかったので、非常に刺激になりましたね。

編：今回のお話は公式なプレストーリーと言っていいですか（笑）。

竹内：ええ、僕的にはＯＫです。本当に良いものを書いていただいて、本当に僕としては嬉しかった。

高瀬：ありがとうございます。

竹内：今回は本当に面白かったので、1時間ぐらいで読み終わっちゃいました。いつもはもっと時間がかかるんですけどね。思わず、2回も読んじゃいましたよ（笑）。

（※1）シエナとは、ゲームでシャルアミを助け、ユテラルドを導く役割を持つキャラクター。ユテラルド同様、クレストを持っている。



続編も作ります。主役は誰でしょう…(笑)◆(竹内)

編：そういえば、『2』の制作がもう決まっているという噂を聞いたのですが？

竹内：いま別の仕事をしている最中なので、構想中というところですが。一応、主人公はこの小説に登場した人物になる予定です。ただ、タイトルが『エヴァーグレイス2』になるか、違ったタイトルになるかはまだわからないです。設定やストーリー自体はつながっていますが『エヴァーグレイス』のタイトルにも意味があるので、そこから少しずれてくるかもしれないから。

高瀬：『エヴァーグレイス』のタイトルにはどんな意味があったんですか？

竹内：『エヴァーグレイス』の意味は、「エヴァー」という単語と、「グレイス」という単語をあわせた造語なんです。「エヴァー」は、恒久とか、永遠という意味で、「グレイス」は、英語の辞書を引いていただくとわかるんですけど、4番目とか5番目に「神の寵愛」という意味があるんですよ。あと「優雅な」とか。この2つの意味を主要にすえています。じつは、万物の母っていうのはそんなに重要な存在ではなかったんですけど、タイトルを決めた時点で、もう少し重要な存在にしようと思ったんです。それで今の状態になったわけですが、とりあえずその2つの意味を、ゲーム全般にある程度反映させる形で作ってみました。

編：『2』では少し変わってくるかもしれないと？

竹内：そうですね。基本的なイメージとか世界観は同じですが、テーマやコンセプトは変わってきます。これは切り口って言ってもいいかもしれないですが。



➡高瀬さんです!

高瀬：先ほど、主役はこの小説の登場人物とおっしゃってましたが、アルフトアインという可能性もあるんですね（笑）？
竹内：いや、ホントにまだ構想中なので何とも言えませんが……。でもアルフトアインの場合は、衣装が異国風で別の大陸から来たという噂もある。そのうえ傭兵ということで、先程お話した穴が多いから、シナリオは書きやすいかもしれないですね。それに、今回の舞台であるエディンベリーも、明確な地形とか出さずに曖昧にしてますから、やり方はいろいろありそうですね。
編：でもアルフトアインはクレストを持っていないですよね。
高瀬：それなら、ユテラルドのお父さんとか？　そうなると『2』のエンディングではやはり殺されてしまうのでは？
竹内：それはないです（笑）。ユテラルドの父親が主役なら、彼がもっと若い頃の話になるでしょうね。今回クレストは忌み嫌われる存在でしたが、ユテラルドの父親の物語なら、クレストを持つ者が英雄として皆から慕われるという別の一面を出すという方法もあります。でも、ホントに『2』の製作は始まったばかりで、どうなるかはまだまだ決まっていませんから。いろいろ想像して、楽しみに待っていてください。
高瀬：アルフトアインが主役の続編、楽しみにしてます（笑）。
編：編集部としても続編を期待してます。本日はありがとうございました。
（2000年6月　都内にて収録）



エヴァーグレイス



機種●	プレイステーション2
メーカー●	フロム・ソフトウェア
ジャンル●	RPG
定価●	6,800円(税抜)
発売日●	2000年4月27日発売

物語は主人公ユテラルドが、異世界へ飛ばされるところから始まる。そこは100年前に突然大陸から消滅した帝国リューベーン。元の世界に戻るため、その鍵を握る魔人を追うユテラルド。冒険の途中、自分が殺してしまったはずの少女シャルアミと出会うが……。

ユテラルド編、シャルアミ編と2つのシナリオを持ち、ゲーム中に入手したアイテムはすべて装備できる「ドレスアップシステム」で話題を呼んだ、新世代3D・RPG。

◉高瀬美恵著作リスト

「クシアラータの覇王」全10巻（X文庫ホワイトハート）

「クシアラータの覇王」外伝2巻（同）
「破界伝」全7巻（同）
「禍つ姫の系譜」全5巻（同）
「東都幻沫録」1・2巻（同）
「ヴィアン・マーレの海首」全7巻（キャンバス文庫）
「リスメイヤ」全2巻（同）
「キャプテン・ルーシェ」（同）
「夏のダイヤモンド」（同）
「いざよい霊異記」（同）
「神々の谷」全3巻（同）
「戦国純情派」全3巻（スニーカー文庫）
「闇姫の迷宮」（同）
「月豹伝説」全3巻（花丸ノベルス）
「仮称タマの安穏な日々」（同）
「南風吹く日に」（ファンタジーノベルス）
「ルウヤとハル」（同）
「アンジェリーク」全3巻（あすかノベルス）
「ALUMA」（ぶんか社）

本書に対するご意見、ご感想をお寄せください。

■

あて先

〒101-8305 東京都千代田区神田駿河台1-8 東京YWCA会館
メディアワークス電撃ゲーム文庫編集部
「高瀬美恵先生」係
「菅原 健先生」係

■

電撃文庫

エヴァーグレイス

クレストを負(お)いし者(もの)

高瀬美恵(たかせみえ)

発行　二〇〇〇年八月二十五日　初版発行

発行者　**佐藤辰男**

発行所　株式会社**メディアワークス**
〒一〇一-八三〇五　東京都千代田区神田駿河台一-八
東京YWCA会館
電話〇三-五二八一-五二〇八（編集）

発売元　株式会社**角川書店**
〒一〇二-八一七七　東京都千代田区富士見二-十三-三
電話〇三-三二三八-八六〇五（営業）

装丁者　荻窪裕司（META＋MANIERA）

印刷・製本　あかつきBP株式会社

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。
定価はカバーに表示してあります。

ISBN4-8402-1614-2 C0193

電撃文庫創刊に際して

文庫は、我が国にとどまらず、世界の書籍の流れのなかで〝小さな巨人〟としての地位を築いてきた。古今東西の名著を、廉価で手に入りやすい形で提供してきたからこそ、人は文庫を自分の師として、また青春の想い出として、語りついできたのである。

その源を、文化的にはドイツのレクラム文庫に求めるにせよ、規模の上でイギリスのペンギンブックスに求めるにせよ、いま文庫は知識人の層の多様化に従って、ますますその意義を大きくしていると言ってよい。

文庫出版の意味するものは、激動の現代のみならず将来にわたって、大きくなることはあっても、小さくなることはないだろう。

「電撃文庫」は、そのように多様化した対象に応え、歴史に耐えうる作品を収録するのはもちろん、新しい世紀を迎えるにあたって、既成の枠をこえる新鮮で強烈なアイ・オープナーたりたい。

その特異さ故に、この存在は、かつて文庫がはじめて出版世界に登場したときと、同じ戸惑いを読書人に与えるかもしれない。

しかし、〈Changing Time, Changing Publishing〉時代は変わって、出版も変わる。時を重ねるなかで、精神の糧として、心の一隅を占めるものとして、次なる文化の担い手の若者たちに確かな評価を得られると信じて、ここに「電撃文庫」を出版する。

1993年6月10日
角川歴彦

ジーズ
電撃G's文庫

デ・ジ・キャラット

Di Gi Charat

1



菜の花こねこ

イラスト　コゲどんぼ／ひな。

発行◎メディアワークス



ジーズ
電撃G's文庫
ルームメイトノベル
佐藤由香の場合
早見裕司
Illustration 丸藤広貴
(Nest Corp.)
夏はやっぱりお姉さん!(でしょ?)
突然の同居人は、ナント3つ年上の女子大生!
はてさて………
発行◎メディアワークス


ジーズ
電撃G's文庫
悠久幻想曲3
Perpetual Blue
パーペチュアルブルー
2
センパイはそんな人じゃありません！
アスカリトVSルシード
勝負のゆくえは？
特製シール付き
紺野たくみ
イラスト／moo、福田道生
発行◎メディアワークス

電撃ゲーム文庫

カプコンの名物クリエイターが暴く!?
ゲーム制作の裏までわかる対談集

ゲームの巨人語録

岡本吉起と
電撃王編集部 編

岡本吉起と12人のゲームクリエイター

堀井雄二　金子一馬　坂口博信　山内一典
三上真司　小島秀夫　水口哲也　広井王子
入交昭一郎　宮本 茂　さくまあきら　岡田耕始

発行◎メディアワークス



DENGEKI BUNKO

エヴァーグレイス

クレストを負いし者

高瀬美恵

電撃文庫0479